

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

第 12 号

1997年3月

秋田県埋蔵文化財センター

シンボルマークは、北秋田郡森吉町白坂(しろざか)遺跡出土の「岩偶」です。縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

秋田県埋蔵文化財センター

研究紀要

第 11 号

1996年3月

秋田県埋蔵文化財センター

序

秋田県埋蔵文化財センターでは、昭和56年10月の設立以来、埋蔵文化財の発掘調査と報告書の刊行、県民を対象とした埋蔵文化財報告会などを実施し、埋蔵文化財の保護と普及に意を注いでまいりました。

また、職員の専門的な研究・報告・資料紹介などを中心とした研究紀要も刊行してまいりました。

近年の発掘調査では、歴史を多角的に復元するため自然科学系の関連諸科学を導入しております。「竹原窯跡出土須恵器の胎土分析」は、広域に流通、消費された須恵器の産地を同定する基準資料とすため、竹原窯跡で生産された須恵器の考古学的観察と理化学的分析を行ったものです。「秋田県出土の銭貨資料集成」は、将来のデータベース化に即応できるよう県内の発掘調査で得られた資料・工事等での一括資料などと文献資料を網羅したものです。「秋田県のヒスイ出土遺跡」も、資料集成を目的としたものです。資料集成は、埋蔵文化財センターの基礎的な仕事として位置づけられるものであります。

このほか、平成5年度の埋蔵文化財報告会での平川南氏による講演録を掲載しました。

本誌には以上の4篇を収録しました。これらの研究成果が広く活用されるとともに、一層のご指導を賜りますようお願いいたしております。

平成8年3月

秋田県埋蔵文化財センター
所長 富 樫 泰 時

目 次

- 竹原窯跡出土須恵器の胎土分析 三 辻 利 一・利 部 修 (1)
- 秋田県出土の銭貨資料集成 高 橋 学 (23)
- 《資料紹介》 秋田県のヒスイ出土遺跡 栗 澤 光 男 (75)
- 《講演録》 漆紙文書が語る古代史 平 川 南 (79)

竹原窯跡出土須恵器の胎土分析

三辻 利一・利部 修

1. はじめに

近年の考古学成果は、科学分析の参入によって目を見張るばかりの発展を遂げてきている。一遺跡の調査であっても、多くの関連諸科学を導入し、多角的な視野で歴史復元にアプローチしている場合も少なくない。^(註1) その一翼を担っている胎土分析の理化学的分析も、原材料の特定や製品の移動などに注目すべき成果が得られており、特に広域な流通圏をもつ須恵器の産地同定は多くの研究者の支持するところである。従来、肉眼観察による技法・含有物などの特徴で行っていた分析同定作業に、科学的なメスが加わった訳である。

東北地方においても、古代の北方史研究が盛んになるにつれて、該期土器の生産と流通に関する関心が高まってきた。例えば、青森県の五所川原窯跡群出土須恵器に関わる一連の分析作^(註2)業や、渤海塚とも推定された北海道大川遺跡・美々8遺跡から出土した黒色土器の分析判断^(註3)は、胎土分析の有効性を遺憾なく発揮したもので、その分析方法の信頼度を示すものでもある。しかし、反面では坂井秀弥氏が指摘したように、分析で約3割が小泊窯（新潟県佐渡島）産とした青森県空沢遺跡出土須恵器が、考古学的手法と肉眼観察による経験則からそのほとんどが小泊窯産ではないとしたように、それが万能でないことも銘記すべきである。

筆者は1990年に、竹原窯跡の報告書をまとめるに当たって、須恵器など約50点の胎土分析を依頼したことがあった。この時は、図化した土器を傷つけることができず、遺構外のそれも小破片を、拙い記録と共に拾い出した。そのために、今では、土器の胎土や正確な形状を思い出すことができない。メモ的な白黒写真では埒が明かないのである。

この不足の状態は、生産遺跡の胎土分析は遺跡単位の分析成果だけで事が足り、しかも考古学の立ち入る余地はないとする当時の認識によったもので、分析結果に対する考古学的な追認作業の必要性を当初から怠っていたことにほかならない。つまり、他力本願の低い意識によるものであった。そのために試料の同定に関しては、資料を提供してマクロ的な基礎データの蓄積を図ったのみで、歴史解明の問題設定もなく単に傍観者としての立場に終始した。しかし、先に引いたことでも言えるように、考古学的手法による解釈の篩い分けは、分析結果に基づいた理化学的解釈に当たっての大きな目安にもなっているのである。

※ 奈良教育大学教授

以上の反省より、胎土分析資料を依頼する考古学側の立場として、次の5点に留意した。

- ① 分析試料は、形態・技法・胎土などの観察に供するため、凶化されてある資料に限った。
- ② 生産地の分析結果は、消費地のそれにとって基礎となるものであり、豊富な資料の提供とそれらを系統的に資料化することに心がけた。
- ③ 分析数値は、分布図などの作成に不可欠であるため、すべて掲載する。
- ④ 竹原窯跡は、律令期（8・9世紀）の城柵官衙遺跡が設置された最北端地域にあり、律令期の及ばない地域と接している窯跡としては、まとまった資料に恵まれている。したがって、東北部や北海道から出土した該期資料による流通関係の有無など、歴史構築の手掛かりとして有効であり、この解明を目的とする。
- ⑤ ②・③を受けて、分析結果が系統ごとにまとまる傾向があるのか、また、これらと④を受けて、他地域の成果と照合してどうか、などについて検討する。

ただし、今回は①～③までの報告を行い、④・⑤については稿を改めて論じたいと考えている。

1993年10月、筆者は北海道恵庭市で8世紀の須恵器蓋坏セット^(註5)を、さらに余市市で7世紀の須恵器蓋^(註6)を実現する機会があった。その時々、従来北海道ではほとんど知られていなかった、奈良時代の蓋坏と古墳時代の須恵器の存在に驚いた。そして、同時にそれらの生産地について、考古学の限界性と胎土分析の可能性が頭をかすめたことも記憶している。以来、胎土分析の有効性と試料の関わり方について、折りに触れては興味を寄せてきたのである。

このたびの、竹原窯跡出土須恵器の試料作成とそれに関する報告は、前回の自戒を込めて行なったものである。これを承諾し、分析をお引き受け下さった三辻先生には、心よりお礼申し上げます。 (利部)

2. 分析資料の概要

竹原窯跡からは多量の須恵器が出土しているが、ここでは、個別資料の残存率および各々の窯跡や灰原などを代表する資料を考慮した、300点の資料を掲載して説明を加える。初めに遺跡の概略を述べ、次に個別資料について略述^(註7)する。

秋田県の南東部には、東側の奥羽山脈と西側の出羽山地に挟まれた南北に細長い横手盆地がある。その南東にあり横手市街地に近い西側には、竹原窯跡支群、城野岡窯跡支群、富ヶ沢窯跡支群、西ヶ沢窯跡支群を擁する中山丘陵窯跡群がある。竹原窯跡は、竹原窯跡支群内の平鹿郡平鹿町上吉田にあり、平安時代の3支群に対して唯一奈良時代を含んだ窯跡である。

調査区はA～C地区に分かれ、A区より窯跡1基（S J 01 a・b）、灰原1箇所（S T 15）、B区より窯跡5基（S J 05 a～e、S J 05 f、S J 06、S J 07 a～c、S J 08）、灰原1箇所（S T 12、S T 13、S T 14、S T 15、S T 17、S T 18、S T 19、S T 30、S T 35、S T 36、S D

28a・b)、C区より窯跡1基(SJ20)、灰原1箇所(ST26)をそれぞれ検出している。窯跡と灰原は、SJ01-SJ03、SJ05a~e・SJ05f-SJ19、SJ06-ST12、SJ07・08-ST18、SJ20-ST26の関係であるが、B区では狭い範囲に集中している。

窯跡のうち、完掘できたのはSJ01とSJ20で、SJ05fは焼成部中央より上方が未掘、SJ05a~eとSJ07・08は焚口より下方の調査、SJ06にいたっては焚口の痕跡を留めるのみである。年代は、SJ06・05fを8世紀中葉頃、SJ05a~e・07・08を8世紀後葉、SJ20を9世紀第一四半期、SJ01を9世紀後葉に推定している。以下、試料の帰属を明確にする。

1~50は、SJ01から出土した蓋・坏である。坏はへら切りと糸切りを含み、一部回転ヘラケズリ調整を施している。仕上がりは灰色が主体を占めるが、一部橙色のものも含む。

51~73は、ST12から出土した蓋・有台坏・坏・短頸壺蓋・長頸瓶・壺・甕である。このうち、57と62の一部の破片はSJ06から出土した。これらは黄白色の精選された胎土で、ほとんどの資料に鮮やかな緑色の釉が掛かる。

74~90は、その特徴からST12出土須恵器に関連する蓋・有台坏・坏・高台の資料である。

91~97は、SJ05fから出土した蓋・有台坏である。これらは乳白色の精選された胎土で、軟質に仕上がっている。

98~100は、その特徴からSJ05f出土須恵器に関連する蓋・有台坏の資料である。

101~201は、SJ05a~eとSD28から出土した蓋・有台坏・坏・碗である。これらには、仕上がりが黒(①)、青灰色(②)、暗赤色(③)などを呈するものがある。これらは層位によって、総体に①~③の変遷があり、③のまともある須恵器をSD28に帰属させた。

203~239は、ST17から出土した蓋・有台坏・坏・短頸壺蓋・甕である。甕と一部の資料を除くほとんどは、黒色を呈した硬質である。

203と240~250は、その特徴からST17出土須恵器に関連する高坏・蓋・有台坏・坏の資料である。

251~283は、帰属が不明瞭で、SJ07・08、ST18・35の蓋・有台坏・坏を一括した。

284~286は、ST13から出土した有台坏・坏である。

287~289は、ST14(287・288)とST15(289)から出土した蓋である。これらは共通した形態を持ち、同様のものが秋田城跡から出土している^(註8)。

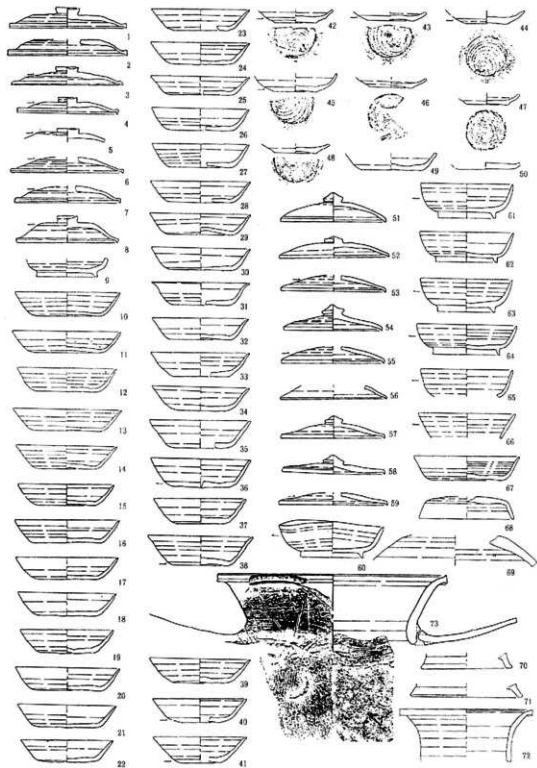
290~293は、蓋・有台坏・坏の遺構外出土資料である。

294~296は、SJ20から出土した蓋・有台坏である。両者共に回転糸切り痕を留める。

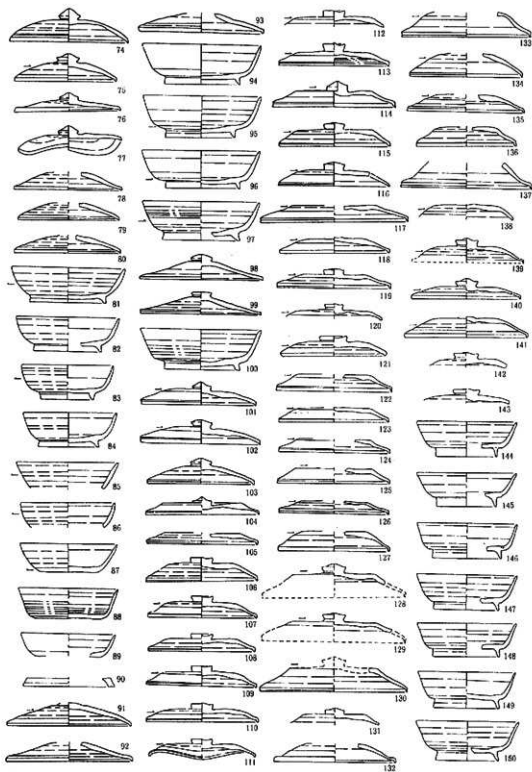
297~300は、ST26から出土した蓋・有台坏・坏である。蓋と有台坏は回転糸切りの痕跡を留めるが、坏はへら切りである。

出土資料の多くには、白色針状物質を含んでいる。

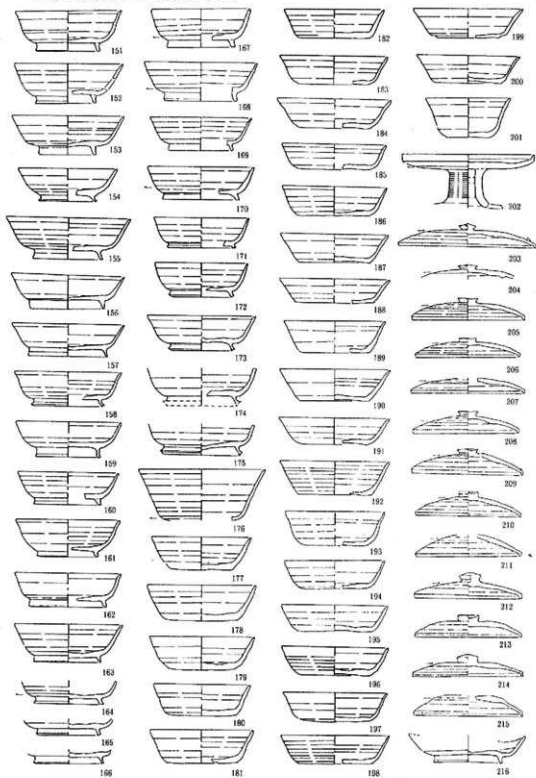
(利部)



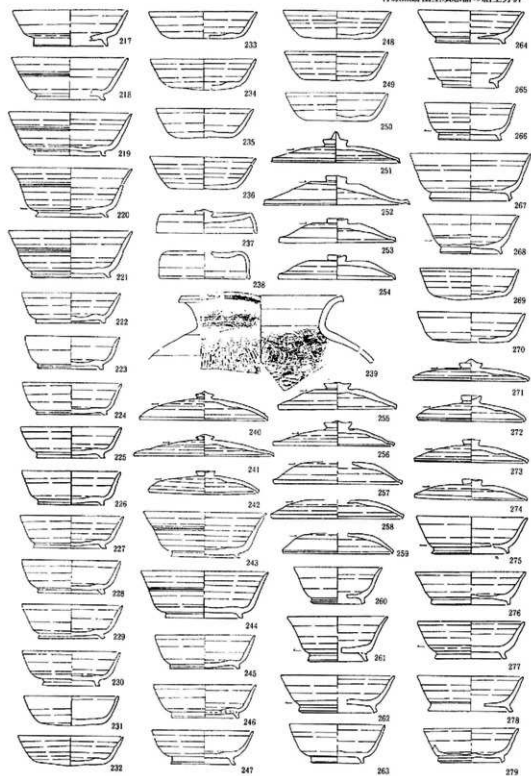
第1図 竹原窯跡出土須恵器(1)



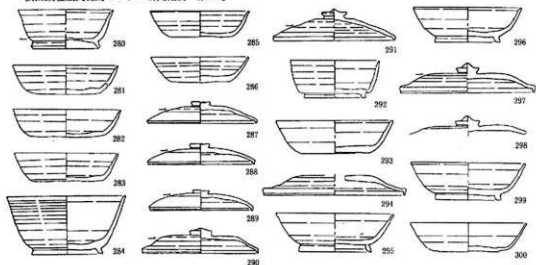
第2図 竹原窯跡出土須恵器 (2)



第3図 竹原窯跡出土須恵器(3)



第4図 竹原窯跡出土須恵器(4)



第5図 竹原窯跡出土須恵器(5)

3. 分析データ

分析データは第1表～第9表にまとめてある。すべての分析値は岩石標準試料JG-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示されている。標準化法を使うと、多変量解析をしたり、Rb-Sr分布図などの分布図を作成したりする上に便利である。しかし、地球化学分野では通常、主成分元素については酸化物の形にして%濃度で、また、微量元素については元素の形でppm濃度表示するので、もし、これらの濃度表示が必要であれば、K、Ca、Fe、Naの標準化値にそれぞれ、3.95、2.18、2.02、3.39を乗ずれば、 K_2O 、 CaO 、 Fe_2O_3 、 Na_2O としての%濃度が得られる。またRb、Srの標準化値にそれぞれ、181、184を乗ずれば、Rb、Srとしてのppmの濃度が得られる。しかし、データ解析には、JG-1による標準化値を使用するので、ここでは分析値として、JG-1による標準化値を示しておいた。

(三辻)

第1表 分析試料データ(1)

	番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
7-3855	1	0.337	0.245	1.63	0.423	0.352	0.128
	3856	0.291	0.243	1.63	0.393	0.376	0.132
	3857	0.238	0.137	2.54	0.386	0.280	0.073
	3858	0.320	0.206	2.48	0.444	0.369	0.181
	3859	0.279	0.188	2.56	0.413	0.348	0.156
	3860	0.251	0.122	2.58	0.382	0.264	0.058
	3861	0.238	0.133	2.55	0.383	0.263	0.068
	3862	0.206	0.146	2.25	0.312	0.266	0.095
	3863	0.283	0.187	1.80	0.365	0.284	0.101
	3864	0.237	0.182	1.81	0.348	0.271	0.087

第2表 分析試料データ (2)

	番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	
7-	3865	11	0.210	0.169	1.80	0.322	0.258	0.059
	3866	12	0.197	0.166	1.77	0.324	0.255	0.068
	3867	13	0.210	0.183	1.83	0.332	0.273	0.079
	3868	14	0.217	0.180	1.81	0.322	0.275	0.058
	3869	15	0.208	0.188	1.85	0.314	0.282	0.082
	3870	16	0.213	0.182	1.91	0.324	0.270	0.064
	3871	17	0.348	0.214	2.19	0.386	0.413	0.169
	3872	18	0.219	0.153	1.97	0.329	0.267	0.096
	3873	19	0.293	0.218	2.77	0.418	0.374	0.167
	3874	20	0.215	0.205	1.88	0.337	0.295	0.071
	3875	21	0.265	0.198	1.95	0.364	0.329	0.115
	3876	22	0.263	0.196	1.95	0.371	0.321	0.139
	3877	23	0.295	0.184	1.89	0.434	0.335	0.132
	3878	24	0.305	0.196	1.95	0.425	0.355	0.164
	3879	25	0.281	0.189	1.93	0.332	0.297	0.122
	3880	26	0.248	0.169	1.94	0.364	0.302	0.109
	3881	27	0.252	0.230	1.88	0.350	0.297	0.073
	3882	28	0.218	0.194	1.92	0.338	0.305	0.087
	3883	29	0.247	0.184	2.00	0.328	0.299	0.103
	3884	30	0.339	0.202	1.88	0.450	0.374	0.169
	3885	31	0.433	0.189	1.96	0.465	0.357	0.160
	3886	32	0.359	0.216	1.85	0.504	0.370	0.175
	3887	33	0.221	0.163	1.76	0.346	0.251	0.057
	3888	34	0.290	0.170	1.83	0.425	0.299	0.082
	3889	35	0.235	0.123	2.26	0.375	0.267	0.046
	3890	36	0.283	0.153	2.31	0.393	0.341	0.107
	3891	37	0.388	0.220	2.76	0.413	0.384	0.126
	3892	38	0.502	0.186	2.51	0.472	0.429	0.121
	3893	39	0.647	0.160	2.45	0.513	0.336	0.113
	3894	40	0.170	0.192	2.31	0.273	0.270	0.037
	3895	41	0.238	0.170	2.20	0.289	0.244	0.056
	3896	42	0.189	0.150	2.60	0.267	0.237	0.048
	3897	43	0.197	0.158	2.51	0.294	0.244	0.070
	3898	44	0.183	0.147	2.26	0.291	0.230	0.044
	3899	45	0.184	0.155	2.29	0.260	0.247	0.044
	3900	46	0.195	0.140	2.04	0.314	0.250	0.066
	3901	47	0.188	0.147	1.98	0.311	0.228	0.064
	3902	48	0.224	0.145	2.13	0.332	0.263	0.065
	3903	49	0.202	0.132	2.22	0.296	0.261	0.065

第3表 分析試料データ (3)

	番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
7-3904	50	0.290	0.173	1.76	0.462	0.314	0.090
4625	51	0.348	0.300	1.43	0.407	0.479	0.222
4626	52	0.390	0.311	1.39	0.429	0.485	0.223
4627	53	0.319	0.198	1.46	0.383	0.442	0.222
4628	54	0.389	0.207	1.38	0.414	0.470	0.209
4629	55	0.356	0.200	1.42	0.410	0.434	0.209
4630	56	0.352	0.238	1.41	0.422	0.461	0.208
4631	57	0.325	0.204	1.40	0.336	0.417	0.235
4632	58	0.356	0.207	1.43	0.429	0.460	0.222
4633	59	0.361	0.205	1.43	0.425	0.434	0.214
4634	60	0.348	0.185	1.44	0.391	0.419	0.196
4635	61	0.365	0.211	1.41	0.420	0.452	0.211
4636	62	0.398	0.201	1.40	0.438	0.430	0.203
4637	63	0.287	0.173	1.48	0.331	0.377	0.196
4638	64	0.412	0.222	1.38	0.452	0.439	0.209
4639	65	0.352	0.175	1.45	0.402	0.401	0.187
4640	66	0.333	0.223	1.42	0.355	0.473	0.256
4641	67	0.375	0.247	1.23	0.480	0.437	0.219
4642	68	0.369	0.194	1.44	0.380	0.429	0.214
4643	69	0.402	0.311	1.22	0.483	0.501	0.266
4644	70	0.285	0.185	1.52	0.351	0.403	0.205
4645	71	0.374	0.225	1.74	0.394	0.474	0.277
4646	72	0.389	0.240	1.47	0.423	0.451	0.205
4647	73	0.401	0.246	1.74	0.430	0.515	0.289
4648	74	0.386	0.212	1.42	0.447	0.455	0.227
4649	75	0.317	0.211	1.42	0.389	0.438	0.219
4650	76	0.355	0.218	1.38	0.407	0.458	0.220
4651	77	0.395	0.216	1.39	0.381	0.464	0.242
4652	78	0.346	0.213	1.43	0.342	0.460	0.235
4653	79	0.340	0.214	1.42	0.343	0.454	0.250
4654	80	0.400	0.219	1.40	0.450	0.446	0.212
4655	81	0.392	0.198	1.40	0.415	0.451	0.199
4656	82	0.460	0.202	1.37	0.457	0.458	0.206
4657	83	0.375	0.212	1.40	0.424	0.450	0.220
4658	84	0.359	0.221	1.42	0.420	0.447	0.204
4659	85	0.340	0.196	1.43	0.388	0.438	0.219
4660	86	0.359	0.212	1.40	0.414	0.460	0.234
4661	87	0.349	0.211	1.76	0.388	0.453	0.258
4662	88	0.371	0.266	1.20	0.487	0.453	0.240

第4表 分析試料データ(4)

	番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
7-4663	89	0.335	0.249	1.25	0.461	0.448	0.229
4664	90	0.339	0.220	1.78	0.384	0.458	0.248
4665	91	0.355	0.177	1.67	0.493	0.427	0.141
4666	92	0.353	0.158	1.76	0.496	0.397	0.117
4667	93	0.369	0.170	1.68	0.539	0.425	0.128
4668	94	0.371	0.153	1.66	0.491	0.379	0.124
4669	95	0.380	0.170	1.64	0.539	0.435	0.137
4670	96	0.373	0.172	1.65	0.541	0.443	0.132
4671	97	0.377	0.166	1.65	0.531	0.433	0.141
4672	98	0.358	0.159	1.70	0.487	0.409	0.121
4673	99	0.373	0.166	1.66	0.517	0.402	0.136
4674	100	0.381	0.169	1.63	0.537	0.426	0.137
4811	101	0.248	0.135	2.10	0.410	0.286	0.055
4812	102	0.312	0.188	1.92	0.434	0.340	0.130
4813	103	0.347	0.215	1.88	0.453	0.386	0.151
4814	104	0.318	0.280	1.83	0.443	0.428	0.151
4815	105	0.268	0.145	2.01	0.452	0.303	0.060
4816	106	0.358	0.214	1.42	0.402	0.461	0.225
4817	107	0.326	0.284	1.94	0.467	0.431	0.410
4818	108	0.357	0.248	1.92	0.456	0.405	0.149
4819	109	0.371	0.277	1.89	0.471	0.406	0.147
4820	110	0.314	0.249	1.93	0.433	0.411	0.147
4821	111	0.325	0.299	1.90	0.447	0.421	0.168
4822	112	0.321	0.288	1.96	0.426	0.419	0.147
4823	113	0.300	0.237	1.96	0.425	0.391	0.150
4824	114	0.239	0.181	2.00	0.375	0.329	0.110
4825	115	0.326	0.254	1.88	0.449	0.452	0.179
4826	116	0.269	0.205	1.84	0.421	0.374	0.131
4827	117	0.389	0.218	1.61	0.553	0.427	0.179
4828	118	0.242	0.173	2.04	0.473	0.328	0.113
4829	119	0.302	0.283	1.68	0.422	0.402	0.170
4830	120	0.259	0.276	1.73	0.374	0.396	0.168
4831	121	0.244	0.121	1.96	0.386	0.284	0.055
4832	122	0.271	0.278	1.69	0.380	0.393	0.172
4833	123	0.290	0.280	1.69	0.397	0.413	0.182
4834	124	0.265	0.281	1.72	0.393	0.423	0.173
4835	125	0.266	0.268	1.74	0.382	0.404	0.177
4836	126	0.287	0.284	1.69	0.414	0.428	0.169
4837	127	0.317	0.167	1.79	0.488	0.374	0.082

第5表 分析試料データ (5)

	番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
7-4838	128	0.348	0.201	1.69	0.507	0.464	0.199
4839	129	0.309	0.176	1.73	0.448	0.405	0.167
4840	130	0.385	0.212	1.70	0.537	0.467	0.195
4841	131	0.342	0.231	1.81	0.509	0.476	0.223
4842	132	0.380	0.239	1.78	0.516	0.487	0.203
4843	133	0.371	0.209	1.71	0.528	0.460	0.226
4844	134	0.347	0.227	1.87	0.483	0.469	0.203
4845	135	0.361	0.216	1.80	0.528	0.470	0.201
4846	136	0.296	0.216	2.05	0.412	0.450	0.164
4847	137	0.352	0.193	1.67	0.519	0.453	0.195
4848	138	0.305	0.195	2.00	0.432	0.439	0.151
4849	139	0.292	0.148	2.03	0.433	0.379	0.169
4850	140	0.279	0.142	2.08	0.409	0.372	0.156
4851	141	0.295	0.197	1.93	0.408	0.445	0.165
4852	142	0.262	0.135	2.23	0.375	0.343	0.149
4853	143	0.298	0.198	1.95	0.410	0.424	0.160
4854	144	0.324	0.215	1.86	0.469	0.376	0.152
4855	145	0.296	0.192	1.91	0.439	0.349	0.137
4856	146	0.320	0.206	1.87	0.417	0.351	0.144
4857	147	0.302	0.235	1.89	0.422	0.398	0.163
4858	148	0.330	0.222	1.83	0.459	0.392	0.149
4859	149	0.319	0.224	1.90	0.443	0.383	0.164
4860	150	0.277	0.216	1.92	0.406	0.386	0.149
4861	151	0.309	0.229	1.85	0.445	0.409	0.162
4862	152	0.320	0.250	1.83	0.463	0.415	0.165
4863	153	0.315	0.212	1.85	0.481	0.401	0.151
4864	154	0.230	0.154	2.19	0.362	0.291	0.091
4865	155	0.310	0.230	1.87	0.442	0.407	0.160
4866	156	0.325	0.213	1.89	0.466	0.366	0.149
4867	157	0.286	0.209	1.96	0.387	0.343	0.137
4868	158	0.300	0.276	1.70	0.403	0.395	0.168
4869	159	0.224	0.168	1.91	0.343	0.319	0.093
4870	160	0.341	0.204	1.83	0.488	0.394	0.147
4871	161	0.294	0.201	2.04	0.413	0.402	0.172
4872	162	0.322	0.204	1.91	0.463	0.423	0.190
4873	163	0.256	0.181	1.92	0.377	0.351	0.141
4874	164	0.328	0.194	1.87	0.459	0.401	0.169
4875	165	0.295	0.251	1.71	0.430	0.435	0.183
4876	166	0.268	0.258	1.74	0.404	0.409	0.168

第6表 分析試料データ(6)

	番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
7-4877	167	0.291	0.174	1.94	0.412	0.406	0.139
4878	168	0.311	0.198	1.95	0.447	0.397	0.171
4879	169	0.337	0.198	1.80	0.475	0.433	0.182
4880	170	0.201	0.104	1.77	0.330	0.252	0.051
4881	171	0.360	0.228	1.70	0.540	0.490	0.206
4882	172	0.296	0.168	1.90	0.419	0.402	0.159
4883	173	0.329	0.208	1.85	0.467	0.425	0.179
4884	174	0.337	0.187	1.71	0.502	0.434	0.182
4885	175	0.348	0.193	1.67	0.508	0.452	0.193
4886	176	0.336	0.187	1.76	0.496	0.433	0.182
4887	177	0.190	0.216	1.91	0.376	0.372	0.126
4888	178	0.297	0.168	1.77	0.451	0.369	0.127
4889	179	0.252	0.156	1.83	0.403	0.356	0.112
4890	180	0.265	0.157	1.80	0.412	0.368	0.106
4891	181	0.351	0.199	1.73	0.519	0.453	0.185
4892	182	0.258	0.176	1.92	0.380	0.337	0.110
4893	183	0.333	0.210	1.84	0.472	0.417	0.162
4894	184	0.341	0.205	1.88	0.470	0.398	0.157
4895	185	0.319	0.207	1.86	0.462	0.386	0.153
4896	186	0.321	0.213	1.85	0.465	0.390	0.157
4897	187	0.342	0.215	1.84	0.482	0.397	0.163
4898	188	0.320	0.194	1.88	0.463	0.379	0.146
4899	189	0.307	0.176	2.15	0.460	0.380	0.147
4900	190	0.416	0.209	1.96	0.511	0.450	0.177
4901	191	0.324	0.189	2.03	0.465	0.377	0.127
4902	192	0.287	0.146	1.99	0.443	0.348	0.125
4903	193	0.287	0.168	1.92	0.396	0.392	0.147
4904	194	0.311	0.219	2.08	0.417	0.463	0.163
4905	195	0.304	0.236	2.03	0.436	0.460	0.176
4906	196	0.296	0.207	2.14	0.403	0.427	0.156
4907	197	0.354	0.202	1.78	0.482	0.482	0.190
4908	198	0.316	0.183	1.99	0.445	0.416	0.165
4909	199	0.301	0.277	1.71	0.438	0.416	0.170
4910	200	0.318	0.195	2.04	0.413	0.469	0.163
4911	201	0.299	0.280	1.78	0.453	0.436	0.188
4912	202	0.334	0.187	1.96	0.469	0.377	0.131
7572	203	0.414	0.220	1.64	0.618	0.444	0.178
7573	204	0.384	0.206	1.75	0.569	0.414	0.159
7574	205	0.355	0.201	1.71	0.570	0.425	0.152

第7表 分析試料データ (7)

	番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
7-7575	206	0.402	0.239	1.65	0.598	0.450	0.170
7576	207	0.322	0.220	1.69	0.535	0.429	0.184
7577	208	0.345	0.199	1.69	0.554	0.427	0.155
7578	209	0.412	0.221	1.61	0.599	0.454	0.174
7579	210	0.367	0.215	1.64	0.571	0.445	0.174
7580	211	0.388	0.201	1.69	0.586	0.421	0.164
7581	212	0.220	0.170	2.01	0.390	0.353	0.092
7582	213	0.219	0.183	1.88	0.426	0.339	0.113
7583	214	0.209	0.193	1.89	0.424	0.348	0.114
7584	215	0.259	0.176	2.08	0.463	0.344	0.114
7585	216	0.364	0.173	1.64	0.509	0.420	0.173
7586	217	0.398	0.188	1.57	0.564	0.465	0.186
7587	218	0.406	0.217	1.67	0.607	0.440	0.166
7588	219	0.392	0.218	1.67	0.593	0.437	0.190
7589	220	0.404	0.226	1.63	0.618	0.452	0.180
7590	221	0.441	0.232	1.63	0.639	0.457	0.193
7591	222	0.382	0.198	1.75	0.594	0.422	0.165
7592	223	0.421	0.222	1.67	0.642	0.428	0.162
7593	224	0.374	0.196	1.70	0.570	0.418	0.151
7594	225	0.382	0.207	1.70	0.572	0.428	0.163
7595	226	0.397	0.191	1.73	0.597	0.422	0.151
7596	227	0.420	0.194	1.69	0.615	0.414	0.135
7597	228	0.379	0.211	1.70	0.591	0.440	0.169
7598	229	0.416	0.194	1.71	0.590	0.409	0.144
7599	230	0.397	0.191	1.75	0.588	0.406	0.146
7600	231	0.258	0.165	1.92	0.322	0.373	0.219
7601	232	0.340	0.184	1.76	0.543	0.375	0.144
7602	233	0.351	0.192	1.72	0.560	0.398	0.153
7603	234	0.377	0.180	1.74	0.561	0.389	0.138
7604	235	0.290	0.257	1.72	0.435	0.400	0.169
7605	236	0.296	0.263	1.67	0.434	0.402	0.170
7606	237	0.403	0.188	1.56	0.575	0.453	0.196
7607	238	0.390	0.199	1.69	0.592	0.411	0.142
7608	239	0.320	0.242	1.59	0.372	0.437	0.207
7609	240	0.387	0.229	1.76	0.587	0.429	0.163
7610	241	0.432	0.390	1.64	0.621	0.510	0.187
7611	242	0.390	0.210	1.66	0.603	0.434	0.181
7612	243	0.377	0.216	1.68	0.588	0.477	0.180
7613	244	0.400	0.224	1.63	0.618	0.463	0.202

第8表 分析試料データ (8)

	番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
7-7614	245	0.420	0.199	1.67	0.623	0.412	0.161
7615	246	0.388	0.193	1.70	0.591	0.403	0.158
7616	247	0.225	0.217	1.93	0.436	0.371	0.146
7617	248	0.359	0.185	1.73	0.578	0.391	0.150
7618	249	0.366	0.195	1.70	0.565	0.407	0.148
7619	250	0.380	0.188	1.71	0.586	0.391	0.142
7620	251	0.319	0.253	1.82	0.465	0.430	0.197
7621	252	0.305	0.192	1.89	0.461	0.393	0.163
7622	253	0.224	0.125	2.01	0.377	0.273	0.080
7623	254	0.327	0.190	2.07	0.450	0.378	0.178
7624	255	0.234	0.242	1.74	0.438	0.439	0.109
7625	256	0.291	0.265	1.78	0.406	0.393	0.161
7626	257	0.358	0.206	1.71	0.530	0.484	0.182
7627	258	0.339	0.215	1.71	0.507	0.467	0.192
7628	259	0.256	0.121	1.87	0.420	0.292	0.065
7629	260	0.301	0.205	2.00	0.442	0.354	0.106
7630	261	0.217	0.129	1.80	0.353	0.285	0.068
7631	262	0.249	0.125	1.88	0.410	0.288	0.065
7632	263	0.335	0.206	1.84	0.485	0.451	0.160
7633	264	0.327	0.224	1.94	0.452	0.479	0.188
7634	265	0.347	0.211	1.79	0.511	0.483	0.170
7635	266	0.366	0.218	1.72	0.554	0.482	0.189
7636	267	0.244	0.130	1.78	0.404	0.298	0.084
7637	268	0.214	0.112	1.95	0.339	0.287	0.042
7638	269	0.355	0.193	1.75	0.518	0.454	0.185
7639	270	0.330	0.170	1.80	0.433	0.458	0.171
7640	271	0.383	0.200	1.56	0.611	0.428	0.189
7641	272	0.355	0.193	1.59	0.588	0.428	0.186
7642	273	0.331	0.178	1.60	0.563	0.404	0.157
7643	274	0.246	0.146	1.96	0.351	0.306	0.102
7644	275	0.205	0.110	1.80	0.356	0.254	0.068
7645	276	0.178	0.101	1.96	0.308	0.233	0.058
7646	277	0.268	0.132	1.75	0.449	0.310	0.071
7647	278	0.208	0.123	1.81	0.360	0.270	0.062
7648	279	0.203	0.110	1.80	0.353	0.271	0.067
7649	280	0.236	0.115	1.91	0.385	0.284	0.048
7650	281	0.364	0.204	1.70	0.521	0.508	0.182
7651	282	0.366	0.218	1.77	0.522	0.477	0.170
7652	283	0.369	0.204	1.74	0.547	0.480	0.175

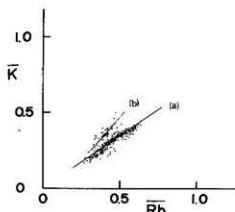
第9表 分析試料データ (9)

	番号	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na
7-7653	284	0.329	0.116	1.76	0.521	0.354	0.168
7654	285	0.343	0.141	1.79	0.547	0.397	0.137
7655	286	0.267	0.117	3.01	0.344	0.295	0.140
7656	287	0.348	0.209	1.73	0.490	0.475	0.149
7657	288	0.321	0.257	1.80	0.415	0.510	0.174
7658	289	0.399	0.238	1.64	0.605	0.511	0.224
7659	290	0.173	0.106	2.02	0.311	0.229	0.070
7660	291	0.250	0.172	2.07	0.361	0.344	0.138
7661	292	0.315	0.224	1.80	0.449	0.436	0.161
7662	293	0.324	0.121	1.83	0.521	0.344	0.151
7663	294	0.391	0.200	1.90	0.551	0.441	0.209
7664	295	0.672	0.139	1.91	0.666	0.341	0.110
7665	296	0.287	0.163	1.99	0.434	0.363	0.182
7666	297	0.357	0.186	1.93	0.520	0.411	0.192
7667	298	0.362	0.178	1.94	0.517	0.406	0.170
7668	299	0.267	0.157	2.00	0.382	0.356	0.150
7669	300	0.359	0.176	1.94	0.536	0.414	0.183

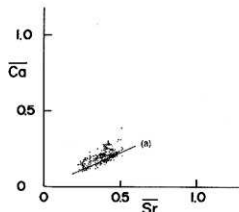
4. 分析結果

はじめに、K、Rb因子、Ca、Sr因子の相関性について述べる。K、Caは主成分元素であり、Rb、Srは微量元素である。全国各地の花崗岩類やその上に分布する土壌、粘土の分析データの比較から、主成分元素K、Caはそれぞれ、カリ長石、斜長石の中に主として存在しているものと考えられている。微量元素はどの鉱物中に含まれているか不明であるが、もし、これらの主成分元素と正の相関性をもっているとすれば、微量元素はこれらの主成分元素が存在する鉱物中に共存したことになる。Rb、Srは地域差を有効に表示する元素であるだけに、どの鉱物の中に存在していたのかを知っておくことは重要である。

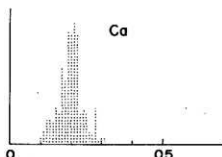
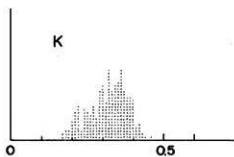
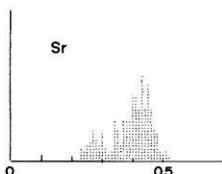
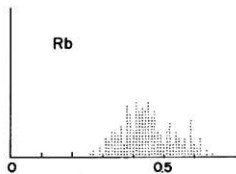
そこで、今回分析した300点の試料について、K-Rb、Ca-Srの相関性をみてみた。第6図にはK-Rb相関図を示す。明らかに、大部分の試料は1本の直線(a)に沿って分布しており、KとRbの間には良好な正の相関性があることがわかる。したがって、RbはKと共存していたことを示す。さらに、このことは大部分の試料は同じ岩石由来した粘土を素材にしていたことを意味し、各土器に含まれるK量の多少に対応してRb量も変動していたと考えられる。K、Rb量の多少は粘土の不均質に関連して生じたものであり、竹原窯跡の須恵器の素材粘土は必ずしも、1ヶ所で採取されたものではないことを示している。窯周辺の何ヶ所かで粘土を採集したため、もともと不均質である粘土中のK、Rb量にばらつきがでたのである。



第6図 K-Rb 相関図



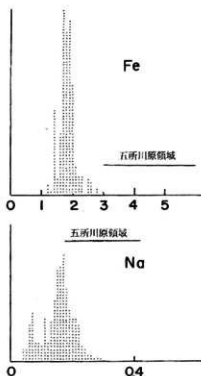
第7図 Ca-Sr 相関図



第8図 K-Rb のばらつき

第9図 CaとSrのばらつき

しかし、同じ岩石に由来した粘土であったため、K と R b の間には良好な正の相関性がみられた訳である。第1図を点検すると、30点ばかりの試料は直線から少しずれて分布していることがわかる。このずれは何を意味するのだろうか。現在のところ解明されていないが、一つの考え方として、別の岩石に由来する粘土を使用した可能性が考えられる。この場合はもう一つの直線に沿って試料は分布することになる。実際、第6図では他の試料は (b) 直線に沿って分布しているように見える。さらに、考えられるもう一つの可能性は添加物の問題である。土器製作の過程で何かの添加物を加えたため、(a) 直線からずれてしまったと考えられるので



第10図 NaとFeのばらつき

ておかざるをえない。

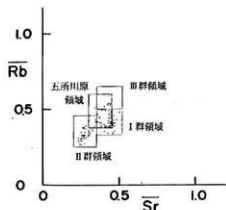
次に、300点の試料を分析した結果、各元素はどのようにばらついていたかをグラフで示す。第8図にはKとRbの分析値のばらつきを示す。両者ともほぼ、正規分布するが、ピークの両すその方に、小さなコブのような存在もある。これらが、第6図で直線からのずれの原因になっていると思われる。なお、(a)直線の勾配が1:1にならずにRb側に傾いているように、Rbの平均値(分布のピーク)はKの平均値よりも大きい。

第9図にはCaとSrの分析値のばらつきを示してある。Caもほぼ正規分布するが、Srはピークの左すそに、明らかに、もう一つのピークが存在する。このことが第7図でもK、Rbの相関の場合のように、良好な相関を示さなかった原因である。このように、竹原窯跡出土須恵器の素材粘土も決して単純ではないことがわかる。

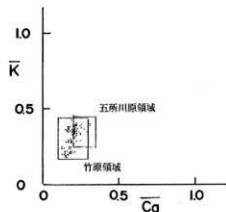
第10図にはNaとFeの分析値のばらつきを示してある。両者とも近似的に正規分布する。Naは正長石に由来したものとみられる。他方、Feは雲母、角閃石、輝石、かんらん石などの鉄化合物に由来するが、多くの地域では第10図に示したようにきれいな分布は示さない。このことは須恵器の素材粘土のもとである母岩の鉄化合物の構成が複雑なためである。第10図に示したように、Feの分析値の分布が比較的きれいであるのは、竹原窯跡の後背地の母岩の鉄

ある。しかし、これらのことについては未だ、十分な証拠がそろっていないので、ここではこれ以上、言及しないことにする。

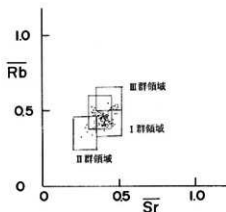
第7図にはCa-Sr相関性図を示してある。この図でも一本の直線に沿って多数の試料が分布していることがわかる。CaとSrの間にも明らかに正の相関性があるのである。したがって、微量元素Srは主成分元素Caと共存し斜長石から由来したものと推定される。しかし、第11図に比べてこの図では、大部分の試料が(a)直線をずれる。ずれた試料群もまた、右上がりに分布しており、やはり、CaとSrの間の正の相関性があることを示している。このように、CaとSrの間でも必ずしも、試料は一本の直線に沿って分布しないのは、K、Rbの場合と同様な原因が考えられるが、須恵器の製作過程で加える添加物についての情報がほとんどなく、さらに、岩石から粘土が生成される過程もほとんど解明されていないことから、その原因について推察するに止め



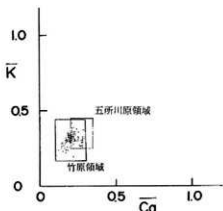
第11図 No. 1～100までの試料のRb-Sr分布図



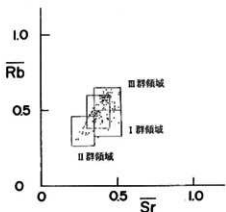
第14図 No. 1～100までの試料のK-Ca分布図



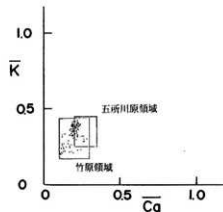
第12図 No. 101～200までの試料のRb-Sr分布図



第15図 No. 101～200までの試料のK-Ca分布図



第13図 No. 201～300までの試料のRb-Sr分布図



第16図 No. 201～300までの試料のK-Ca分布図

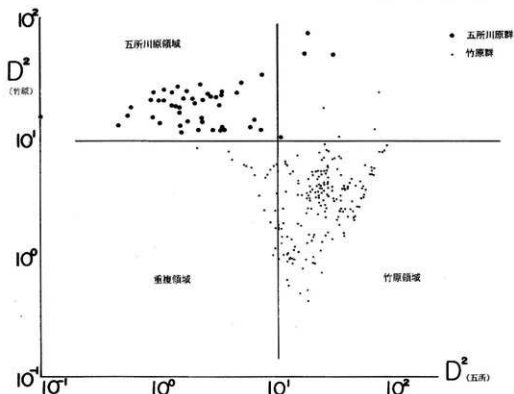
化合物の構成が単純なためと推察される。

さて、ここで、Rb-Sr分布図とK-Ca分布図を使って、竹原窯跡の須恵器の化学特性について述べる。全国各地の窯跡出土須恵器を分析した結果、この両図が地域差を有効に示す分布図であることがわかった。全国の花崗岩類の多数の分析データを分布させた結果でも、東日本と西日本の花崗岩類の地域差を有効に表示した。このことは両図は何か地質学的に意味をもった分布であることを示唆している。前述したように、これらの元素を含む鉱物を考慮に入れると、両図の縦軸K、Rbはカリ長石、横軸のCa、Srは斜長石の相対量を示している。つまり、カリ長石と斜長石の分布の相違が花崗岩類の地域差を示しており、粘土にも母岩にみられる地域差が残されているのである。花崗岩類の分布図をみると、両者は逆相関状に分布しているように見える。その証拠に、土器でもこれらの図において左下部分（K、Ca量とも少ない。あるいは、Rb、Sr量とも少ない。）に分布する試料は殆んどなく、逆に、右上部（K、Caとも多い。あるいは、Rb、Sr量とも多い。）に分布する試料もほとんどない。

要するに、両分布図上で各地の窯または窯群出土須恵器の分布が微妙に異なるのである。そのことが、各地の窯跡出土須恵器の分布データから判明した。数値そのものよりも、この分布図上で比較するほうが定性的であっても分かり易いのである。遺跡出土須恵器をこれらの図に対応させることによって、定性的にその産地の推定もできる。

今回分析した試料は多いので、No. 1~100まで、No. 101~200、No. 201~300までと3つのグループに分けて図示した。はじめに、Rb-Sr分布図をまとめて示す。第11図にはNo. 1~200まで、第12図にはNo. 101~200まで、第13図にはNo. 201~300までの試料のRb-Sr分布図を示す。第11図~第13図をみると、RbとSrの間にも正の相関性があるように見える。地域によって時折、このようなことがみられるが、一般的には、RbとSrの間には正の相関性はない。そこで試料をRb量の多いグループと少ないグループに2分することにした。それぞれ、I群領域、II群領域として示してある。第11図をみると、両者は半々であるが、第12図では圧倒的にI群の方が多い。そして、第13図ではI群でも、さらに、Rb量が多い試料が多い。それらを第III群としてもよいくらいである。第11図~第13図には、それぞれ、I群領域、II群領域、III群領域を示してある。このように、竹原窯跡出土須恵器の中にも、胎土が3種類あるように見える。この違いは一体、何によるのであろうか。考古学的な何かに結び付けば面白くなる。なお、第11図~第13図には比較のため、五所川原領域を示してある。これをみると、竹原II群と五所川原群を相互識別することは容易であることがわかる。I群と五所川原群がかなり重複する。しかし、第10図に示されているように、竹原群と五所川原群はFe因子と完全に分離するので、実際に両者は誤判別することはない。

第14図~第16図はK-Ca分布図を示す。Rb-Sr分布図に比べて、比較的よくまとまっ



第17図 竹原群と五所川原群の相互識別 (K, Ca, Rb, Sr 因子使用)

て分布するので、一括して竹原群とした。第14図～第16図では竹原領域と五所川原領域を比較してある。これらの図では両者は相互識別の可能性を示している。

ここでK, Ca, Rb, Srの4因子を使って、竹原群と五所川原群を定量的に相互識別した結果について説明する。五所川原窯跡群の試料を50点、竹原窯跡群の試料100点を取り出し、それぞれ、両群の重心からマハラノビスの汎距離の二乗値を計算した。その結果を図示したのが第17図である。両軸には竹原群からのマハラノビスの汎距離の二乗値 (D^2 (竹原))、五所川原群からのマハラノビスの汎距離の二乗値 (D^2 (五所)) をとってある。 D^2 値が10のところそれぞれ、直線を引いてあるが、これがホテリングの T^2 検定で合格する境界線である。五所川原群の試料の大部分が D^2 (五所) ≤ 10 の領域に分布しており、また、竹原群の試料の大部分も D^2 (竹原) ≤ 10 の領域に分布していることがわかる。そして、両群の試料は完全に分離していることがわかる。つまり、竹原群と五所川原群はK, Ca, Rb, Srの4因子でも十分相互識別できる訳である。勿論、Fe因子でも両者は完全に分離する。したがって、竹原群の須恵器は五所川原群の須恵器と誤判別することはまずない訳である。このデータは北海道の遺跡から出土する須恵器が五所川原群産か竹原群産かを判別する上に活用できることを明示している。問題はこれ以外の母集団からの供給があったときである。このことが北海道の遺跡出土須恵器の

産地問題を難しくしているのである。この問題を解決するには母集団の整理が大切である。目下、秋田城周辺の窯群出土須恵器の化学特性を整理中であり、この整理が完了すると秋田城周辺窯群、横手盆地窯群、それに、山形県の日本海沿岸地域の窯群の相互識別が検討されることになり、北海道の須恵器の産地問題が解決される日もそう遠くはないであろう。さらに、秋田城への須恵器の供給の様相についても解明されることになろう。(三辻)

注

1. 利部 修「1. 科学的な分析について」『天代瓦窯遺跡』群馬県吾妻郡中之条町教育委員会 1982(昭和57年)
2. 三辻利一「第6節 空沢遺跡出土須恵器の蛍光X線分析」『空沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第130集 1989(平成元年)
3. 三辻利一「a-2 渤海国上京龍泉府址、および、大川遺跡出土黒色土器の蛍光X線分析」『1993年度大川遺跡発掘調査概報』北海道余市町教育委員会 1994(平成6年)
4. 坂井秀弥「青森県空沢遺跡の「小泊産須恵器」について—胎土分析による須恵器産地同定の問題—」『新潟考古学談話会会報』新潟考古学談話会 1992(平成4年)
5. 佐藤忠雄・山山 忍「上島松遺跡」北海道恵庭市教育委員会 1974(昭和49年)
6. 山本哲也「d-1 大川遺跡出土の須恵器」『1992年度大川遺跡発掘調査概報』北海道余市町教育委員会 1993(平成5年)
7. 利部 修「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XI—竹原窯跡—」秋田県文化財調査報告書 第209集 1991(平成3年)
利部 修「竹原窯跡の須恵器編年」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第7号 秋田県埋蔵文化財センター 1992(平成4年)
8. 利部 修「秋田県・横手地方の須恵器編年」『東日本における古代・中世窯業の諸問題』大『古窯群群検討会・会津若松市教育委員会 1992(平成4年)

秋田県出土の銭貨資料集成

高橋 学

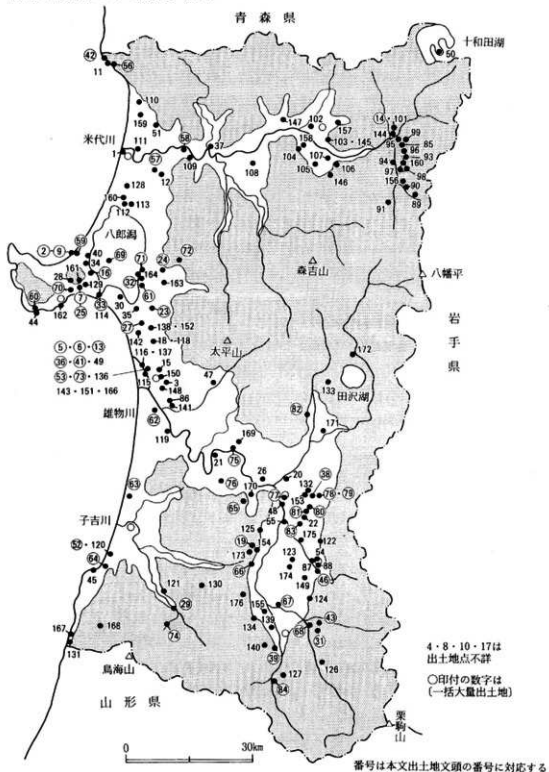
はじめに

土の中からお金が掘り出される、しかも大量になると、否応なく人々の関心を引く。新聞紙上にも「古銭ザクザク・・・」などの見出しで報じられることもある。出土したお金、それはまさに埋蔵文化財である。ところが発掘調査によらない銭貨、例えば一括して大量に出土する銭貨は、工事や耕作等に伴い偶然発見される場合が多く、銭貨自体に目を奪われ、出土状況、収納容器の有無などは等閑視される傾向にある。このことが考古資料としての価値を低減させ、出土銭貨の研究の進展を阻む要因ともなっている。

秋田県内では主に各種開発事業に係る発掘調査が実施されている。特に昭和50年代後半以降、その規模は拡大傾向にある。当然各時代・時期の遺構が検出され、遺物が出土する。その量はまさに膨大の一言である。出土遺物の中には、ごくごく少量の銭貨もある。中世あるいは近世の集落・館跡等を調査すると数枚から数十枚の銭貨が出土する場合がある。そもそも該期の調査において遺物はさほど出土しない。少ない資料から当時の地域・社会を復元しようとする時、出土した銭貨が大きな位置を占めるかもしれない。しかし現実的には銭貨を材料とした論考は、県内においてはほとんど認められない。これには前述の傾向が発掘による出土銭貨にも影響を及ぼしているとも考えられる。そこで小稿では出土銭貨に対する一層の認知と喚起を促す意図を含め、基礎作業としての出土銭貨の集成を行うものである。これには今後予想されるデータベース化を見据え現段階での県内資料を集成しようという側面も含んでいる。

出土銭貨集成

本銭貨集成では、県内出土の事例をその量の多寡及び時代を問わず行う。これには発掘調査で得られた資料、文献史料、工事等で偶然発見された資料も網羅しておく。記述にあたっては、江戸時代から昭和(戦前)については、発見史を兼ねて出土年の古い事例から列べる。昭和(戦後)以降は、出土地(遺跡)の種別・年代や一括出土の有無と量等から次のように項目を定め、県北から順に紹介する。項目は【一括大量出土地】【一括少量出土地】【中世の館跡・集落跡】【中世の墓・塚】【皇朝銭出土地】【近世の館跡・塚・神社跡等】【その他の出土地】とする。【一括大量出土地】は、一般には1,000枚以上の一括出土銭を指すようであるが、ここでは概ね200



第1図 銭貨資料出土位置図

枚以上とし、100枚以上200枚未満の一括出土を仮に【一括少量出土地】として区別させた。一方明確に中世期の館跡・集落跡とは断定できない場所から中国等の渡来銭が少量出土した場合も【中世の館跡・集落跡】に含めて紹介する。また【その他の出土地】は、出土銭貨の種別が不明なもの、寛永通寶等の近世日本銭が遺構外より出土した例を取めている。

以下の記述にあたって、銭名・銭種の掲載配列、初鋳年、その他銭貨に関する用語等については、永井久美男編『中世の出土銭—出土銭の調査と分類—』（1994年発行）に準拠させていた。なお出土地文頭の数字は、第1図の出十位置図番号に対応する。出土地の名称は各文献に掲載されている名を表記し、住所は可能な限り現住所（小字まで）を調べ記している。また発掘調査によらない事例の出土地に「遺跡」名が付されている場合は、銭貨出土地等として周知登録されている遺跡であることを示す。

【江戸時代から昭和（戦前）出土の銭貨】

1 大森下浜 能代市大森（文献1）

宇野親貞が寛保元年（1741）に著した『代邑見聞録』によると、「元禄七年（1694）甲戌地震の後・・・大森下浜菅交りの沙地へ折節往来ありて古銭など拾ひたまひける」との記述が見られる。大森下浜は、米代川河口左岸の日本海沿岸の大森、下浜集落にあたることから、おそらく海岸に打ち上げられた銭貨を拾ったことを記録したものと思われる。この記事が県内での出土銭の初例となる。

2 中石浜 男鹿市五里合中石（文献2—①～④）

① 享和元年（1801）に稿了された人見燕雨の隨筆集『黒甜瑣語』（四編巻之二）寺内村の銭の項にはいくつかの出土銭の記録がまとめられている。その中に「宝曆壬申の冬、雄鹿中石村の海岸へ銅銭数万を吹上し事あり。記号みな宋の年号にして、さばかりの異銭にもあらず」とある。宝曆壬申は、宝曆2年（1752）を指す。人見は出土した銭貨を実際に見ていたのかは不明であるが、享和元年に著した紀行文『夏ノ木草』には、「中石むらへ近づき、かの宝曆壬申の冬宋の古銭を網したる浜を尋ね」と中石浜を訪れたことを記している。

② また、鈴木重孝が嘉永年間（1848～54）に著した『絹繻』（巻之三）中石村の項にも、宝曆2年冬の中石浜出土銭を「当浜へ相揚候古銭」と記している。鈴木は銭種の一部も書き残している。それによると淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景德元寶、天禧通寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、皇宋通寶、嘉祐元寶（あるいは通寶）、治平元寶（あるいは通寶）、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、紹聖元寶（あるいは通寶）、元符通寶の16種類の北宋銭名が記されている。その他に「天福と云銭、これは晋の高祖の年号に候へ」とあることから、天福元寶（後晉938年初鋳）も含まれていたようである。

③ 中石浜の出土銭については、菅江真澄の『月の出羽路』（仙北郡八）にも「宝曆壬申の冬、雄鹿中石ノ浜に銅銭数万吹上し事あり」との記載が見られる。これは『黒甜瑣語』からの引用であることを明記している。

④ さらに、石井忠行が明治5年3月に著した『伊頭蘭茶話』（三の巻）にも同様の記事が見られる。

ここでは、寛政元年（1789）と昭和54年にも多量の出土銭が発見されており、後述する。

3 藤山観音 秋田市橋山（文献2—①）

『黒甜瑣語』によると、「其頃（宝暦年間か）橋山藤山の観音祠の辺にても古銭をほり出し」とある。同様の記事は『月の出羽路』（仙北郡八）にも認められる（文献2—③）。

4 番太村 湯沢市須川（文献3）

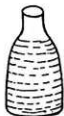
菅江真澄の『雪の出羽路』（雄勝郡一）須川村の項に古跡として「番太村とて橋より西の方にむかし家居ありし村跡也、そこに近き古河の辺りに、宝暦〔1751～64〕のころ古銭あまた掘得し」との記録が残っている。番太村の地名は現存しないが、旧高松村の小学に番沢がある。

5 雄物川辺 秋田市寺内か（文献4）

昭和22年に編纂された『寺内町誌』には、「明和の初年（1764）に河原御物川の辺で古銭を入れた壺を掘った。何れも世に稀な古代の甃で、壺の中に九ツの内といふ文字があった」とある。

6 高清水付近 秋田市寺内（文献4）

『寺内町誌』には、「明和八年（1771）九月十九日にも、高清水付近で甃に入れた古銭十六貫文余を掘出した。是は何銭であったか記していない」とある。



第2図
高清水付近
出土の甃

明和年間の出土銭については、『伊頭蘭茶話』（三の巻）にも「明和中城北寺内村里人土瓶を掘出す。内に唐銭数百千あり。五朱半兩數銭余は宋朝の銭也」記され、壺のスケッチが載せられている（第2図）。図の下には、「高さ二尺許素焼なり」とある。（文献2—④）

7 豹が崎 男鹿市脇本富永宇大倉（文献5）

狩野徳蔵が著した『雄鹿名勝誌』によると、江戸時代（18世紀後半か）大倉豹が崎において「同村の信五郎といふ者も同処より古銭一萬枚を掘得たりと云う」と記されている。豹が崎では明治8年にも多量の銭貨が出土しており、後述する。

8 舟越 男鹿市船越か（文献2—①）

『黒甜瑣語』奇銭の項には「安永戊戌の春、舟越村へ異船漂着せり。朝鮮国の漁船の類にや、長さ十間ばかり幅八尺余、舟子一人もなく舟中に釜一つ、甃に此常平銭百文余あり、背に半月露痕の点あざやかにして禁文。戸八。管全。当水。摠三。訓十。などの字あり。銭座の標記な

るべし。」と記されている。安永戊戌は、安永7年(1778)である。常平銭は朝鮮1678年初鑄の常平通寶である。本例は漂着船より得られたものようであり、厳密には出土銭とは言い難いかもしれない。

9 中石浜 男鹿市五里合中石(文献2—④)

前出の『伊頭園茶話』には、中石浜で再び大量の銭貨が打ち上げられたことを記している。寛政元年(1789)「同村浜に唐銭数万砂中へ吹上る。多くは宋朝已來の物也」とある。

10 豊嶋村 河辺町(文献2—①)

『黒甜瑣語』によると、「寛政のはじめ(1789年頃)に至りては豊嶋村にても一つの銭瓶をほり出せしに、元龜二年(1571)溝口氏久藏之と小の木片に銕りしはいかなる人にや」とある。同様の記事は、『月の出羽路』(仙北郡八)にも載せられている(文献2—③)。

11 岩館海岸? 八森町岩館(文献6)

佐藤清一郎著『秋田貨幣史』によると、寛政7年(1795)「山本郡岩館村の岩海岸で金、銀銭(外國銭)を拾う」とある。人見蕉雨の記録から引用したようであるが、引用原典不詳で筆者未確認である。

12 浄明寺首塚 能代市檜山(文献7—①②)

① 能代市檜山に所在する浄明寺では、寛政11年(1799)4月4日に裏山の麓にある塚より銭貨等が出土したことを寺社奉行に報告している。これを大越五水という人が弘化2年(1845)に密かに書写しており、後年貞崎勇助(1841~1917)が収集した文書の中に『山本郡檜山浄明寺掘山品之書上』として現存する(第3図)。同書には、銀皿に乗せられた頭蓋骨、水晶の数珠、絞金具、銀針に通された9枚の銭貨が図示されている。個々の銭貨も模写されており、開元通寶、乾元重寶、熙寧重寶、元豐通寶、元符通寶、崇寧通寶、宣和通寶、慶元通寶、咸淳元寶各1枚の銭種が判読できる。

② 出土銭の記事は、秋田藩士の淀川盛品が文化12年(1815)に著した『秋田風土記』にも次のように記されている。「庭前より鬮籠出、銀の台破れたり。水晶の念珠、輪銀に銀の文字種の銭九文あり。奉りし処又掘るへしとて返し賜るといへり」とあり、出土品は再び塚に埋納されたようである。

13 寺内村 秋田市寺内(文献2—①)

『黒甜瑣語』によると、「さりし庚申閏四月念日、土崎湊の者とや寺内村にて十貫余の古銭を掘得たり。府に献ず。多くは明和のはじめ見し銭のごとく五銖半兩尤も多し。かの九ツの宝嬰の中なるべし」とある。庚申は、寛政12年(1800)である。『寺内町誌』にも、同様の記載が見られ、「十貫余の古銭を掘った。いづれも五銖銭(秦一兩)半兩(秦一漢)が最も多かった」とある。

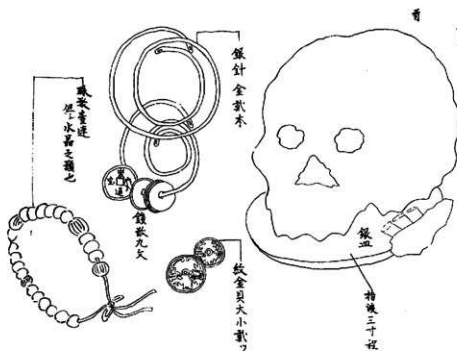


圖 此外首入候蓋欠ノ次ニ有

山家歌抄山海經云々青結云々

弘化二乙巳歲霜月十日密寫之大越主水

荻山

淨明寺

寛政十二己未四月

前より好出山

右通書四月四日寺内中

○此書は、寛政十二年四月四日、浄明寺内にて発見せられたるものである。其の文は、弘化二年乙巳、霜月十日、密寫の大越主水、荻山、淨明寺、前より好出山、右通書四月四日寺内中、とある。此の書は、浄明寺の歴史を記したものである。其の文は、弘化二年乙巳、霜月十日、密寫の大越主水、荻山、淨明寺、前より好出山、右通書四月四日寺内中、とある。此の書は、浄明寺の歴史を記したものである。



文書(約27.5×73cm)を分断させ上下に配し、原寸の39%に縮小した。

第3図 浄明寺首塚出土の遺物と銭貨(大館市立中央図書館蔵)

14 毛馬内古館 鹿角市十和田毛馬内（文献8）

伊藤宗兵衛が天保7年（1836）に著した『鹿角録起』古館の項には、「寛政のころ（1789～1800）、毛布の里下小路と云所の市人何かしなるもの、麴室を造れるの節土中より瓶をほり出せしか、古銭数百千銭のありて朽もせずして青くさひたるのみなり」の記事が見られる。毛馬内の古館は、現在中世城館である当麻館跡として周知されており、ここから出土したものと推測される。

15 泉山 秋田市泉か（文献2—①）

『黒甜瑣語』によると、「近き頃（1790年代か）城北中島の一士人、泉山の古館にて秋霧の鷹の鳥屋待せし時も古銭を拾ひ得たる事あり」。泉山の古館は、秋田市泉字三嶽根の熊野神社周辺を指すと思われ、『秋田県の中世城館』（文献9）には、泉館として周知されている。

16 福川 若美町福川（文献2—①）

『黒甜瑣語』によると、「今とし辛酉（-1801年）八月四日にも雄鹿福川村の農民、水かかりの堤をほりし時古銭十貫文を得たるに、宝暦の頃中石村にて得たりし銭のごとく、常にも周流の銭の内には稀にも見る所なれば愛づる事も少し」とある。雄鹿福川村は、現在の若美町福川と思われる。

17 雄鹿の浦 男鹿市（文献10—①②）

① 菅江真澄が文化元年（1804）に著した日記『恩荷奴金風』の図絵に「享和のころ（1801～1803）雄鹿の嶼なにかしの浦に寄來る舟のうちにことくにの泉ありて、公に率りし、のちはた磯辺にて童の拾ひたるといふを、ところどころに見し、みな常平通寶也」として、数枚の常平通寶の模写図・拓影図が載せられている。背には戸二、掾五、訓宿等の文字が認められる。同図の次頁には、大型の絵銭（服勝銭）拓影図も見られる。これも常平銭と一緒に採集されたものか。

② 常平通寶については、真澄が文化7年（1810）に著した日記『牡鹿の寒かぜ』の図絵にも「それのとし、雄鹿の浦に破れたり小舟のたたより来り、うちに常平通寶いと多くつたり。此泉、朝鮮通用の孔方也。その圖の舟にや。」との説明を加えた銭貨の拓影図を載せている。両記事が同じ内容について言及しているのか否かは明らかではないが、模写・拓影図を見る限りでは別々の銭貨を掲載しているようである。

18 館神八幡 秋田市下新城字下向（文献11）

菅江真澄が文化8年（1811）に著した日記『蒙過金球棠』の図絵には「館神八幡祠・・・をりとして貨幣を城山に得る事のありき。みな大觀通寶のみにして」と模写図入りの説明を加えている。館神八幡は、大正四年に諸社を合併して新城神社となり、現在秋田市下新城字下向に所在する。

19 善光堂（善光寺廃寺跡）大森町上溝（文献12）

『雪の出羽路』（平鹿郡三）上溝村の項、寺内の善光堂では、「近き年ならむか、此処より古銭幣四五貫文掘り出し事あるてふ」との記事が載せられている。同項の執筆は、文政7年（1824）とされることから1810～20年代の出土か。『秋田県遺跡地図（県南版）』（文献13）には、善光寺廃寺跡として「板碑、銭貨108枚」と記録されている。

20 四ツ屋 大曲市四ツ屋（文献2-③）

『月の出羽路』（仙北郡八）四ツ屋邑の項に、現在の大曲市四ツ屋の玉川（雄物川の支流）縁で出土したという銭貨についての記載が見られる。「文政八年（1825）乙酉三月の末その日、玉川の岸崩たり。むかしそこに了徳と云ひし医者家居跡にて、字地を了徳といふ。其跡あたりとおぼしくて古銭幣ここら出たり。そが中に五銖泉もまじりたるよし。」とし、別添の図絵には7枚の銭貨拓影図が掲載されている。銭種についての記述はないが、五銖銭の拓影はなく、天聖元寶、皇宋通寶、治平元寶、政和通寶などの銭名が判読できる。

21 子越沢田 西仙北町強首（文献2-③）

『月の出羽路』（仙北郡二）強首村の項に、「子越沢田新墾せしとき、人の白骨あまた古銭なども掘り出たり」とあり、墓内より銭貨が出土したことが窺える。旧強首村には、根越沢田の小字名が残る。

22 安楽寺跡 六郷町安楽寺（文献2-③）

『月の出羽路』（仙北郡一二）には、六郷町大悲山真光寺所蔵の銭貨を紹介している。これによると、銭貨は「安楽寺古鉢盆中に掘出る」とし、「富壽神寶、貨泉、半兩、五銖、小五銖」名を付した5枚の拓影図が載せられている。このうち、「半兩」は、長野県塩尻市吉田若宮1次出土銭の八銖半兩（前漢、B. C. 186年初鋳）に類似する。また「五銖」は、『中世の出土銭』の分類に従うと六朝期（初鋳年不詳）の五銖に、「小五銖」は、後漢期の五銖（A. D. 24年初鋳）にそれぞれ該当しそうである。なお安楽寺は、14世紀後半には廃寺となったようである。

23 千刈田 昭和町豊川龍毛字千刈田（文献14）

天保4・5年（1833・34）頃、南秋田郡豊川村龍毛の川上という人が「五合入位の小瓶」に入った銭貨を龍毛字千刈田より掘り出したようである。これら銭貨は、明治に入ってから石川理紀之助により鑑定が行われ、明治41年『古泉 川上の巻』としてまとめられている。同書には以下に記す35種216枚の銭貨の拓影が貼付されている。

開元通寶12、乾元重寶1、宋通元寶1、淳化元寶3、至道元寶6、咸平元寶2、景德元寶5、祥符元寶5、祥符通寶4、天輔通寶2、天聖元寶6、景祐元寶3、皇祐通寶23、至和元寶2、至和通寶1、嘉祐元寶4、嘉祐通寶6、治平元寶6、熙寧元寶13、元豐通寶28、元祐通寶11、紹聖元寶8、元符通寶6、聖宋元寶8、大觀通寶3、政和通寶8、淳熙元寶1、嘉定通寶1、紹定通寶1（背：

二か)、開慶通寶1、咸淳元寶1、正隆元寶1、洪武通寶20(背:浙、一銭か各1)、永樂通寶12、朝鮮通寶1である。開元通寶の1枚は篆書体であることから、南唐960年初鑄の開元銭と思われる。さらに別の1枚は石川が八方穿(中央の方孔の各辺に切り込みが認められるもの)とした加工銭である。

24 砂沢城跡周辺 五城目町羽黒前か(文献15)

『五城目町史』によると、「砂沢城跡の近くから洪武通寶四貫文が出土」との記載がある。江戸時代の出土と思われる。また同町史には、「前平山に近い稲荷前・・・から秋の字を刻んだ古銭が出土している」とも記されている。前平山は、砂沢城跡が位置するところであるが、詳細は不明である。

25 豹が崎 男鹿市脇本富永宇大倉(文献5・16)

前出の『雄鹿名勝誌』によると、明治8年3月19日大倉豹が崎において「富永村農佐藤八右衛門の堀たる古銭なり、開元通寶より永樂通寶まで二十一種取交ぜ八千八百枚」と記されてある。これらの銭貨については、後年石川理紀之助が整理を行い、明治40年に拓影本『豹が崎』(乾、坤)にまとめている。これによると発掘されたのは明治8年2月12日で、「大倉の西裏なる沢田の山崎豹が崎」で出土したようである。銭貨は杉の曲物に入れられていたとされる。『豹が崎』には、次の37種553枚の拓影が貼付されている。

開元通寶29(うち2枚の背:洛か)、乾元重寶1、宋通元寶4、太平通寶4、淳化元寶6、至道元寶8、咸平元寶4、景德元寶9、祥符元寶12、祥符通寶7、天禧通寶13、天聖元寶27、明道元寶7、景祐元寶15、皇宋通寶45、至和元寶6、至和通寶2、嘉祐元寶5、嘉祐通寶16、治平元寶12、熙寧元寶35、元豐通寶101、元祐通寶41、紹聖元寶28、元符通寶12、聖宋元寶21、大觀通寶3、政和通寶24、宣和元寶1、淳熙元寶3、嘉泰通寶1、開禧通寶1、嘉定通寶4(背:八、九、十一、十二)、正隆元寶1、大定通寶1、洪武通寶6(1枚の背:浙)、永樂通寶38である。開元通寶のうち2枚の背に洛と思われる文字が残る。開元通寶は唐朝621年を初鑄とする例が多いようであるが、背文字を有する開元銭は初鑄を845年におく、紀地銭あるいは会昌開元と称される銭のようである。また元豐通寶のうち3枚は前出の千刈田例同様方孔の加工銭である八方穿が認められる。残りの銭貨は鋳つがして山の神の尊像を造ったそうである。

26 家後 神岡町神宮寺(文献6)

『秋田貨幣史』によると、明治15年「仙北郡神宮寺村家後の道で一分銀三十枚発掘(秋田日報)」とある。詳細は不明である。

27 堀内 秋田市金足字堀内(文献17)

明治10～20年代、堀内にて「地下三尺位」のところから3,000枚程の銭貨が出土した。銭貨は「お鉢形の容器へ、かぶせ蓋になってその中にあった」そうである。銭種の明らかなものは次の

とおりである。

淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景德元寶、祥符元寶（通寶）、天禧通寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、至和元寶（通寶）、治平元寶（通寶）、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、元符通寶、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、紹熙元寶、嘉泰通寶、嘉定通寶、紹定通寶、正隆元寶、洪武通寶、永樂通寶、宣徳通寶、朝鮮通寶の他、皇宋通寶あるいは皇宋元寶、太平通寶あるいは太平興寶、乾重、天親という銭名も載せられている。最古銭は、太平興寶（安南970年初鋳）あるいは太平通寶（北宋976年初鋳）、最新銭は朝鮮通寶（朝鮮1423年初鋳）である。

28 寒風山山麓 男慶市（文献6）

『秋田貨幣史』によると、明治25年「寒風山山麓より永樂通寶出土す」とある。

29 大久保 島海町大久保（文献18）

明治31年8月、畑耕起中に地下15cm程のところから「黒漆塗りの丸い重鉢（高さ25cm、直径35cm）」に入った多量の銭貨が発見された。その量は推定で8,000～9,000枚、重量にして27kgに達するという。銭貨の一部（147枚）は、『島海町史』に65種の銭名とその枚数が記されているが、存在しないはずの銭名を除いた一覧を次に紹介する。

開元通寶8、乾元重寶1、周通元寶1、宋通元寶3、太平通寶3、淳化元寶1、至道元寶4、景德元寶5、祥符元寶1、天禧通寶1、明道元寶1、景祐元寶3、皇宋通寶17、至和通寶1、嘉祐通寶3、治平元寶3、治平通寶3、熙寧元寶？2、元豐通寶11、元祐通寶3、紹聖元寶5、元符通寶1、聖宋元寶1、大觀通寶3、政和通寶3、宣和通寶1、淳熙元寶3、紹熙元寶1、慶元通寶1、嘉泰通寶1、開禧通寶1、嘉定通寶1、大宋元寶2、紹定通寶2、皇宋元寶1、景定元寶2、正隆元寶1、和同開珎1である。最古銭は、開元通寶（唐621年初鋳）、最新銭は景定元寶（南宋1260年初鋳）であり、本出土地では大多数の中国銭に混じて和同開珎が含まれている点に特徴がある。

30 大崎 天王町大崎（文献19）

明治33年頃の編纂と推定される『天王旧蹟考』には、大崎村「上谷地の内大久保境に少し湧たる処り、・・・も此処の瀉の中に寺ありしといふ、大浪の時には古銭のよることあり」との記事が載せられている。瀉は八郎瀉を指す。

31 東福寺 稲川町東福寺字上野（文献20）

明治40年（1907）頃、東福寺字上野（俗称五輪石）の畑の崖上より銭貨約5,000枚が出土した。「表土下二尺位の処より丸木を削り抜いた船形の容器に棧木に積んで」あったそうである。出土当時銭種は、53種あったようであるが、現在は次の30種48枚が確認されている。

開元通寶2、宋通元寶1、太平通寶1、淳化元寶1、至道元寶2、咸平元寶1、景德元寶1、祥符通寶1、天禧通寶1、天聖元寶3、明道元寶1、景祐元寶1、皇宋通寶4、至和元寶2、嘉祐通寶1、治平元寶2、熙寧元寶2、元豐通寶2、元祐通寶2、紹聖元寶1、元符通寶2、聖宋元寶3、大

観通寶1、政和通寶2、宣和通寶3、紹熙元寶1、嘉泰通寶1、紹定通寶1、淳祐元寶1、治聖元寶？1である。

32 廣根 八郎潟町一日市宇昼寝下（文献21）

明治42年、一日市の「ひろねという処の畑中」より銭貨が約7,000枚掘り出された。出土したのは4月28日に約5,000枚、5月3・4日に約2,000枚の2度にわたるようであり、その地点は同一ではないものの、ほぼ隣接する場所で発見されたようである。このことは発見者の畠山喜代治という人が、石川理紀之助に鑑定を依頼した文書に添付されていた略図により明らかである。これによると出土地に隣接して神社（社地）があり、その西側に二階堤が描かれている。現在この両者は存在しないが、堤の位置から推定すると、神社は大正3年に一日市神社に合祀された相染神社のようであり、出土地は現在の一日市宇昼寝下にあたるようである。銭貨の分類をおこなった石川は、大正4年に『ひろねのいづみ』としてまとめている。同書には枚数の記載はないものの、次の44種の銭名が記されている。

開元通寶、乾元重寶、唐國通寶、宋通元寶、太平通寶、淳化元寶、至道元寶、咸平元寶、景德元寶、祥符元寶、祥符通寶、天禧通寶、天聖元寶、明道元寶、景祐元寶、皇宋通寶、至和元寶、至和通寶、嘉祐元寶、嘉祐通寶、治平元寶、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、紹聖元寶、元符通寶、聖宋元寶、人觀通寶、政和通寶、宣和通寶、淳熙元寶、紹熙元寶、慶元通寶、嘉泰通寶、開禧通寶、嘉定通寶、紹定通寶、淳祐元寶、皇宋元寶、景定元寶、咸淳元寶、正隆元寶、洪武通寶、永樂通寶である。

33 一向遺跡 男鹿市船越字一向（文献22）

前出の『網師』船越村の項には、一向において江戸時代より井戸跡、瀬戸類が土中より出土することが記されている。この時期の瀬戸類は現存しないようであるが、明治時代には、「曲物の井戸数個と黄瀬戸、志野をはじめとする陶器と煮入りの古銭2,000枚を掘り出」されている。このうち『船越誌』には、銭貨16枚の拓影図が載せられており、開元通寶、景德元寶、祥符通寶、天聖元寶2、熙寧元寶、元豐通寶2、元祐通寶、紹聖元寶、元符通寶、聖宋元寶、正隆元寶、洪武通寶、永樂通寶、宣徳通寶の銭名が判読できる。なお、同地は八郎潟干拓事業に伴う新水道工事の際（昭和38年）にも多くの井戸棒や陶磁器類が出土しており、昭和40年には銭貨も採集されている。

34 鶴ノ木経塚 若美町鶴ノ木（文献6）

『秋田貨幣史』によると、「琴浜村鶴ノ木経塚から度々古銭出土す」とある。明治年間の出土か。琴浜村鶴ノ木とは若美町鶴ノ木を指すものと思われるが、現在同地区周辺では塚・経塚は周知されていない。

35 藤田 昭和町大久保宇天神下か（文献23）

石川理紀之助がまとめた『適産調』大久保村の項(明治34年編)には、「古銭 藤田の清水の出づるその街道の西の畑より出たる由 天神社の辺にもあり」との記録がある。藤田は現在の昭和町大久保字天神下あたりか。

36 鞆ノ木・焼山 秋田市寺内(文献4)

前出の『寺内町誌』古銭の項には、明治期の出土例にも言及している。「明治年間にも古銭入りの甕が屢々発見された。これは筆者も度々見たことがあるが、唐、宋の古銭で、他所によく見る洪武、永楽の如き元明時代のものではなかった。出土箇所は鞆ノ木と焼山とである。」

37 加護山遺跡 ニツ井町荷上場字加護山(文献24)

銭貨は、その鋳造地でも発見されることがある。加護山は、阿仁銅山の粗銅を製錬するため安永3年(1774)に創設された吹分処(製錬所)である。文久2年(1862)から明治3年(1870)までの約8年間には、秋田一両銀判、秋田二分銀判等の銀銭、秋田銅山至寶百文銭、加護山一文銭(寛永通寶)等の銅銭を含め12種の銭貨も密鋳造されていた。ここは藤琴川(米代川支流)左岸縁に立地しており、明治27年(1894)の閉所後には、跡地あるいは河床より各種銭貨、埴塀等の用具が度々出土している。これらの出土遺物から加護山での鋳銭が立証されたことになる。

38 厨川谷地遺跡 千畑町土崎字厨川谷地(文献25)

大正4年秋、厨川谷地の水田下より2度にわたり計約12,000枚の銭貨が掘り出された。埋納していた容器の有無は不明であるが、銭貨は「二尺ほどの葉らしいものと一緒に」出土したようである。その他の遺物には、「飯器、須恵器の破片・・・住家が消失したと思われる多量の凝灰物も見られたと伝えられている」がある。

大正13年9月、内務省史蹟考古官柴田常恵が銭貨約500枚を鑑定し、「大部分が宋代の銭である。「洪武通寶」「永楽通寶」などは1枚も見当たらなかった。・・・(3枚の)「五銖」銭を発見した。其の外珍しいのに「建炎通寶」がある」と記録されているが、その他の銭種は明らかではない。

39 土沢 湯沢市土沢字西土沢(文献26)

大正5年頃、山田村「土沢字西土沢の畑地より古銭貨一千余枚」が出土した。「発掘当時の状況を聞くと、土を掘って木炭を敷き詰め、その上に古銭貨を棧木に積み重ねてあった」そうである。現在600～700枚が現存しているようである。『湯沢市史』によると、判読されている銭種は次の28種、100枚である。

開元通寶1、乾元重寶1、太平通寶3、淳化元寶4、至道元寶4、咸平元寶1、景德元寶5、祥符元寶1、天禧通寶5、天聖元寶6、景祐元寶2、皇宋通寶8、至和元寶3、嘉祐通寶2、治平元寶11、熙寧元寶6、元豐通寶7、元祐通寶6、聖宋元寶6、大觀通寶2、政和通寶5、宣和通寶4、

建炎通寶1、慶元通寶1、嘉泰通寶1、嘉定通寶1、淳祐元寶2、正隆元寶1である。

40 松木沢 若美町松木沢字松木 (文献27)

大正8・9年頃、松木沢字松木において「裏庭に池をつくるため掘りくぼめたところ壺に入った古銭が出土した」。銭貨には寛永銭が「混入していたかもしれない」とのことである。

41 綾之小路 秋田市寺内字鞆ノ木 (文献4)

『寺内町誌』には、「最近大正十一年旧二月九日の朝、現在寺内町綾之小路の長澤巳之吉氏の畑地より、土を採取している時隙先に当たった異常なものが古銭を入れた壺であった。壺は決して精巧なものではなく、指痕のはっきりしている古代美術を歴然と物語る稚拙なものであった。一部は古四王神社に大事に保管され、一部は・・・香爐と花押に鋳直され」たそうである。寺内町綾之小路は、現在の寺内字鞆ノ木にあたる。

42 物見 八森町物見 (文献27)

『八森郷土誌資料』第27号によると、大正13年、八森町物見において鉄道工事中に「渤海の古銭が多量に出土した」との記載が見られる。詳細は不明である。なお物見の近くの林ノ沢では昭和59年に多量の銭貨が出土している。

43 牛形城跡 稲川町大倉字館 (文献9)

『秋田県の中世城館』によると、中世城館牛形城では、「大正末年に三層沢から宣徳通寶を下限とする明・宋銭が279枚発掘され、漆埋蔵の伝説を伝える」との記載がある。

44 館山 男鹿市船川港双六字館山 (文献27)

昭和初年、双六字館山で建築工事中畚入りの古銭を掘り出したといわれる。ここには中世城館である双六館が位置している。

45 丁刃森 仁賀保町平沢

昭和初年、日本海に注ぐ小河川である大沢河口改修の際、独立小丘状を呈する丁刃森南辺より、硜石とともに銭貨が出土したという。硜石は、丁刃森中腹に座する板碑(建武碑：建武四年の年号が彫られている)の下に埋め戻されたそうであるが、銭貨の所在は不明である。ただし出典は明らかではないが、昭和6年頃に記録されたと思われる銭貨の略図(線書)が残されており、それには次の22種39枚が図示されている。

開元通寶1、乾元重寶1、咸平元寶1、景德元寶1、祥符元寶1、天禧通寶1、大聖元寶2、景祐元寶1、皇宋通寶4、至和元寶3、嘉祐元寶2、治平元寶1、熙寧元寶3、元豐通寶2、元祐通寶3、紹聖元寶2、元符通寶1、聖宋元寶4、政和通寶2、宣和通寶1、淳熙元寶1(背：十三)、紹定通寶1である。

本出土例は、遠田喜一氏(仁賀保町文化財保護協会)から教示いただいた。

46 睦成 横手市睦成 (文献6)

『秋田貨幣史』によると、昭和7年「横手川護岸工事中、寛永銭、当百銭、明治銅貨等約三十貫出土す」とある。詳細は不明である。

47 館ヶ沢館跡 河辺町三内字館ヶ沢（文献29）

昭和9年6月頃、三内字館ヶ沢地内で畑地開墾中に銭貨が出土した。出土枚数、外容器の有無は不明であるが、銭貨は紐で通して結ばれていたようであり、現在20枚発見者宅に保管されている。『河辺町の遺跡』には、咸平元寶、天福通寶、至和元寶（あるいは通寶）、元豊通寶、元祐通寶、洪武通寶等の銭名が記されている。館ヶ沢は、岩見川（雄物川の支流）右岸に立地する小規模な館跡として周知されている。

48 八幡神社下 大曲市丸の内町（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和9年「大曲市八幡神社下の雄物川の欠地より宋銭度々出土す」とある。八幡神社下には、雄物川の支流丸子川が流れており、ここから出土したものらしい。

49 寺内大悲寺跡・勝平山 秋田市寺内・新屋（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和10年「高清水大悲寺跡、勝平山から唐宋銭出土す」とある。大悲寺は、現在秋田市旭北寺町に位置するが、これは江戸時代初期に秋田藩主佐竹義宣が現在地に移したものであり、古記によると土崎湊三ヶ寺の一として、弘安6年（1283）に寺内字焼山に創建されたと伝えられている。『大悲寺七百年史』（文献30）によると「大悲寺跡から中国の宋銭が数十枚、出土した」と記されている。一方勝平山は、秋田市新屋に位置する標高49.4m程の小山を指すと思われるが詳細は不明である。

50 十和田湖中湖 小坂町休屋（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和10年頃「十和田湖、十和田神社の占場の湖水から夥しい金、銀、銅、鉄銭、銀貨、銅貨が潜水夫によって引き揚げられる」とある。占場の湖水は、十和田湖に突き出る二本の半島に挟まれた中湖を指す。占場は、十和田湖第一の霊地とされ、神社参拝者がここから浄財を湖中に投ずる風習があり、水揚げされた銭貨は信仰に伴う賽銭と推定される。

51 内林遺跡 峰浜村石川字内林（文献31）

昭和15年頃、塚に納められていた甕の内部より少量の銭貨が発見された。峰浜村教育委員会の松田純一氏の教示によると、塚を覆っている土にはたくさんの石が入っていたことから積石塚かもしれない。甕は二斗甕でいくつも並んで出ており、塚を掘った人は染物でもやっていたのではないかと考えたそうである。銭貨が入っていたのはその内の1つであり、少ししか出ていないようである。現在銭貨及びその容器である甕の所在は明らかではない。なお「秋田県遺跡カード」には、「戦前迄は経塚が存在していたが、農耕の爲整地された。・・・付近に方形で土壇状の地形をした場所を確認している。」との記載もある。

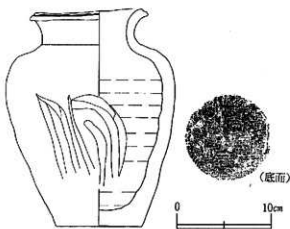
同遺跡は、昭和53年に園場整備事業に伴う範囲確認調査が実施されている。この結果では「小規模な空産」や溝状遺構、ビットが検出され、土師質土器（かわらけの坏・皿）、珠洲系陶器（甕・壺）、青磁片などが出土している。時期的には13世紀代と推定される。

52 浜館跡 西目町出戸字館

昭和17年4月、浜館跡公園化に伴う工事中、紐で結わえられた銭貨が両手一杯程（200～300枚位か）出土したそうである。しかし錆着していたことから大部分は捨てられたようである。この時の工事では、石鉢、土器、焼米等も発見されている。銭貨の一部は西目町公民館の斎藤俊明氏により判読されている。内訳は開元通寶、太平通寶、咸平元寶、天聖元寶、皇宋通寶、治平元寶、熙寧元寶、元豐通寶、元祐通寶、紹聖元寶、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、宣和通寶、咸淳元寶、洪武通寶、永樂通寶、宣徳通寶、紹平元寶？の19種類である。なお、同館跡では昭和50年にも銭貨の出土例が報告されており、後記する。

53 鞆ノ木 秋田市寺内字鞆ノ木（文献4・32）

出土した時期は明示されていないが、『寺内町誌』には、「壺形土器であって、器の全面に斜行した細い縄目文が印せられてある。唐、宋の古銭が沢山遁入ってあった。出土箇所は鞆ノ木で、国道の北側地表下三尺有余、摺鉢やうのものに覆われてあった。高一尺三寸、口径六寸五分、底径三寸七分、口に近く溢れた所周囲一尺八寸、口厚四分、胴の最も膨れた所周囲三尺二寸一分」と記されている。この意は、その法量から現在秋田市教育委員会に所蔵されている珠洲系陶器の壺を指すものと考えられる。陶器の製作年代は、珠洲編年に従うとⅡ期にあたり、13世紀前半～中頃と見られる（第4図）。



第4図 鞆ノ木出土と推定される珠洲系の壺

54 横手城本丸 横手市城山町（文献6）

『秋田貨幣史』によると、「横手城本丸の曲り道から洪武通寶出土」とある。時期は不明であるが、戦前のようなのである。

55 角間川 大曲市角間川町（文献6）

『秋田貨幣史』によると、「大曲市角間川の横手川々欠地より宋銭々々出土」とある。時期は不明であるが、戦前のようなのである。

【一括大量出土地】

一括大量銭は、その出土後に分配されたり、銅器に改鑄されたり、あるいは戦時中には銅素材として供出され、銭種はおろか数量すら明確でない場合が多い。ここではある程度銭種の分類がなされている大量中世銭出土例(56~68)、近世銭が主体あるいは客体的に混じる例(69・70)、銭種等ほとんど不明確な例(71~84)に分けて記述する。

56 林ノ沢 八森町林ノ沢(文献33)

昭和59年7月2日、日本海汀線まで200m程の八森町林ノ沢台地にて土止工事中に地下40cm程のところ曲物に入れられていた多量の銭貨が発見された。曲物は、現在その底板のみ残存しており、底径は24cm、厚さ0.5cmである(写真1左)。銭貨と共に保管されていた中に薬紐(径2.5~3mm程で左撚り、写真1右)があり、銭絡の状態では埋納されていたと思われる。『秋田魁新報』7月7日付に「中国の古銭6,700枚ザクザク、八森で工事中に発見」との記事も掲載されている。出土銭は、昭和62年に佐々木正雄氏が総数6,720枚を55種に分類している。銭種は以下のとおりである。

五銖6、開元通寶532、乾元重寶15、周通元寶2、唐國通寶3、宋通元寶17、太平通寶58、淳化元寶51、至道元寶115、咸平元寶106、景德元寶156、祥符元寶183、祥符通寶63、天禧通寶152、天聖元寶297、明道元寶18、景祐元寶78、景祐元寶か8、皇宋通寶861、至和元寶83、至和通寶29、嘉祐元寶82、嘉祐通寶127、治平元寶103、治平通寶14、熙寧元寶723、元豐通寶763、元祐通寶607、紹聖元寶279、元符通寶91、聖宋元寶260、大觀通寶84、政和通寶248、宣和通寶16、建炎通寶1、淳熙元寶36(背：十、十一、十四~十六あり)、紹熙元寶6(1枚の背：四)、慶元通寶11(1枚の背：四)、嘉泰通寶5、開禧通寶4、嘉定通寶26(背：元、六、十~十三あり)、大宋

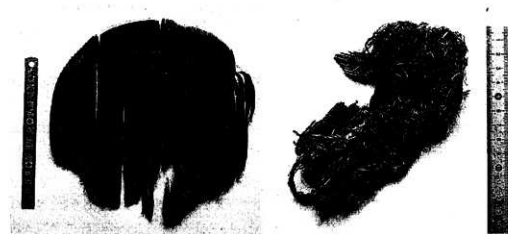


写真1 林ノ沢出土の容器底板(左)と雑用の薬と容器断片

元寶3、紹定通寶11(背:四~六)、端平元寶1、嘉熙通寶4(1枚の背:三)、淳祐元寶7、皇宋元寶14、景定元寶9、咸淳元寶10(1枚の背:二)、正隆元寶3、天聖通寶?9、至正元寶?1、咸元通寶?2、判読不能327である。五銖は、実見した限りでは「五」の字形より後漢期と思われる。元祐通寶のうち1枚は孔を円形に加工しており、また淳熙元寶の1枚は孔が八方穿を示す加工銭である。

遺物は現在、八森町教育委員会に保管されており、銭貨の一部は額装され町内の小中学校・公民館に展示されている。

57 上平張遺跡 能代市檜山字上平張(文献34)

昭和53年6月23日、能代市檜山の瀬戸沢と称される沢先端に位置する新田堤の水位の下がった水辺で青錆で覆われた多量の銭貨が発見された。銭は縄状のもので結わえられていたそうであるが、容器は確認できなかった。出土枚数は発見者が直後に記載したと思われるメモには4,960枚(筆者実見)とあり、出土時に一部はバラで見ついていることから、埋納時は5,000枚以上であったと推定できる。現在の保管枚数は4,764枚である。このうち『能代市史』考古編には、武田孝義氏が2,220枚の分類を行っている。その銭種は次のとおりである。

開元通寶100、乾元重寶5、唐國通寶4、宋通元寶14、太平通寶30、淳化元寶46、至道元寶61、咸平元寶70、景德元寶72、祥符元寶128、天禧通寶61、天聖元寶69、明道元寶9、景祐元寶17、皇宋通寶180、至和元寶8、至和通寶2、嘉祐元寶10、嘉祐通寶14、治平元寶18、熙寧元寶70、元豐通寶244、元祐通寶123、紹聖元寶67、元符通寶14、聖宋元寶64、大觀通寶4、政和通寶39、宣和通寶3、淳熙元寶7、慶元通寶2、嘉泰通寶2、嘉定通寶2、大宋元寶1、紹定通寶1、皇宋元寶1、景定元寶1、正隆元寶2、大定通寶1、洪武通寶15、永樂通寶625、宣徳通寶14である。その他「中国銭のほか朝鮮の朝鮮通寶、安南銭が含まれ、和銭(皇朝銭)はない。」と記している。銭貨は現在発見者宅に保管されている。

58 新大林遺跡 ニツ井町飛根字新大林(文献35)

昭和38年11月、米代川左岸の河川敷に程近い平坦地、大林の通称「やしきの畑」から「曲げっぱのような桶にびっしり入っていた」銭貨が発見された。出土総数約1万枚との記載はあるが、正確な枚数は明らかではない。銭名は次の21種が『ニツ井町史』に記載されている。

開元通寶、乾元重寶か(町史には唐朝の乾元大寶と記載)、宋通元寶、太平通寶、淳化元寶、景德元寶、天聖元寶、皇宋通寶、嘉祐通寶、治平元寶、熙寧元寶、紹聖元寶、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、宣和通寶、淳熙元寶、慶元通寶、紹定通寶、景定元寶、洪武通寶である。

銭貨は現在発見者が保管しているようである。

59 北浜野 男産市五里合中石字北浜野(文献27)

昭和54年、日本海汀線まで約300mの砂丘上(標高18m)に位置する北浜野において、砂を採

取中に「一塊の古銭があらわれ」た。「古銭のほか何等の伴出物はなく、裸のまま埋められていた」ようであるが、銭貨の穿には「埋蔵当時と思われる薬が付着しており」縞の状態で埋納されていたと考えられる。磯村朝次郎氏らが「男鹿半島出土の古銭」の中で出土銭貨の分類と分析を行っている。銭種は以下のとおりである。

開元通寶87、乾元重寶1、唐國通寶1、宋通元寶6、太平通寶9、淳化元寶8、至道元寶23、咸平元寶16、景德元寶27、祥符元寶28、祥符通寶25、天禧通寶32、天聖元寶53、明道元寶2、景祐元寶20、皇宋通寶151、至和元寶10、至和通寶5、嘉祐元寶27、嘉祐通寶24、治平元寶30、治平通寶7、熙寧元寶131、元豐通寶138、元祐通寶101、紹聖元寶46、元符通寶12、聖宋元寶48、大觀通寶5（背：四、六、十一、十三、十四）、政和通寶47、宣和通寶3、淳熙元寶5、紹熙元寶1（背：元）、慶元通寶5（うち2枚の背：二、三）、嘉泰通寶1（背：元）、嘉定通寶5、紹定通寶3（うち2枚の背：元、三）、淳祐元寶1、正隆元寶4、大定通寶2、至大通寶1、大中通寶1（私鑄銭）、洪武通寶112（背：福、浙各1枚、一福32枚）、永樂通寶123、島銭1、無文銭370、判読不能10の計44種1,768枚である。同報告には、銭貨の書体、背文字、鑄溜り、私鑄銭の有無等について分析が行われ、所見が加えられている。

60 打越 男鹿市船川港双六字打越（文献27）

昭和30年頃、双六字打越の畑地から耕作中に「ミゴ縄を通した古銭を発掘。むしろにいったい広げるだけあり、寛永銭は含んでいなかった」ようである。銭種は、開元通寶、淳化元寶、祥符元寶（通寶）、皇宋通寶、治平元寶（通寶）、元豐通寶、紹聖元寶（通寶）、聖宋元寶、大觀通寶、政和通寶、淳熙元寶、正隆元寶、大中通寶、洪武通寶、朝鮮通寶の15種認められるという。

61 今戸遺跡 井川町今戸字寺の内（文献36）

昭和49年、今戸字寺の内浅野氏宅地内で防火水槽工事中に「地下2・3mの粗い青砂の層から」多量の銭貨が出土した。出土量は「ポリバケツで三分の一くらい」である。その後、大多数は散逸してしまったが、225枚の銭種の判読が行われている。

内訳は開元通寶22、乾元重寶2、宋通元寶1、太平通寶2、至道元寶4、咸平元寶3、景德元寶3、祥符元寶4、祥符通寶3、天禧通寶2、天聖元寶10、景祐元寶3、皇宋通寶32、至和元寶3、至和通寶1、嘉祐元寶4、嘉祐通寶9、治平元寶1、治平通寶1、熙寧元寶17、元豐通寶28、元祐通寶31、紹聖元寶9、元符通寶2、聖宋元寶6、大觀通寶2、政和通寶7、宣和通寶1、淳熙元寶1、紹熙元寶1、淳祐元寶3、景定元寶1、咸淳元寶2、判読不能4である。淳祐元寶のうちの1枚は2文銭（折二銭）である。

遺物の一部は現在、井川町歴史民俗資料館に保存展示されている。

62 豊岩 秋田市豊岩豊巻字居使（文献37）

昭和52年8月26日、豊岩豊巻字居使に所在する湯沢院の裏山で同寺の墓地拡張工事中、深さ約30cmの土中より1,486枚の銭貨が出土した。容器は発見されていないが、銭貨穿内に縄が一部残存することから、絹の状態で埋納されていたことが窺える。銭種は次のとおりである。

開元通寶80、乾元重寶5、唐國通寶1、宋通元寶7、太平通寶9、淳化元寶9、至道元寶19、咸平元寶20、景德元寶26、祥符元寶29、祥符通寶18、天禧通寶30、天聖元寶66、明道元寶8、景祐元寶15、皇宋通寶150、至和元寶9、至和通寶5、嘉祐元寶9、嘉祐通寶19、治平元寶25、治平通寶3、熙寧元寶100、元豐通寶153、元祐通寶109、紹聖元寶42、元符通寶15、聖宋元寶47、大觀通寶13、政和通寶50、宣和通寶3、淳熙元寶3（背：月、十、十二）、慶元通寶5（背：元、四）、嘉泰通寶2（1枚の背：二）、嘉定通寶3（背不明）、淳祐元寶2（背：二）、阜宋元寶1（背不明）、景定元寶1（背：二）、正隆元寶1、洪武通寶79（背：浙5枚、一銭1枚）、永樂通寶201、宣徳通寶11、朝鮮通寶5、判読不能78である。

63 深沢 本荘市親川字深沢

昭和59年12月2日、親川字深沢の砂採取跡地（日本海汀線まで600m程の砂丘地）で砂遊びをしていた中学生2人が、壺に入った多量の銭貨を発見した。『秋田魁新報』12月5日付には、「中国の古銭ザクザク・・・2360枚」との記事が載せられている。同紙によると、銭貨が出土したのは、「地下3mほどの土中だった」とされる。壺は10片程に割れていたが、接合の結果、胴下半部から底部のみの珠洲系陶器壺（写真2、底部は静止糸切り）であることが判明した。現況での法量は、高さ16.3cm、底径9.8cm、最大径28.5cmであり、陶器内部には緑青が付着しており、明らかに銭貨が入れられていたことを物語る。出土銭貨は現在、容器である壺と共に本荘市郷土資料館に2,426枚が保管展示されており、同館において整理作業が継続中である。判読した銭

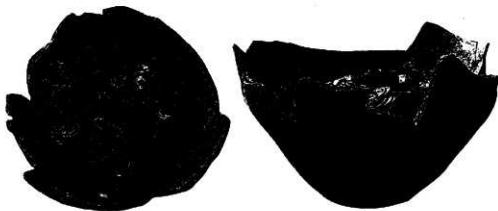


写真2 深沢出土の容器に入った銭貨

種は、平成8年2月20現在で次の40種593枚である。

開元通寶63、貞元重寶2、宋通元寶2、太平通寶13、淳化元寶6、至道元寶9、咸平元寶12、景德元寶11、祥符元寶11、祥符通寶3、天禧通寶14、天聖元寶31、明道元寶8、景祐元寶10、皇宋通寶62、至和元寶3、至和通寶2、嘉祐元寶8、嘉祐通寶4、治平元寶17、治平通寶3、熙寧元寶44、元豐通寶55、元祐通寶50、紹聖元寶29、元符通寶6、聖宋元寶14、大觀通寶20、政和通寶45、宣和通寶6、淳熙元寶9、紹熙元寶4、慶元通寶2、嘉泰通寶1、開禧通寶1、嘉定通寶5、大宋元寶1、紹定通寶1、景定元寶3、正隆元寶3である。

本例は本荘市教育委員会の長谷川潤一氏の教示を得た。

64 阿部堂遺跡 仁賀保町両前寺宇阿部堂

昭和50年、両前寺宇阿部堂に所在する香取神社脇の北側斜面において道路拡幅工事中に麻縄に通した360枚の銭貨が発見された。現在銭貨は、両前寺の公民館に143枚、町勤労青少年ホームに12枚の計155枚が保管・展示されている。その内訳は次のとおりである。

開元通寶16、宋通元寶1、太平通寶1、淳化元寶1、至道元寶2、咸平元寶2、景德元寶7、祥符元寶7、祥符通寶1、天禧通寶4、天聖元寶8、景祐元寶2、皇宋通寶27、至和元寶2、嘉祐元寶3、嘉祐通寶1、治平元寶1、熙寧元寶11、元豐通寶14、元祐通寶16、紹聖元寶16、元符通寶2、聖宋元寶8、政和通寶2であり、最新銭が北宋1111年初鑄の政和通寶である点に特徴がある。本例については、遠田喜一氏（仁賀保町文化財保護協会）、池田史郎氏（仁賀保町教育委員会）に御高配をいただいた。

65 谷地田 南外村宇谷地田（文献38）

昭和45年9月8日、林道改修工事中に地表より20～30cm位下で曲物に入った多量の銭貨が出土した。『秋田民報』9月12日付けの記事によると、「直径32cm、高さ23cmのマサ目の曲げわっぱのようなもの」に50種類約13,000枚、重量にして39kgの銭貨が発見されている。個々の銭名の記載はないが、最古銭は開元通寶、最新銭は皇宋元寶（南宋1253年初鑄）と記されている。これら銭貨は後日古物商に売却したとのことである。

66 二井山 雄物川町二井山宇七滝（文献39）

昭和37年、二井山の法龍山日宮山（神社）において、杉苗植林中に地下約30cmのところから、木箱（約30cm四方）に入った状態で銭貨が出土した。出土時の枚数は不明であるが、現存する519枚については整理されている。

内訳は開元通寶23、宋通元寶1、淳化元寶5、至道元寶11、咸平元寶9、景德元寶11、祥符元寶45、天禧通寶12、天聖元寶13、明道元寶3、景祐元寶3、皇宋通寶12、治平元寶2、熙寧元寶13、元豐通寶11、元祐通寶3、聖宋元寶3、大觀通寶4、政和通寶13、宣和通寶2、淳熙元寶2、開禧通寶1、正隆元寶2、至大通寶9、洪武通寶101、永樂通寶3、宣徳通寶9、大和通寶1、洪

順通寶1、大世通寶3、判読不能188である。最古銭は開元通寶（唐621年初鑄）、最新銭は洪順通寶（安南1509年初鑄）であり、琉球銭である大世通寶（1454年初鑄）も含まれる。銭貨の一部は現在雄物川町郷土資料館に展示しており、その他は発見者宅で保管している。

67 植田 十文字町植田字植田（文献40）

平成2年2月9日、植田字植田の住宅地で3,088枚の銭貨が出土した。ここでは排水路を作るため溝を掘っていたところ、地表下約1mの深さから紐状のもので束ねていた銭貨が一塊の状態で見られた。外容器の有無は不明であるが、銭貨水洗いの際に小さな木片が認められたことから木製の器に入れられていた可能性はある。また銭貨以外の遺物は確認できなかったそうである。

これら銭貨は、十文字町史編纂室により分類が行われており、銭名と共に書体についても調べられている。ここでは銭種とその枚数のみ引用させていただく。

五銖3、開元通寶296、貞元重寶7、宋通元寶3、太平通寶26、淳化元寶18、至道元寶22、咸平元寶41、景德元寶55、祥符元寶80、祥符通寶34、天禧通寶55、天聖元寶120、明道元寶7、景祐元寶40、皇宋通寶346、至和元寶13、至和通寶3、嘉祐元寶15、嘉祐通寶36、治平元寶40、治平通寶2、熙寧元寶233、元豐通寶337、元祐通寶281、紹聖元寶116、元符通寶32、聖宋元寶98、大觀通寶53、政和通寶155、宣和通寶3、淳熙元寶12、紹熙元寶1、慶元通寶1、嘉泰通寶2、嘉定通寶13、淳祐元寶1、正隆元寶3、判読不能485である。最古銭は五銖（後漢24年初鑄）、最新銭は淳祐元寶（南宋1241年初鑄）である。

遺物は町教育委員会が保管しており、一部は町十字館に展示している。

68 前田面 稲川町三又字前田面（文献20）

昭和41年8月21日、三又村字前田面において児童館敷地工事中、「表土下二尺くらいのところより高さ一尺、直径八寸の曲ワッパにびっしり詰込まれた古銭貨約七千枚」出土した。曲物の内部には漆が塗ってあったそうである。銭種が判明しているのは次の21種26枚である。

開元通寶1、太平通寶1、咸平元寶1、祥符通寶1、天聖元寶4、皇宋通寶1、嘉祐通寶1、治平元寶1、熙寧元寶1、元豐通寶2、元祐通寶1、紹聖元寶1、元符通寶1、大觀通寶1、政和通寶2、淳熙元寶1、紹熙元寶1、大定通寶1、洪武通寶1、永樂通寶1、宣徳通寶1である。

69 八郎潟湖底 大潟村（文献41）

昭和45年4月13日、大潟村訓練農場A6圃場において、表土下約10～80cmのヘドロ層より、「カマスにはいつていたとみられる麻ヒモで通された古銭が約60キログラム単位で六ブロック」が発見された。各ブロックは、約20m間隔で一直線上に3ブロック、これと平行するように他3ブロックも約20m間隔で一直線上に並んで発見されたようである。出土銭を調査された上野昭夫氏は、同年6月と12月の2度にわたり『秋田魁新報』紙上に分析等の資料を寄稿されてい

る。前者では、分析した枚数は明示されていないが、銭種の出土比率を記している。これによると、至元通寶?3%、永楽通寶5%、寛永通寶文銭5%、寛永通寶足銭1%、寛永通寶元銭6%、寛永通寶無銘80%であり、全体の92%が寛永通寶であると報告している。また後者では、出土層位から次の3種に分類している。A：輸入銭混入寛永通寶群、B：寛永通寶群、C：、寛永通寶群であり、Bについては、輸入銭、鉄銭の混入はないそうである。

その後(出土時期不明)同じA6圃場で「カマス入りのほかにカメにはいったと思われるものも発見」したという。これは鉄銭の混じる寛永通寶群のようである。

また、A6圃場の西隣のA5圃場でも昭和44年9月に「永楽通寶を中心とする」銭貨が出土したとの記述もある。

これら出土銭は、その位置が伝潟航路上にあたることから、船の積み荷であった銭貨が何らかの事情で投棄したか沈没に伴う遺棄等の推定が可能である。

70 鹿の沢 男鹿市船川港比詰字鹿の沢(文献27)

出土の時期は明らかではないが、船川港比詰字鹿の沢で「造園用の採石作業中、石の下から古銭の出土があり、人夫の1人がリックいっぱいつめてひそかに持ち去ったという」。出土銭には寛永銭が含まれており、939枚が現存するという。

71 夜叉袋 八郎潟町一日市字夜叉袋(文献42)

昭和34年春、八郎潟町夜叉袋地区で耕地整理中、地表下約1.5mの粘土層より多量の銭貨が出土した。銭貨は無文銭、宋銭類が千枚程で「玉石でもって囲まれ埋れていた」そうである。発見当時、出土銭を分析した秋田古泉会では、無文銭、宋銭とも地元で鑄造された私鑄銭と想定している。また『秋田貨幣史』には、「明治初期のニセ一文銭多量に出土」と記されている。

72 浅見内 五城目町内川浅見内(文献15)

『五城目町史』によると、昭和48年に「内川浅見内の某家の屋敷内から古銭が大量に出土した」ようである。浅見内には中世城館とされる浅見内館跡や五輪塔、板碑が存在する。

73 太平神社裏 秋田市寺内か(文献6)

『秋田貨幣史』によると、昭和35年「高清水丘太平神社裏手畑中より二貫八百目の宋銭出土す」とある。現在高清水地区には太平神社は存在せず、詳細は不明である。

74 才之神 鳥海町才之神字中谷地(文献18)

昭和33・34年頃、才之神字中谷地の田地改修工事の際銭貨が出土した。『鳥海町史』によると、「土中から丹念に拾い集めたもの約150枚。そのすべてが宋銭である」と記されている。容器の有無、銭種の記載はない。

75 峰吉川小学校 協和町峰吉川(文献6)

『秋田貨幣史』によると、昭和42年「協和町峰吉川小学校の高台で道路工事中五貫六百目の唐

宋銭出土」とある。同字句以外の詳細は不明である。

76 坂繁 西仙北町円行寺字坂繁 (文献6)

『秋田貨幣史』によると、昭和40年「大沢郷坂繁の開墾地から唐宋明銭四十八種九百八十枚発掘」とある。大沢郷坂繁は、現在の西仙北町円行寺字坂繁にあたるようである。

77 大町 大曲市大町 (文献6)

『秋田貨幣史』によると、昭和29年「大曲市大町のビル工事中、カメに入った古銭多量に出土す」とある。詳細は不明である。

78 土崎 千畑町土崎 (文献6)

『秋田貨幣史』によると、昭和30年「千屋村土崎の田より唐宋明銭三貫余出土す」とある。

79 土崎林 千畑町土崎字土崎林 (文献43)

昭和36年7月15日付『仙東新聞』によると、5月7日、千畑町土崎字土崎林で水路工事中、曲物に入った「古銭が約26.2kg (7貫目)」出土したそうである。詳細は不明であるが、同紙には20数年前にも同地で「カマスにはいった古銭をたくさん見つけた」とも記されている。

80 畑屋 千畑町畑屋 (文献6)

『秋田貨幣史』によると、「畑屋村で数貫目の宋銭出土す」とある。昭和30年代の出土と思われる。

81 上籬田 六郷町籬田 (文献6)

『秋田貨幣史』によると、昭和35年「六郷町上籬田で開田中、宋銭約六貫目出土す」とある。

82 黒森 角館町山谷川崎 (文献6)

『秋田貨幣史』によると、昭和45年「角館町黒森の田、地下七十櫛の所から宋銭明銭多数出土す」とある。黒森は、角館町北部の山谷川崎字黒森を指すと思われる。

83 君堂 仙南村飯詰字君堂 (文献6)

『秋田貨幣史』によると、昭和32年に「飯詰字君堂の田から約十貫目唐宋明銭出土」と記載されている。発見者宅に照会したところ、銭貨は現在所在不明とのことである。

84 横堀 雄勝町横堀 (文献6)

『秋田貨幣史』によると、「雄勝郡横堀村井戸掘り中に、宋銭約六貫出土」とある。昭和20年代の出土と思われる。詳細は不明である。

【一括少量出土地】

小稿では100枚以上200枚未満の銭貨一括出土を一括少量出土地としてまとめる。

85 新斗米館跡 鹿角市花輪字新斗米 (文献44)

奥羽山脈西麓から樹枝状に伸びた台地先端部に立地する館跡である。沢を挟んだ北側の台地

には小枝指館跡が位置する。昭和54年に第1次調査、翌年に第2次調査が実施され、竪穴住居跡、竪穴遺構、土室状遺構、溝跡などが検出された。銭貨は遺構内外より240枚発見され、うち185枚は緋の状態で一括出土している。

第1次調査では、遺構内外より8枚の銭貨が出土した。内訳は第1号竪穴2、大溝状遺構4、遺構外2である。銭種は洪武通寶、永楽通寶、天□元寶と報告されているが、どの銭貨がどこから出土したのかについての記載はない。

第2次調査では、232枚の銭貨が出土した。このうち有銘銭は10枚であり、判読できた6枚は、景德元寶1、皇宋通寶1、紹定通寶1、洪武通寶3（うち1枚は私鑄銭）である。遺構内では、8遺構より43枚の銭貨が出土しており、内訳は第8号竪穴第1層で無文銭1、第18a 竪穴床面で□元通□1、無文銭1、第18b 竪穴床直上面で無文銭3、第19 竪穴で無文銭1、第25号竪穴埋土中で無文銭1、第26号竪穴床面で景德元寶1、第32号竪穴床面で洪武通寶1、埋土中で無文銭1、土室状遺構より32枚（洪武通寶1、無文銭28、判読不能3）である。

一方、遺構外では189枚の銭貨が出土しており、「縄状の紐に通した185枚の無銘銭が一括で出土している。これら無文銭については、報告書の中で分析を行っている。「無銘銭には内孔が方形のものと円形のものがあり、その割合は68：152である。方形のものは外径は14.2～21.5mm、内孔一辺6.3～11.6mm、厚さ0.5～1.4mmであり、円形のもの外径は10.3～17.4mm、内径7.1～12.9mm、厚さ0.4～1.2mmであり、円形のものの方が方形のものよりも外径が小さく、厚さも薄い傾向にある。」と記している。



第5図 新斗米館跡出土の無文銭・輪銭

86 下堤C 遺跡 秋田市四ツ小屋小阿地字下堤（文献45）

9～10世紀代の集落遺跡である。昭和62年に調査が行われ、該期の竪穴住居跡31軒、土坑、溝跡等が検出されている。銭貨は8号住居跡の確認面（埋土1層）から「紐で結ばれた状態で」72枚出土した。内訳は開元通寶4、天禧通寶1、皇宋通寶2、嘉祐通寶2、熙寧元寶4、元豐通寶3、元祐通寶1、元符通寶2、大觀通寶3、政和通寶3、正隆元寶1、洪武通寶2、永楽通寶23、宣徳通寶2、判読不能19であり、「背文のあるものはない」そうである。

87 大鳥井山遺跡（第1次） 横手市大鳥町（文献46）

後三年の役（1083～87年）で滅亡する清原氏の一族大鳥山太郎頼遠の本拠地と想定される防御性の極めて強い遺跡である。昭和52年から7次にわたる調査が行われ、二重の土塁・空堀と

掘列で囲まれた内部に掘立柱建物を中心とする建物群等が検出されている。銭貨は外側の空堀（S C2）内、現地表面下1.1mの第8層より「孔を通した紐と共に連珠状に」計53枚出土した。内訳は開元通寶3（うち1枚背：昌）、咸平元寶1、景德元寶2、祥符通寶1、景祐元寶1、皇宋通寶5、嘉祐通寶1、治平元寶1、熙寧元寶4、元豊通寶8、元祐通寶4、紹聖元寶4、元符通寶3、政和通寶2、慶元通寶1（背：元）、判読不能12である。なお背に昌の文字が認められる開元通寶は、男鹿市釣が崎例同様、初鑄を845年におく紀地銭あるいは会昌開元と称される銭である。

88 愛宕山 横手市羽黒町（文献47）

昭和51年9月27日、愛宕山中腹の斜面地で小学生2人が土中より容器に入った銭貨を発見した。容器は古伊万里の徳利状の小壺（現存高9.8cm）であり、中には慶長一分金（1601年初鑄）が104枚入れられていた。その後10月18日に同じ場所から1枚発見され、計105枚となった。『秋田魁新報』10月1日付には、「出た 金貨がザクザク」との記事が掲載されている。なお銭貨は、昭和52年4月に鑑定・評価が行われ、次のように分類されている。慶長手前吹き（古慶長）17、慶長長花押47、慶長短花押21、慶長大頭光8、慶長小字10、慶長細字2である。出土品は現在、銭貨・容器共に秋田県立博物館に保管・展示されている。

【中世の館跡・集落跡】

100枚以上の一括出土はないものの、中世期の館跡・集落遺跡より銭貨が出土する例は多い。ここでは46遺跡の事例を紹介する。

89 湯瀬館遺跡 鹿角市八幡平宇湯瀬古館（文献48）

天正19年（1591）館破却との史料が残る中世館跡である。昭和54年に調査が行われ、掘立柱建物跡、礎石建物、空堀等が検出されている。銭貨は15枚出土しており、遺構内出土の銭貨は全て「館コ」と称される郭面を二分する上面幅8.3m、深さ3.68m、基底幅2.41mの箱築研状の空堀内（埋土上位）より得られている。ここでは、開元通寶1、元祐通寶1、判読不能あるいは無文6の計8枚出土している。また遺構外は開元通寶1、永樂通寶2、寛永通寶1、判読不能あるいは無文3の計7枚である。判読不能あるいは無文銭9枚のうち8枚は「銭名の削りとりか銭名をつけずに鑄造したものの2者が考えられるが、前者の可能性が高い」と記している。

90 歌内遺跡 鹿角市八幡平宇鳥居平（文献49）

平安時代～中世の集落遺跡である。昭和54・55年に調査が実施され、遺構外より銭貨3枚を発見した。天聖元寶、皇宋通寶、寛永通寶各1枚である。

91 長牛城跡（たたら館） 鹿角市八幡平宇長牛（文献50）

中世城館長牛城跡の最東端に位置するたたら館は、昭和55年に発掘調査が実施された。舌状

台地の基部には空堀が閉削されており、遺構外より元豊通寶が1枚出土した。出土遺物は銭貨以外は古代の土師器であり、古代末の防衛集落の可能性がある。

92 妻の神 I 遺跡 鹿角市花輪字妻の神 (文献51)

中世乳牛館の一郭を占める遺跡である。昭和55年に調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡、中世の竪穴住居跡(床面に地床炉を有す)等が検出されている。銭貨はS I 006とした中世の竪穴内より3枚出土した。皇宋通寶、元祐通寶、洪武通寶各1枚である。同竪穴では銭貨以外の遺物は出土しなかった。

93 乳牛平遺跡 鹿角市花輪字乳牛平 (文献52)

中世城館である乳牛館に比定される遺跡である。昭和56年に調査が行われ、土塁・空堀で区画された内部(郭面)で竪穴遺構、掘立柱建物跡、焼土遺構等が検出されている。銭貨は遺構外より5枚出土した。内訳は熙寧元寶2、聖宋元寶1、大観通寶1、判読不能1である。

94 高瀬館跡 鹿角市花輪字堪忍沢 (文献53)

前館、熊館、浦館の3館からなる多郭連続式の中世城館である。昭和61年に熊館第1郭東側先端部分を調査し、掘立柱建物跡、方形竪穴遺構、土坑等を検出した。銭貨は3基の遺構より13枚出土した。S K I 08竪穴遺構では開元通寶、熙寧元寶各1枚、S K 01土坑坑底から皇宋通寶1枚、S K 02土坑では10枚(開元通寶1、至道元寶1、景德元寶1、皇宋通寶2、元豊通寶1、元符通寶1、宣和通寶1、大宋元寶1、景定元寶1)出土している。



第6図 高瀬館跡出土の銭貨

95 小枝指館跡 鹿角市花輪字小枝指館 (文献54-①②)

7あるいは8つの郭から構成される多郭連続式の中近世の城館である。発掘調査は昭和30年(東京大学東洋文化研究所)と平成3年(鹿角市教育委員会)に行われている。

① 昭和30年の調査では、3カ所の館址の遺構内外より、銅銭24枚、鉄銭1枚が出土した。

第2館址では、遺構外より祥符元寶、嘉祐通寶、無文銭が各1枚出土している。

第3館址では、2号住居より皇宋通寶、聖宋元寶、洪武通寶各1と無文銭7枚が、遺構外より、鉄銭1枚、無文銭3枚がそれぞれ出土している。

第4館址では、1号住居より皇宋通寶1、熙寧元寶3、元祐(あるいは元符か)通寶1の計5枚が出土している。同住居は県内では類例の極めて少ない内耳鉄鍋が検出されている。5号住

居で無文銭1枚、遺構外でも無文銭1枚が出土している。

出土銭貨について報告では、「第四館址の第1号住居址において多くの鉄製品や木製品とともに4枚の銅銭がその床面に散在の状態で検出されたことで、このことは七館出土の銅銭が明らかに退職品ではなく、当時の実用品であったことを示している」と記している。

② 一方、平成3年の調査では遺構外より、6枚の銭貨が出土した。内訳は熙寧元寶1、元祐通寶2、寛永通寶3（1枚は背：波）である。

96 地羅野館跡 鹿角市花輪字地羅野（文献55）

3つの郭から構成される中世館跡である。平成4年度に第I郭南半部の調査が実施され、竪穴遺構、土坑、空堀などが確認された。銭貨は2遺構より各1枚出土した。6号竪穴では床面より判読不能の1枚が、19号土坑では洪武通寶1枚である。

なお銭貨の出土した6号竪穴は11世紀代の竪穴住居を切って構築されている。

97 花輪館跡 鹿角市花輪字中花輪（文献56—①②）

6以上の郭（本館、北館、南館、ゆるぎ館等）から構成される城館跡である。昭和58年と62年に調査が行われ、以下に示す4地区より計56枚の銭貨が出土した。

① 北館では、竪穴遺構、土坑、遺構外より34枚出土している。2号竪穴床面直上では13枚（天聖元寶1、元祐通寶1、淳熙元寶1、洪武通寶3、判読不能7）、3号竪穴床面直上では2枚（□□元寶、判読不能各1）、12号竪穴柱穴内より判読不能1枚、17号竪穴床面より寛永通寶1枚、2号土坑では判読不能1枚が確認されている。また遺構外では10枚（天聖通寶？1、元祐通寶1、洪武通寶1、寛永通寶6、□□通寶1）の銭貨が出土した。

南館では遺構外より無文銭1枚が出土した。

② 北館南縁の小郭では遺構内外より20枚の銭貨が出土した。3号竪穴のうちの1本の柱穴では15枚の銭貨がまとまって出土している。内訳は元祐通寶1、大観通寶1、嘉泰通寶1、洪武通寶8、永樂通寶3、無文銭1である。1枚の永樂通寶には、紐が結ばれていた。8号竪穴では天聖元寶1枚、掘立柱建物構成すると考えられる柱穴内では紹聖元寶、判読不能各1枚が、遺構外では永樂通寶、寛永通寶が各1枚出土している。

ゆるぎ館中ノ郭では寛永通寶が1枚出土した。

98 花輪古館跡 鹿角市花輪字古館（文献57）

安保姓花輪氏を代々館主とする中世城館と伝えられる遺跡である。平成5年に調査が実施され、明確に館期に位置づけられる遺構の確認はできなかったが、遺構外より景德元寶1枚が出土している。

99 小平遺跡 鹿角市花輪字八幡平（文献58）

主に平安時代・中世の集落遺跡である。昭和52年に調査が行われ、両時代の竪穴住居跡、竪

穴遺構、掘立柱建物跡等が検出されている。銭貨は、中世期と見られる堅穴遺構床面より1枚、遺構外より破片1枚が出土した。前者は第1号住居跡とした張り出し部を伴う方形の堅穴内より、直径約1.9cmの無文銭が、後者は「通」の文字が認められる銭貨がそれぞれ出土している。

100 黒土館跡 鹿角市花輪字下夕町(文献59)

いわゆる鹿角四十二館の一とされる中世館跡である。平成7年に館跡西側の帯郭部分の調査が行われ、堆積土中より17~18世紀代の陶磁器等と共に銭貨4枚が出土した。元祐通寶、寛永通寶各1、判読不能の鉄銭2である。遺物は鹿角市出土文化財管理センターに保管されている。

101 当麻館跡 鹿角市十和田毛馬内字古館(文献60)

天文5年~慶長13年(1536~1608)にかけて存続した毛馬内氏の居館とされる遺跡であり、毛馬内古館とも称される。昭和63年に調査が行われ、中近世の掘立柱建物跡4棟、堅穴遺構71基、土坑29基などが検出された。銭貨は遺構内47枚、遺構外7枚の計54枚を確認している。

堅穴遺構では71基のうち12基より銭貨が出土している。9号堅穴では6枚(熙寧元寶2、元豊通寶1、□□元寶1、判読不能2)がまとめて出土し、12号堅穴では天聖元寶1枚、16号堅穴3枚(天聖元寶1、皇宋通寶1、判読不能1)、19号堅穴では無文銭1枚、20号堅穴と28号堅穴では洪武通寶各1枚、35号堅穴では皇宋通寶、嘉祐通寶各1枚、50号堅穴床面上より元□□□1枚、51号堅穴では無文銭1枚、62号堅穴では18枚がまとめて出土した。内訳は乾元重寶1、祥符元寶1、皇宋通寶2、嘉祐元寶1、熙寧元寶3、元豊通寶1、淳熙元寶(背:十二)1、洪武通寶2、□□通寶1、□□寶2、判読不能2、無文銭1である。また64号堅穴では元□通寶1枚、73号堅穴では無文銭2枚が出土している。

第3号掘立柱建物跡では無文銭1枚、掘立柱建物を構成すると考えられる柱穴内より洪武通寶1枚、25号土坑では洪武通寶、無文銭各1枚、2号土坑では判読不能1枚、15号土坑でも判読不能1枚、10号土坑では無文銭2枚、30号土坑でも無文銭1枚がそれぞれ確認されている。

また遺構外では、7枚(元祐通寶1、淳祐元寶(背:七)1、洪武通寶2、判読不能2、無文銭(小型の鳩目銭)1)が出土した。

102 片山館コ遺跡 大館市片山(文献61)

古代・中世・近世初期の集落・館跡である。昭和47年の調査において、第12号とした堅穴遺構内よりまとめて3枚の銭貨が出土した。熙寧元寶、紹聖元寶、大觀通寶各1枚である。同堅穴では、薬壺と思われる陶器、炭化穀物が木器に納められた形で検出されている。銭貨は全て、平成8年4月開館予定の大館郷土博物館に展示予定とのことである。

103 眞釣館跡 大館市眞釣(文献62)

平成6年に大館市教育委員会により調査が行われ、中世の掘立柱建物跡や近世の信仰塚等が検出されている。銭貨は2時期の遺構内より11枚出土した。ここでは中世関係の出土例を紹介

し、近世分については、【近世の城館・塚・神社等】の項でふれる。

中世では、掘立柱建物跡を構成する柱穴確認面において1枚出土している。紹□元寶である。

104 前田館跡 大館市比内前田（文献63）

舌状台地の先端部に位置する館跡である。昭和53年に調査が行われ、台地基部に幅7~10m、深さ1.5~2mの堀が掘削され、先端の平坦面では竪穴住居跡、掘立柱建物跡、板掘遺構等が検出された。銭貨は掘埋土中より元祐通寶が1枚出土した。同堀内では多量の板状木片、緑釉段皿、珠洲系播鉢、管状鉄製品等も発見されている。報告では、同館を「前田地域の中心地をなす前田氏の居館跡であった」と結論づけている。遺物は、大館郷土博物館に保管されている。

105 谷地中館遺跡 比内町谷地中字館（文献64）

独立残丘上に立地する中世館跡である。昭和46年から3次にわたる調査が行われ、竪穴遺構、土坑、柱穴列等が検出されている。銭貨は第1次調査で3枚、昭和51年の第3次調査でも3枚出土している。前者は遺構外出土で元豊通寶、政和通寶、判読不能各1枚である。後者は出土位置の記述はないが、天禧通寶、治平元寶、聖元元寶各1枚の拓影図が載せられている。



1. 天禧通寶
2. 治平元寶
3. 聖元元寶
(原寸)

第7図 谷地中館跡出土の銭貨

106 大日堂前遺跡 比内町独結字大日堂前（文献65）

中世浅利氏と関連の深い館跡と考えられる遺跡である。昭和55年に調査が行われ、遺構外より治平通寶1枚、寛永通寶14枚が出土している。調査区は大日堂という神社境内であり、出土した寛永通寶は、この神社に由来するものと想定される。

107 真館跡 比内町新館字真館（文献66）

古代~中世の集落跡・館跡である。昭和47年に調査が行われ、次年に刊行された報告書の記載によると「発掘区内北半竪穴床面」より皇宋通寶1枚が出土したとある。拓影図、写真等なく、詳細は不明である。

108 脇神館跡 北秋田郡鷹巣町脇神字タタラノ沢

舌状台地先端部に立地する連郭式の館跡である。平成7年に遺跡範囲確認調査が行われ、遺構外出土より銭貨1枚出土した。判読不能である。遺物は秋田県埋蔵文化財センターに保管している。

109 電毛沢館跡 ニツ井町切石字電毛沢（文献67）

3つの郭からなる中世城館である。昭和63年に調査が行われ、主に14世紀代の掘立柱建物跡、竪穴建物跡、これら施設を区画する欄列(板塼)、空堀等が検出されている。銭貨は、S B02とした本館跡最大規模の建物を構成する柱穴内埋土上位で4枚出土した。内訳は開元通寶、元□通寶(順読)、□元通寶(対読)、判読不能各1枚である。なお本建物は書院造系統の建物となるようである。

110 蝦夷館跡 峰浜村目名潟字竹長根(文献68)

西に日本海を望む舌状台地先端部に立地する館跡である。台地基部には長さ70m、幅5~6m、深さ2~3mの空堀が3条認められる。昭和39年に発掘調査が行われ、建物や欄列を構成すると考えられる柱穴等が検出され、土師器、須恵器、青磁、白磁、黄瀬戸、染付等と共に判読不能の銭貨が1枚出土している。

111 金山館跡 能代市向能代字平影野(文献69)

米代川河口域右岸の独立丘上に立地する館跡である。昭和59・60年に調査が行われ、弥生・古代・中世・近世のある時期に使用された複合遺跡であることが判明した。銭貨は遺構外より21枚出土した。銭名の判読できたものは景德元寶、寛永通寶各1枚である。

112 館の上館遺跡 八竜町鶴川字館の上(文献70)

4つの郭面からなる中世城館である。平成4年に第1郭帯郭の一部を調査し、遺構外より銭貨3枚が発見された。内訳は皇宋通寶、宣和通寶、文久永寶各1枚である。

113 扇田谷地遺跡 八竜町鶴川字扇田谷地

古代~中世にかけての集落遺跡である。平成7年に発掘調査が実施され、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、製鉄炉等が検出されている。銭貨は中世期と推定される竪穴遺構より、22枚錯着して出土した。いずれも火熱を受け脆弱である。銭種の判明しているのは次の11枚である。宋通元寶1、天聖元寶1、皇宋通寶1、至和元寶1、元豊通寶2、元祐通寶2、元祐通寶か1、紹聖元寶1、政和通寶1である。遺物は秋田県埋蔵文化財センターで保管している。

114 一向遺跡 男鹿市船越字一向(文献71)

江戸時代より井戸跡、陶磁器類等が出土し、中世~近世初頭頃まで存続していた集落跡と周知される遺跡である。昭和38年には八郎潟干拓事業に伴う新水道工事により16基の井戸跡等が検出され、同年3月29日付け『朝日新聞(秋田版)』には、「四百年前の集落跡みつかるとの見出しで記事が掲載されている。その後、昭和40年に磯村朝次郎氏が同地において現存する井戸跡8基を確認し、井戸内部及びその周辺から木器、陶器等と共に10枚程の銭貨を採集されている。銭種の記載はない。

115 勅使館跡 秋田市寺内字勅使館(文献72)

秋田城跡の位置する高清水丘陵の南西端を占地する館跡である。秋田城跡及びその周辺区域

は、昭和34年から4ヶ年にわたり文化財保護委員会（現文化庁）による調査が行われており、助使館地区も昭和36年第3次調査においてその対象となった。銭貨は館の周囲に巡らされている土塚盛土中より出土した。枚数、銭名等の記載はない。

116 後城遺跡 B・C区 秋田市寺内字後城（文献73）

秋田城跡の西約500mに位置する古代～中世の集落遺跡である。昭和53年に調査が行われ、3地区（昭和52年分布調査出土を含む）より銭貨162枚が出土している。ここでは土坑や井戸跡等から銭貨が出土したB・C区と、中世墓を検出したA区に分けて記述する。

B区では、SX043（東西約15m、南北約12.5m、深さ約5.5mの円形、掘鉢状を呈する遺構）より、多量の木製品、陶磁器類、鉄製品、犬骨3頭分、馬頭骨等と共に25枚の銭貨も出土している。内訳は開元通寶2、咸平元寶1、天聖元寶1、皇宋通寶4、至和通寶1、治平通寶1、熙寧元寶1、元豐通寶3、元祐通寶1、紹聖元寶3、聖宋元寶1、洪武通寶4、永樂通寶1、宣徳通寶1である。SX043は、溜池と想定されている。

C区では遺構内外より計96枚の銭貨が出土した。遺構内ではSE052より開元通寶（背：人）、SE054上面土坑より開元通寶（背：一）、SE051より治平元寶、SE054より熙寧元寶、SK059より聖宋元寶、至大通寶、SE055より洪武通寶、SE052より永樂通寶各々1枚出土している。遺構外では開元通寶4、至道元寶1、祥符元寶5、祥符通寶1、天禧通寶1、天聖元寶5、皇宋通寶9、至和元寶1、治平通寶1、熙寧元寶7、元豐通寶8、元祐通寶3、紹聖元寶1、聖宋元寶3、大觀通寶1、政和通寶1、淳熙元寶1（背：十五）、嘉定通寶1、洪武通寶8、永樂通寶7、朝鮮通寶2、寛永通寶2、判読不能15が出土した。

また、昭和52年の分布調査では、13枚の銭貨が得られている。開元通寶2、治平元寶1、熙寧元寶1、元祐通寶2、洪武通寶1、永樂通寶2、無文銭1、判読不能3である。

117 下夕野遺跡 秋田市川尻字下夕野（文献74）

13世紀を中心とする集落遺跡であり、標高5m程の微高地に立地する。昭和52年に調査が行われ、井戸跡（SE8）より銭貨1枚（銭種不明）が出土した。「直径2.15cm、方孔一辺0.79cmを測り、比較的小ぶりな」銭貨である。

118 岩城館跡 秋田市下新城岩城字下向（文献75）

貞和年間（1345～49）新城氏の居館であったと伝えられる館跡である。開元通寶が1枚採集されている。

119 白根館跡 雄和町平沢字水沢（文献9）

昭和44年春頃、水沢地内を整地中に地下約30cmより銭貨が出土したようである。詳細は不明であるが、『秋田県の中世城館』には、「館からは焼米、刃物、黄瀬戸片、美濃焼片、珠洲焼片、古銭等が出土している」との記載がある。

120 浜館遺跡 西目町出戸字館（文献76）

由利仲八郎政春の居館（1291～1312年）跡と周知される館跡である。昭和50年に調査が行われており、建物を構成すると考えられる柱穴が数多く検出された。銭貨はいずれも遺構外より5枚出土した。皇宋通寶、元祐通寶、政和通寶、洪武通寶、判読不能各1枚である。

121 履沢館跡 矢島町立石字沢の内（文献9）

由利十二頭の一である大井氏の家臣履沢氏の居館とされる遺跡である。『秋田県の中世城館』によると「附近開畑の際、陶片、古銭（宋銭）、鉄砲の玉等が出土」と記されているが、詳細は不明である。

122 金沢柵跡 横手市金沢中野（文献77）

後三年の役（1083～87年）で最後の戦場となった柵跡として周知される遺跡である。昭和39年より5次にわたる調査が行われ、掘立柱建物跡、空堀等が検出されている。これら遺構と出土遺物から判断しても、史上に登場する金沢柵であったとする確証は得られていない。銭貨は、本丸表土層より開禧通寶が1枚出土している。

123 手取清水遺跡 横手市清水町新田字手取清水（文献78）

弥生時代の遺跡として周知されており、昭和62年に調査が実施されている。この結果、縄文～近世の複合遺跡であることが判明した。銭貨は調査区内で検出された旧河川より7枚出土した。内訳は熙寧元寶1、大観通寶1、寛永通寶2、寛永通寶か1、文久永寶か1、判読不能1である。

124 馬鞍館跡 平鹿町麓蘭字馬鞍（文献79）

小野寺氏が平鹿郡進出の最初の拠点の1つとされる館跡である。『平鹿町史』によると、「北の郭と西の郭の間の果樹園を開墾した際に焼米や炭化材及び礎石に使用したと思われるような礫とともに古銭貨が出土し」ている。出土量は明らかではないが、同町史には、開元通寶、政和通寶、洪武通寶、永樂通寶各1、判読不能2の計6枚の銭貨拓影が載せられている。

125 鉢山館跡 大森町猿田字鉢山下り（文献13）

『秋田県遺跡地図（県南版）』には、本遺跡は館跡として周知され、「井戸、古鏡、古銭等出土」と記されている。詳細は不明である。

126 稲庭城跡 稲川町古館（文献80）

中世小野寺氏の居城とされる遺跡である。昭和61年二ノ丸部分の調査が行われ、掘立柱建物跡、石垣状遺構、土坑等が検出されている。銭貨は遺構外より13枚出土した。内訳は、太平通寶、至道元寶、皇宋通寶、元豐通寶（丸孔）、皇宋元寶各1及び寛永通寶7、判読不能1である。なお寛永通寶については、報告で1枚は寛文8年江戸所鑄銭、2枚は元文紀伊中之島所鑄銭、残りは元文出羽秋田所鑄銭と思われるとの記載がある。

127 騎沼城跡 雄勝町桑ヶ崎字平城（文献81）

中世～江戸中期の城館・集落跡である。昭和54年の調査において、掘立柱建物跡59棟、井戸跡68基、土坑等が検出されている。遺構内外より21枚の銭貨が出土した。遺構内では井戸跡（S E 72）及び溝跡（S D 212）より寛永通寶（背：文）が各1枚、遺構外では開元通寶1、景德元寶1、皇宋通寶2、治平通寶各1、熙寧元寶1、紹聖元寶1、洪武通寶1、永樂通寶2、寛永通寶9、無文銭1が出土している。うち5枚（開元、景德、皇宋、熙寧、永樂各1）は重なって出土しており、紐で結んでいた痕跡が残る。



第8図 騎沼城跡出土の銭貨

128 福田遺跡 能代市浅内字福田上野（文献82）

主に9世紀代の集落遺跡である。昭和62年に調査が行われ、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、これら施設を区画する溝、柱穴列等が検出されている。銭貨は遺構外より2枚出土した。洪武通寶、錆のため銭名の有無不明な鉄銭各1枚である。

129 小谷地遺跡 男鹿市脇本富永字小谷地（文献83）

標高12m程の沖積面に立地し、古墳時代（5世紀代）と平安時代の埋没家屋を検出したことで周知される。発掘調査は昭和39年から4次にわたり実施されているが、銭貨は本調査以前に得られた資料である。祥符元寶1枚が報告されている。

130 片符沢遺跡 東由利町田代字石高（文献84）

主に縄文時代の遺跡として周知される。昭和54年に調査が行われ、遺構外より銭貨10枚が出土している。報告書には銭種等の記載はなく、新たに秋田県埋蔵文化財センターに保管されている銭貨を判読した。開元通寶2、咸平元寶1、元豊通寶1、元符通寶1、寛永通寶4（うち1枚は背：波）、判読不能1である。



第9図 片符沢遺跡出土の銭貨

131 カウヤ遺跡 象潟町小砂川字カウヤ（文献85）

秋田県南西隅に位置し、日本海汀線まで200m程の海成段丘上に立地する。昭和59・60年に調査が行われ、県内では検出例の少ない製塩関係の遺構が確認されている。昭和59年には遺構外より寛永通寶1枚が出土している。翌年には、溝跡より12枚、遺構外4枚の計16枚の銭貨が出土した。S D05とした溝跡は、底面出土の土器類から8世紀後半に構築されたようであるが、銭貨は「溝確認面のやや下から銅銭12枚が重って一括出土」した。内訳は元聖元寶1、皇宋通寶2、嘉祐通寶1、治平元寶1、熙寧元寶2、元豊通寶2、元祐通寶1、大観通寶1、永樂通寶1である。また遺構外では、元豊通寶、紹聖元寶、寛永通寶、判読不能各1枚を確認している。

132 百目木遺跡 仙北町板見内字百目木（文献13）

『秋田県遺跡地図（県南版）』によると、本遺跡では元豊通寶出土と記載されている。

133 仁瀬沢遺跡 西木村西明寺字松木台（文献86）

『西木村郷土史資料』によると、昭和32年佐藤正作氏の調査として、仁瀬沢で石鏃、石小刀、古銭（洪武通寶外）出土と記されている。

134 羽後病院敷地遺跡 羽後町西馬音内字大戸道（文献87）

主に平安時代の遺物散布地である。平成5年に調査が行われ、Cトレンチ1区第2層より至大通寶1枚が出土した。

【中世の墓・塚】

本項では中世墓出土4例、塚出土2例を収める。

135 妻の神Ⅲ遺跡 鹿角市花輪字妻の神（文献88）

中世城館乳牛館の一郭を占めると推定される遺跡である。昭和56年に調査が実施され、掘立柱建物跡、張り出しを持つ方形竪穴遺構、焼土遺構、土坑、土坑墓、欄列などが検出されている。銭貨は竪穴遺構、土坑墓、遺構外より26枚出土している。

竪穴遺構では、S I 05より6枚（咸平元寶1、治平元寶2、永樂通寶1、判読不能2）、S I 15床面より皇宋通寶1枚、S I 38より治平元寶1枚が出土している。

また人骨等の遺存から土坑墓と判断された遺構は3基あり、その3基の土坑から13枚の銭貨が出土している。SK（S）53では、「2枚の小さい円形の椀目の板の間に・・・（銭貨）6枚が挟みこまれ、両手の手のひらで持たせたかのような状態で出土している」。銭種は皇宋通寶1、嘉祐通寶1、聖宋元寶1、判読不能3である。SK（S）54では、「骨盤のあたりから1枚出土して」いるが、銭種は判読不能である。SK（S）57では、坑底北東部で6枚の銭貨が出土している。銭種は景德元寶1、治平元寶1、元豊通寶1、洪武通寶2（1枚の背：浙）、判読不能1である。なおSK（S）53・54は、頭部を北にし、体の右側を下にした側臥屈葬人骨が検出さ

れている。

遺構外では、紹聖元寶、聖宋元寶、大觀通寶、元□□寶（元豐通寶か）、判読不能各1枚が出土している。

136 秋田城跡鶴ノ木地区 秋田市寺内字鶴ノ木（文献89-①～⑥）

高清水丘と称される標高50m程の独立丘陵上に立地する古代城柵遺跡である。8世紀前半～10世紀後半にかけて存続したと考えられる。昭和47年より秋田城跡調査事務所が継続的に調査を行っている。

本城跡では11箇所の調査区より、計95枚の銭貨が出土している。これを銭種、遺構から大別すると、秋田城が機能を果たしていた古代に属する皇朝銭出土地（遺構）、中世墓を検出している鶴ノ木地区、その他の主に近世日本銭出土区域とすることができる。ここでは中世墓出土銭が見られる鶴ノ木地区についてまとめる。

① 昭和48年第10次調査において、10基の土坑墓が検出され、2基には頭蓋骨、骨片と共に銭貨が副葬されていた。2号墓坑では、6枚が錯着して出土しており、内訳は永楽通寶2、洪武通寶1、判読不能3であった。3号墓坑では4枚（大□通寶、□寧元寶各1、判読不能2）出土している。これら墓坑を報告では、「副葬銭から中世末から近世にかけてのもの」と考えている。その他遺構外でも、宋通元寶1、元祐通寶2、政和通寶1、洪武通寶2、寛永通寶2、判読不能2の計10枚が出土している。

② 昭和54年第26次調査において、SK445（長径1.1m、短径0.9m、深さ0.4mの楕円形の土坑）埋土中より6枚の銭貨が出土した。内訳は天禧通寶1、元豐通寶2、洪武通寶1、銭種不明2である。報告では「中世以降の墓坑と考えられる」としている。

③ 昭和57年第35次調査では、11基の墓坑が検出され、うち6基より副葬と見られる銭貨が39枚出土している。

ST627（長軸1.62m、短軸0.6mの長楕円形）では埋土に、大量の炭化物に混じって骨片が検出され、角形の鉄釘6本と共に11枚の銭貨が出土した。咸平元寶1、元豐通寶1、嘉定通寶1、洪武通寶2、永楽通寶1、判読不能5である。

ST628（長軸1.45m、短軸0.45mの長楕円形）では坑内より3枚の銭貨が出土した。熙寧元寶、政和通寶、無文銭各1枚である。

ST629（長軸1.32m、短軸0.55mの長楕円形）では坑内より7枚の銭貨が出土した。祥符元寶2、祥符通寶1、熙寧元寶1、聖宋元寶1、淳祐元寶1、銭種不明1である。

ST635（長軸1.55m、短軸0.36mの長楕円形）では埋土に炭化材・物が充填しており、無文銭が6枚出土した。「うち3枚には布地の炭化したものと考えられる付着物が認められる」。銭貨は外径18mm、方孔を有する。

S T 653 (長軸1.55m以上、短軸1mの長楕円形) では坑内より3枚の銭貨が出土した。洪武通寶1、銭種不明2である。

S T 656 (径約0.5mの円形) では坑内より9枚の銭貨が出土した。開元通寶2、天聖元寶2、熙寧元寶1、聖宋元寶3、銭種不明1である。

墓坑の他、S A 652ピット群内より銭貨4枚(咸平元寶、皇宋通寶、元豐通寶、嘉定通寶)が出土している。

墓坑については、「副葬銭として開元通寶から永樂通寶までが出土するが寛永通寶が出土しないことから、近世以前の遺構と考え」ている。

④ 昭和60年第42次調査において、墓坑内(ST810)より3枚の銭貨が出土した。銭種は不明である。S T 810は、長軸1.6m、短軸1mの楕円形を呈しており、5cm厚の炭化物の充填層が認められ、骨片も検出されている。

⑤ 一方、墓出土ではないが、同じ鶴ノ木地区において、鉄銭も出土している。平成4年第58次調査(寺内字鶴ノ木)において、S A 1142布掘り清底面より鉄銭1枚が出土した。この溝跡は「鶴ノ木地区南部の堂風の建物(第30次調査検出)を中心に、一帯を東西約57~69mの範囲で区画する区画施設・材木塙(柱列塙)」であることが判明した。

⑥ また、中世銭は昭和55年第28次調査(字大畑)においても、3枚確認されている。天聖元寶、至和通寶、元豐通寶各1枚である。

137 後城遺跡A区 秋田市寺内字後城(文献73)

A区では土坑墓21基のうち6基より15枚の銭貨が出土した。

S T 002 (南北1m、東西0.93mの円形) では、骨片と共に元祐通寶2枚出土している。

S T 006 (長径1.16m、短径0.9mの楕円形) では、「底面についた状態で多量の鏽が入って・・・覆土中には焼土、骨片が多量に認められる」。銭貨は開元通寶、皇宋通寶、嘉祐通寶各1枚出土している。

S T 008 (東西0.94m、南北0.82mの円形) では、焼土、炭化材、骨片が多量に認められ、祥符通寶、元祐通寶各1枚が出土している。

S T 009 (長径1.56m、短径1mの楕円形) では、「覆土には特に多量の鏽を含み、焼土、炭化材が混入して」おり、骨片、歯も認められ、皇宋通寶1枚が出土している。

S T 013 (東西0.72m、南北0.64mの円形) では多量の骨片と共に元豐通寶1枚が出土している。

S T 015 (長径1.5m、短径0.92mの楕円形) では、炭化物、骨片が多量に認められ、これらと共に銭貨6枚が出土している。熙寧元寶、元祐通寶、紹聖元寶、元符通寶各1枚、洪武通寶2枚である。

その他、SX042とした落ち込み内より、天聖元寶、皇宋通寶、元祐通寶各1枚が出土している。またA区遺構外でも開元通寶2、元祐通寶2、政和通寶4、洪武通寶1、永樂通寶1の銭貨10枚が出土した。

138 待入Ⅲ遺跡（Ⅲ区）秋田市金足片田字待入（文献90）

主に中世の城館、墓地として周知される遺跡である。平成3年発掘調査が実施され、2地区から銭貨が出土した。ここでは火葬墓が検出されたⅢ区について報告し、寛永通寶が出土したⅠ区は、【近世の城館・塚・神社等】の項で紹介する。

Ⅲ区では東向き斜面の中腹部に立地する火葬墓群より銭貨が出土している。検出された19基のうち、3基の墓跡から計4枚の銭貨が発見された。

第6号火葬墓（長径78cm、短径48cmの楕円形）は、「埋土中には骨片が混在しており、底面よりやや浮いた状態で」政和通寶と銭種不明の銭貨2枚が重なって出土した。

第8号火葬墓（長径63cm、短径54cmの楕円形）は、「東寄りの底面よりやや浮いた状態で銅銭（文字不明）が出土した。骨片は量が多く、底面西側にまとまっていた」。

第11号火葬墓（径20cmの円形）は、「底面で銅銭（文字不明）が出土した」。

139 貝沢拾三本塚 羽後町貝沢字拾三本塚（文献91—①②）

13基の塚が一行に並ぶ、いわゆる十三塚である。明治以降に破壊や盗掘にあい、現存するのは1基（7号墳）のみである。銭貨が出土した塚は次の4基のようである。

① 9号墳は、昭和27年に盗掘され、以下の遺物が伝えられている。一字一石経、金小片（方形、重量3.2g）、銭貨32枚である。これらは「墳中に少し大きい自然石があり、その下」から出土したものである。銭貨は咸平元寶2、天禧通寶1、景祐元寶1、皇宋通寶5、治平元寶2、元豊通寶1、元祐通寶3、政和通寶5、宣和通寶3、紹熙元寶1、天口通寶3、元通寶1、判読不能4である。

10号墳は、径7～7.2m、高さ1.22mの円丘状の塚である。昭和35年調査が行われ、墳丘内から477個の一字一石経と共に13枚の銭貨が出土した。銭貨は「出土したとき3、4枚ずつ固着しており、その中の1片に人骨細片が付着していた。新潟大学小片保教授の鑑定によれば火葬骨である」ことが判明している。銭貨は、開元通寶1、景德元寶1、天聖元寶3、皇宋通寶1、熙寧元寶1、元豊通寶3、元祐通寶1、聖宋元寶1、大觀通寶1である。

② 11号墳は、昭和25～28年頃までに盗掘され、宋銭、切遣いの謙葉金（方形、重さ2.8g）、経石が出土したようである。

12号墳は、昭和27年に盗掘され、宋銭13枚、切遣いの謙葉金（方形、重さ2.3g）、経石多数が出土したようである。

140 松岡経塚 湯沢市松岡字坊中（文献92）

長径5.7m、短径4.5mの楕円形を呈し、葺石で覆われた塚である。昭和29年偶然に発見され、内部より寿永3年(1184)と建久7年(1196)銘の入る銅製経筒2組、刀子、土師器壺、須恵器甕などと共に洪武通寶が1枚出土した。出土の位置、状況は不明である。

【皇朝銭出土地】

日本銭のうち古代に鋳造されたいわゆる皇朝十二銭は、県内では5遺跡より15枚確認されている。このうち、六郷町安楽寺跡で富壽神寶1枚、烏海町大久保では大量の渡来銭に混じって和同開珎が1枚出土していることは前述のとおりであり、ここでは皇朝銭が単独で出土した例を紹介する。いずれも秋田市内に所在する遺跡である。

141 湯ノ沢F遺跡 秋田市四ツ小屋末戸松本字湯ノ沢(文献93)

9世紀後葉に営まれたと推定される土坑墓群が発見された遺跡である。昭和58年から2次にわたる調査が行われ、東西63m、南北36mの楕円形の範囲より40基の土坑墓が検出されている。銭貨は16号土坑墓より隆平永寶(初鋳796年)が1枚出土した。同墓は長さ3.64m、幅1.06mの隅丸長方形を呈し、銭貨の他に土師器環、砥石、鉄刀、鉄鎌、鎌、鋤先、銅製帯金具など多様な遺物が副葬されていた。

142 潟向I遺跡 秋田市金足小泉字潟向(文献94)

昭和45年4月19日、金足小泉に所在する男潟の西潟岸砂丘台地から和同開珎3枚が重なった状態で発見された。銭貨は地表下約30cmのところから須恵器片と共に出土したそうである。同遺跡では、昭和48年と58年に平安時代の火葬墓が7基発見・検出されている。いずれも土師器甕あるいは壺を骨蔵器としており、土師器環を蓋としている例が多い。出土銭との関係は不明である。

143 秋田城跡 秋田市寺内(文献95-①~⑤)

最北の古代城権官衙遺跡として周知される秋田城跡では、5地区より3種類9枚の皇朝銭が出土している。

① 昭和52年第21次調査(字焼山)において、S1306住居跡床面より、和同開珎が1枚出土した。「きわめて遺存状態の良好な貨幣である。銅銭であり、計測値は径25.1mm、厚さ1.45mm、内径6.3mm、重量1.7357g」である。共伴遺物は、土師器(甕)、須恵器(環、蓋)、瓦、砥石、刀子などがある。

② 昭和55年第28次調査(字大畑)において、富壽神寶が1枚出土した。出土位置は、明治元年前後に盛土された攪乱層内出土である。

③ 平成2年第54次調査(字鶴ノ木)において、S11051竪穴住居跡埋土より和同開珎1枚出土した。銭貨の「遺存状況はあまり良くない」。

- ④ 平成5年第60次調査(字大畑)において、須恵器短頸壺に入れられた万年通寶5枚が出土した。「古銭の表面には、腐食した布目が認められることから、底面に5枚並べた上に布にくるんだ胞衣を納めたもの」と考えられ、いわゆる胞衣壺に銭貨を埋納した例である。壺は須恵器の蓋がきっちりと被せられており、径40cm程の小土坑(SX1305)に納められていた。土器の年代は8世紀後半と報告されている。なお壺内の胞衣(胎盤)の残存物を血液鑑定したところ、胎盤は男の胎児のものであり、血液型はB型であることが明らかとなっている。
- ⑤ 平成6年第62次調査(字鶴ノ木)において、旧耕作土内、地表下約50cmの位置より和同開珎銀銭が1枚単独で出土した。銭貨出土地点は、秋田城外郭東門から城外に延びる推定大路の南側にあたる。銀銭の組成は、銀97.7%、銅1.4%、鉛0.9%である。

【近世の館跡・塚・神社跡等】

本項目では、近世の館跡1例、塚出土5例6基、土坑出土2例、神社等推定地出土4例であり、銭名の明らかなものは全て寛永通寶であった。

144 柏崎館跡 鹿角市十和田毛馬内字柏崎(文献96)

慶長12年(1607)前後に築造された毛馬内氏の居館跡とされる。昭和62・63年に調査が実施され、館期の遺構は検出されなかったものの、近世の陶磁器と銭貨5枚が出土した。銭貨はいずれも寛永通寶である。

145 鶴釣館跡 大館市鶴釣(文献62)

平成6年に調査が行われ、近世期では、塚や溝跡から10枚の寛永通寶が出土した。内訳は、塚SX01(南北5.3m、東西4.8m、高さ0.83mの方形)マウンド表土中1枚、同塚構築に伴う掘削溝埋土上位より2枚、塚SX02(南北6.6m、東西5.9m、高さ0.82mの楕円形)マウンド表土中6枚、近現代の道路側溝と推定される溝埋土中1枚である。塚では、銭貨以外の遺物の共伴は認められなかった。遺物は、大館郷土博物館に保管されている。

146 中野円墳状遺構 比内町中野(文献97)

東西約4.2m、南北約4m、高さ約1m、墳頂部に長さ1mを越す巨石2個を乗せている円墳状の遺構である。昭和47年に調査が行われ、主体部等の掘り込み施設は検出できなかったが、円墳状遺構の中央部、盛土中位層より寛永通寶10枚が固結した状態で出土した。うち2枚の背には、文、元の文字が認められる。遺物は、大館郷土博物館に保管されている。

147 上岩瀬 田代町岩瀬字上岩瀬塚ノ岱

平成6年5月24日、上岩瀬のスポーツ公園事業工事中に、寛永通寶が5枚発見された。これを受けて同地点を11月に発掘調査を行い、銭貨が出土したのは直径約3m、高さ約1.5mの塚であることが確認された。銭貨は塚の頂部から「深さ80cm位を掘ったところで、約40個の粗石が

あり、その組石の中央に置かれていた」そうである。銭貨以外の遺物には、小型の錫杖、小刀の一部、瑪瑙質の丸石等がある。出土銭の記事は『北羽新報』12月3日付にも載せられている。本例は、田代町教育委員会の近藤佳成氏より教示いただいた。

148 一ツ森遺跡 秋田市槽山金照町(文献98)

近世の塚(報告では墳丘状盛り土)である。昭和50年に調査が行われ、塚は「全長13.5m、頂部は南側にあり、径8m、高さ1mの高まりをなし、更に北側には巾5.3m、高さ30~50cmの舌状の高まりが伸びている。」ことが確認された。盛土は、版築状に「固くつき固められて」おり、掘り込み等の主体部は確認できなかったが、盛土内から寛永通寶11枚、江戸初期の唐津焼の皿、江戸中頃の七輪の小片が出土した。

149 富ヶ沢4号塚 横手市赤坂字富ヶ沢(文献99)

丘陵頂部に位置する近世の塚である。その規模は基底部での長さ11.75m、幅6.3m、高さ0.2~0.5mのくびれ部のない前方後円墳に似た平面形を示す。平成2年に調査が行われ、表土あるいは盛土1層中より11枚の寛永通寶が出土した。報告では塚の性格を「江戸時代に構築された「地境」、もしくは信仰のための塚である可能性が高い」と考えている。

150 久保田城跡 秋田市千秋公園(文献100)

慶長8年(1603)から翌9年にかけて築城された秋田藩主佐竹氏の居城である。昭和63年に本丸北西隅の御隅櫓跡の発掘調査が行われ、1号土坑より寛永通寶1枚が出土した。報告では、同土坑は大量に出土した瓦の年代より「明治10年前後の御隅櫓解体時に伴う瓦等を廃棄した遺構」の可能性を指摘している。

151 秋田城跡竊ノ木地区 秋田市寺内字竊ノ木(文献89-③)

昭和57年第35次調査では、銭貨の副葬された中世の墓坑等が検出されているが、近世の土坑(S K 648)埋土中でも寛永通寶1枚が確認されている。

152 待入Ⅲ遺跡Ⅰ区 秋田市金足片田字待入(文献90)

本遺跡Ⅰ区では、丘の頂上部より銭貨13枚が出土している。全て遺構外出土である。うち12枚は寛永通寶であり、4枚の背には、文、元、波文が見られる(1枚判読不能)。

これら銭貨が出土した地点には、かつて金比羅神社が座しており、この神社に由来する銭と見られる。

153 払田櫓跡 仙北町払田、千畑町本堂城回(文献101-①②)

9世紀初頭に創建された古代城櫓遺跡である。11世紀初頭にはその機能を停止しているようである。その後、この地には天文年間(16世紀前半)に、堀田氏の居城があったとの記録も残り、真山地区には土塁・空堀も現存している。

① 昭和53年第13次調査(払田字長森)において、杉の抜根跡(S X 271)より寛永通寶が1枚

出土した。報告では、「菅江真澄の「月の出羽路」に記載されている八幡神社がほぼこの付近に鎮座していて、この鎮守を中心に杉の大木が茂り、S X 265・270・271は杉の抜根跡である。」とされることから、出土銭貨はこの八幡神社に由来するものと推定できる。なお、同神社は大正5年に高梨神社に合祀されている。

② また昭和56年第43次調査(払田字館前)において、遺構外より寛永通寶7枚(背:波、元各1枚)が出土した。

154 岩清水遺跡 大森町上溝字岩清水(文献13)

『秋田県遺跡地図(県南版)』には、本遺跡は「種別宗教遺跡、遺物に寛永通寶(神社跡と推定)」とある。詳細は不明である。

155 柏原古墳群 羽後町大久保字柏原(文献102)

8世紀中葉から10世紀前半代の古墳群として周知される。昭和60年より詳細分布調査が実施され、64基の古墳の存在が確認されている。銭貨は平成4年の調査において、遺構外より6枚の寛永通寶が出土した。報告では、銭貨は「稲荷社の小祠があり、この小祠に伴うものであろうか」としている。

【その他の出土地】

ここでは近世日本銭が遺構外より出土している例、銭種が不明な例をまとめた。

156 北の林Ⅰ遺跡 鹿角市八幡平字北の林(文献103)

平安時代の集落遺跡である。昭和55年に調査が行われ、寛永通寶2枚(1枚は背:波)が採集されている。

157 玉林寺跡 大館市茂内字鬼ヶ台(文献104)

中世末に存在していたと伝えられる寺跡である。昭和60年に調査が行われ、伽藍等の建物の検出はなかったものの、地蔵菩薩蔵や立石(標石)を伴う土坑等が確認されている。銭貨は遺構外(表土下)より寛永通寶1枚が出土した。遺物は、大館郷土博物館に保管されている。

158 本宮上ノ山遺跡 大館市本宮字上ノ山(文献105)

縄文・平安・中世・近世の散布地・城館である。大館市が発行した「遺跡詳細分布調査報告書」によると、縄文土器、土師器と共に寛永通寶が採集されている。

159 湯ノ沢岱遺跡 峰浜村水沢字湯ノ沢岱

主に10世紀代の集落遺跡である。平成7年の調査において、表土層より寛永通寶が2枚出土した。この時期の遺構は検出されていないが、同期の遺物として煙管が1点出土している。遺物は秋田県埋蔵文化財センターで保管してある。

160 萱刈沢Ⅰ遺跡 八電町鶴川字萱刈沢(文献106)

縄文時代・平安時代の集落遺跡である。平成3年に調査が行われ表土層より、寛永通寶が1枚出土した。

161 延命寺台遺跡 男鹿市鹽本富永宇延命寺台（文献107）

縄文・弥生・平安・近世の複合遺跡である。昭和59年に調査が行われ、遺構外より銭貨2枚が出土している。1枚は寛永通寶である。

162 南平沢 男鹿市船川港南平沢（文献27）

磯村・小早「男鹿半島出土の古銭」によると、「昭和40年代県道改修工事中南平沢大宮」より銭貨が出土したようであるが、詳細は不明である。

163 多多羅 五城目町久保字多多羅（文献108）

『新編・秋田の地名』によると、昭和40年に「銅冶座跡を発掘したところ、鉄滓・銅古銭が多量にでた」ようであるが、詳細は不明である。

164 蒲沼遺跡 八郎潟町蒲沼（文献109）

平安時代と近世の遺物散布地である。昭和56年に調査が行われ、寛永通寶1枚が出土している。出土している陶磁器類は16世紀後半～17世紀初め頃を主体とするようである。

165 片野I遺跡 秋田市上新城中字片野（文献110）

主に縄文時代と平安時代の小規模な集落跡として周知される遺跡である。平成4年から3年にわたり調査が行われ、遺構外より寛永通寶（背：波）1枚が出土した。

166 秋田城跡 秋田市寺内（文献111—①～③）

秋田城跡では中世以降も人々の営みは絶えることなく続いており、少量ながら近世日本銭が発見されている。

① 昭和55年第28次調査（字大畑）では、寛永通寶3枚が出土している。

② 昭和57年第36次調査（字大畑）でも表土層より3枚、整地層より1枚の寛永通寶が出土している。①②とも護国神社境内に位置する。

③ 昭和62年第47次調査（字大小路）では、表土層より文久永寶が2枚（背：波）出土した。

167 上熊ノ沢遺跡 象潟町大須郷字上熊ノ沢（文献112）

主に縄文時代の集落遺跡として周知されている。平成元年に発掘調査が実施され、該期の竪穴住居跡などが検出されている。銭貨はいずれも遺構外出土で7枚確認された。全て寛永通寶である。

168 横岡 象潟町横岡（文献113）

『象潟町史』によると、横岡の村上清治氏「屋敷跡から昭和34年に小判70枚、一分金80枚が発見された」との記載が見られる。『秋田貨幣史』によると、小判は天文・文政小判のようである。

169 白滝川 協和町峰吉川（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和39年「協和村峰吉川、白滝川の川欠地から天保通寶、寛永通寶等出土」とある。白滝川沿いは旧羽州街道筋にあたる。詳細は不明である。

170 小出Ⅲ遺跡 南外村小出（文献114）

縄文時代の集落、中世・近世の遺物散布地である。昭和62・63年に調査が行われ、遺構外より寛永通寶が12枚（1枚は背：波）出土した。うち11枚は台地先端部付近に比較的まとまって発見されている。

171 羽根ヶ台Ⅰ遺跡 田沢湖町小松字羽根ヶ台（文献13）

『秋田県遺跡地図（県南版）』によると、本遺跡では土師器、須恵器と共に銭貨が得られているとされる。詳細は不明である。

172 中山遺跡 田沢湖町田沢字猫乳（文献13）

『秋田県遺跡地図（県南版）』によると、本遺跡の種別は寺跡、遺物は「古銭、土師器片、縄文土器片、石皿」とある。詳細不明である。

173 末野遺跡 大森町上溝字末野（文献13）

縄文時代（中期）の遺跡として周知されている。『秋田県遺跡地図（県南版）』には、縄文土器、石器と共に「古銭（寛永通寶その他）」と記されている。

174 オホン清水遺跡 横手市塚郷字オホン清水（文献115）

古墳時代と平安時代の集落遺跡である。昭和58年に調査が実施され、遺構外より寛永通寶、判読不能各1枚が出土した。

175 元村 仙南村金沢西根字元村（文献6）

『秋田貨幣史』によると、昭和32年「金沢西根元村の土蔵跡から、戊辰戦争使用のニセ小判十数枚発掘」とある。詳細は不明である。

176 七高山修験遺跡 羽後町新町字院内沢（文献116）

山岳修験に関する神社跡及び修験道場等の遺構及び伝承の場所を包括する遺跡である。平成2年に調査が行われ、山岳修験に係わる遺構の確認はできなかったが、縄文時代中期から弥生時代にかけて頁岩の採集、1次加工を行っていた場であることが判明した。清岩寺地区Eトレンチ第2層中より寛永通寶が1枚出土した。

県内出土の銭種一覧

本集成において確認し得た出土銭貨種は、第1表のようにまとめられる。このうち、出土例の稀少な銭種について若干ふれておく。

半両は秋田市寺内周辺2例、六郷町安楽寺1例の計3例、貨泉は菅江真澄が拓影図を残した安楽寺での1例1枚のみのものである。五銖は十文字町植田など6例認められるが、多くは後

渡期の铸造と思われる、唯一六朝期と推定できるのは、これも安楽寺での1枚のようである。

開元通寶は、実に35例(遺跡)で出土しているが、845年初鑄の紀地銭と呼ばれるものは、男鹿市約が崎と横手市大島井山の2例しか確認できなかった。また篆書体の開元通寶は昭和町千刈田で1枚出土しており、これは南唐960年を初鑄とする銭貨である。

天福元寶は、男鹿市中石浜で1例出土しているようである。同銭は『中世の出土銭』には現在までのところ国内での出土例はないそうである。しかし中石浜出土銭を報じた『網師』によると「天福と云銭、これは晋の高祖の年号に候へ」とあり、後晋938年初鑄の天福元寶と判断したものである。また後周955年初鑄の周通元寶は、鳥海町人久保と八森町林ノ沢2例のみである。

北宋銭では、熙寧重寶と崇寧通寶は、能代市浄明寺首塚で各1枚、宣和元寶は男鹿市約が崎でのみ出土している。また紹聖通寶は、明確に同種の確認はできなかったが、紹聖元寶との判別ができない銭が存在することから表に載せている。

南宋銭では、建炎通寶が千畑町厨川谷地、湯沢市土沢、林ノ沢の3例確認され、端平元寶、嘉熙通寶も林ノ沢でのみ出土している。また明銭の大中通寶は男鹿市の北浜野と打越の2例である。朝鮮銭の常平通寶は男鹿周辺で2例確認されているが、いずれも漂着船あるいは沈没・座礁船内出土に限られる。

安南銭である大和通寶、洪順通寶、琉球銭の大世通寶はいずれも雄物川町二井山でのみ出土している銭種である。

以上の他、銭名の認められない無文銭は、鹿角市新斗米館・小枝指館・花輪館・当麻館・小平、男鹿市北浜野、秋田市秋田城・後城、雄勝町鶴沼城の9遺跡に見られる。県北鹿角地方の館出土が多いことが特徴であろう。また一括大量銭に混入している例は、北浜野のみであり、ここでは全体の21% (370枚) が無文銭で占められている。秋田城では2基の土坑墓より無文銭が検出され、うち1基(S T 635)は径18mmの無文銭6枚が納められていた。これら無文銭のうち中央の孔が円形を示す輪銭あるいは鳩目銭と称される銭は、新斗米館と当麻館の2例のようである。

また鉄銭出土の報告のあるものは、十和田湖中湖、八郎潟湖底、鹿角市小枝指館・黒土館、能代市福田、秋田城鶴ノ木の6例である。八郎潟湖底は、寛永通寶鉄銭であり、他は判読不能あるいは無文と思われる。

第1表 県内出土の銭貨種一覧

番号	銭貨名	初鋳国	初鋳年	番号	銭貨名	初鋳国	初鋳年
〔中国銭〕				42	宣和元寶	北宋	1119
1	八銖半兩	前漢	B. C. 186	43	宣和通寶	北宋	1119
2	貨泉	新	A. D. 14	44	建炎通寶	南宋	1127
3	五銖	後漢	24	45	淳熙元寶	南宋	1174
4	五銖	六朝	—	46	紹熙元寶	南宋	1190
5	開元通寶	唐	621	47	慶元通寶	南宋	1195
6	乾元重寶	唐	758	48	嘉泰通寶	南宋	1201
7	開元通寶(紀)	唐	845	49	開禧通寶	南宋	1205
8	天福元寶	後晋	938	50	嘉定通寶	南宋	1208
9	周通元寶	後周	955	51	大宋元寶	南宋	1225
10	唐國通寶	南唐	959	52	紹定通寶	南宋	1228
11	開元通寶	南唐	960	53	端平元寶	南宋	1234
12	宋通元寶	北宋	960	54	嘉熙通寶	南宋	1237
13	太平通寶	北宋	976	55	淳祐元寶	南宋	1241
14	淳化元寶	北宋	990	56	皇宋元寶	南宋	1253
15	至道元寶	北宋	995	57	景定元寶	南宋	1260
16	咸平元寶	北宋	998	58	咸淳元寶	南宋	1265
17	景德元寶	北宋	1004	59	正隆元寶	金	1157
18	祥符元寶	北宋	1009	60	大定通寶	金	1178
19	祥符通寶	北宋	1009	61	至大通寶	元	1310
20	天禧通寶	北宋	1017	62	大中通寶	明	1361
21	天聖元寶	北宋	1023	63	洪武通寶	明	1368
22	明道元寶	北宋	1032	64	永樂通寶	明	1408
23	景祐元寶	北宋	1034	65	宣德通寶	明	1433
24	皇宋通寶	北宋	1038	〔朝鮮銭〕			
25	至和元寶	北宋	1054	66	朝鮮通寶	朝鮮	1423
26	至和通寶	北宋	1054	67	常平通寶	朝鮮	1678
27	嘉祐元寶	北宋	1056	〔安南銭〕			
28	嘉祐通寶	北宋	1056	68	太平興寶?	丁	970
29	治平元寶	北宋	1064	69	大和通寶	後黎	1443
30	治平通寶	北宋	1064	70	洪順通寶	後黎	1509
31	熙寧元寶	北宋	1068	〔琉球銭〕			
32	熙寧重寶	北宋	1071	71	大世通寶	琉球	1454
33	元豐通寶	北宋	1078	〔日本銭〕			
34	元祐通寶	北宋	1086	72	和同開珎	日本	708
35	紹聖元寶	北宋	1094	73	萬年通寶	日本	760
36	紹聖通寶	北宋	1094	74	隆平永寶	日本	796
37	元符通寶	北宋	1098	75	富壽神寶	日本	818
38	聖宋元寶	北宋	1101	76	慶長一分金	日本	1601
39	崇寧通寶	北宋	1102	77	寛永通寶	日本	1636
40	大觀通寶	北宋	1107	78	天保通寶	日本	1835
41	政和通寶	北宋	1111	79	文久永寶	日本	1863

加護山出土銭は除く、(紀)は記地銭を表す

まとめ

秋田県内において銭貨の出土した遺跡(地区)は、176箇所におよぶ。このうち発掘調査による検出例は69であり、残り107箇所は工事等により偶然発見されたことになる。さらに小稿で【一括大量出土地】としたものは57例あり、そのいずれもが偶然掘り出されているのである。近年著しく発掘調査事例が増加しているが、その調査中に発見された例はない。前項では昭和(戦後)以降について、出土地を一括の有無や種別から分類の上記載していたが、ここではそれ以前の資料も含め整理しておく。

A：一括大量出土銭は、文献等の記載のみで現存しない(しないと思われる)場合が多いが、57例中、何らかの容器に入れられていたものは23例あるようである。最も多いのが甕あるいは壺の13例、次いで曲物6例、その他に木箱、カマス、鉢形の容器、漆塗りの重鉢がある。容器が確認できなかった場合でも裸のまま埋納するとは考えられないので、カマスや布袋に入れていたと推定される。埋納銭種は、中世渡来銭のみである例が圧倒的であるが、烏海町大久保では和同開珎が、男鹿市鹿の沢では寛永通寶が混在しており、大潟村八郎潟湖底は寛永通寶が主である。

B：出土地の種別に着目すれば、【中世の館跡・集落跡】関係の出土例が多い。50数例程確認できる。次いで【近世の館跡・塚・神社跡等】12例、【中世の墓・塚】10例と続く。近世の塚では5遺跡6基より寛永通寶が得られているが、その出土状態には差異がある。すなわち銭貨が塚の墳丘内部から出土する場合と、塚表面から採集される場合とである。明らかに前者は構築にあたって銭貨を埋納あるいは封入させたものであり、比内町中野、田代町上岩瀬、秋田市一ツ森の3基が該当する。他方後者は構築後に供えられたようであり、大館市餌釣、横手市富ヶ沢の2遺跡3基が当てはまる。塚の構築目的などについては、民俗例等より検討する必要があると思われるが、ここでは言及し得ない。一方中世塚出土の銭貨は、明確な例では能代市浄明寺首塚、峰浜村内林、仁賀保町丁刃森、羽後町貝沢拾三本塚、湯沢市松岡塚の5遺跡であるが、後三者は経筒あるいは経石等を共存する経塚出土である点に特徴がある。

墓出土の銭貨は、六道銭と称される副葬銭として扱われている。渡来銭を副葬する中世墓は4遺跡22基で確認されているが、寛永通寶等の近世日本銭を副葬する近世墓の検出は現段階ではない。なお、寛永通寶が遺構内より出土した例は次の4遺跡にある。鹿角市花輪館では堅穴床面、秋田市久保田城と秋田城輪ノ木では土坑内、雄勝町輪沼城では溝跡内である。

また特異な事例では、海岸に打ち上げられた銭貨を採取した例が江戸時代の文献より5例確認できる。船舶の座礁・沈没等に伴うものであろう。事実安永7年(1778)には、朝鮮國の漁船と思われる船が現在の男鹿市船越に漂着しており、船内に常平通寶等が遺棄されていたことも記録に残っている。沈没船と言えば、大潟村八郎潟湖底出土銭も海航行の船の積み荷であらう。

た可能性が高い。一方湖底出土銭は、十和田湖中湖でも引き上げられている。この場合は、信仰による寶銭の集積と推定されている。また二ツ井町加護山は鑄造地での出土として特筆できる。

おわりに

秋田県における出土銭貨の集成作業を通して、その多くの事例の存在と共に、出土後に所在不明となったり、未精査の資料も少なからず認められることも判明した。特に非発掘調査資料、一括大量銭は、被害者となる場合が多い。出土銭貨は古物ではなく遺物・文化財である。その認識を新たにし、出土予測不能な資料に対しても考古学的に検証できるように、何らかの策を講じることが考古学に携わる者に求められているように思える。

起稿にあたり、数多くの文献を引用させていただいた。なかに誤認・誤記はない、とは断言できない。お気づきの点がありましたらお知らせください。もちろん出土銭の情報もよろしくお願いします。

最後になりましたが、本集成を行うにあたり、県内各地の教育委員会・公民館等の関係者を始め、次の方々の協力を得ました。記して御礼申し上げます。

藤井安正、板橋範芳、近藤佳成、和泉昭一、岡田辰雄、松田純一、古内龍夫、武田孝義、小林喜兵、山崎和夫、村井和雄、大原正夫、石川尚三、磯村朝次郎、船木義勝、小松正夫、日野久、田口政一、佐藤勇悦、長谷川潤一、斎藤俊明、遠田喜一、池田史郎、赤川祐一、高橋建、伊藤攻、相馬律子、磯村亨、大沢貞悦、藤澤昌、小西宏彦、澤谷敬、佐野浩子、土肥稔、鈴木俊男、柴田陽一郎（敬称略、順不同）

引用文献

- 1 今村義孝監修『新秋田叢書』第4巻 1971（昭和46年）所収
- 2-① 人見蕉雨『人見蕉雨集』第二冊 1968（昭和43年）所収
- ② 深沢多市編『秋田叢書』第2巻 1929（昭和4年）所収
- ③ 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第7巻 1978（昭和53年）所収
- ④ 今村義孝監修『新秋田叢書』第7巻 1971（昭和46年）所収
- 3 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第5巻 1975（昭和50年）所収
- 4 寺内町誌編纂委員会『寺内町誌』1947（昭和22年）引用は1978年発行の復刻版参照。
- 5 狩野徳藏『雄鹿名勝誌』五版 1914（大正3年）
- 6 佐藤清一郎『秋田貨幣史』1972（昭和47年）
- 7-① 真崎勇助（収集）『山本郡輪山浄明寺掘出品之書上』（大館市立中央図書館蔵）。これらの遺物は、真崎勇助が著した『酔月堂隨筆』（巻之二）の「山ノ崩ヨリ出ル欄轆井器物」によると、

樽と思われる丸桶（内面朱塗り、外面黒塗り）に入っていたようである。更に銭貨は2本の銀針金（尋常の火箸程の太さ）にそれぞれ6枚と3枚に分けて通されていたとも記している。

- 一〇 今村義孝監修『新秋田叢書』第15巻 1972（昭和47年）所収
- 8 今村義孝監修『新秋田叢書』第3巻 1971（昭和46年）所収
- 9 秋田県教育委員会『秋田県の中世城館』1981（昭和56年）
- 10-①② 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第4巻 1973（昭和48年）所収
- 11 文献10、佐藤久治『秋田の神々と神社』1981（昭和56年）
- 12 内田武志・宮本常一編『菅江真澄全集』第6巻 1976（昭和51年）所収
- 13 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62年）
- 14 石川理紀之助『古泉 川上の巻』1908（明治41年）
- 15 五城目町『五城目町史』1975（昭和50年）
- 16 石川理紀之助『釣が崎』1907（明治40年）
- 17 金足西尋常高等小学校『金足村郷土誌』第1編 1934（昭和9年）
- 18 烏海町『烏海町史』1985（昭和60年）
- 19 天王町役場『天王町誌資料』1968（昭和43年）
- 20 稲川町教育委員会『稲川町史資料篇』第二集 1967（昭和42年）
- 21 石川理紀之助『ひろねのいづみ』1915（大正4年）
- 22 磯村朝次郎「一向遺跡」「船越誌-その自然と歴史-」1978（昭和53年）
- 23 栗田茂治『南秋田郡史』1951（昭和26年）より引用
- 24 ニッ井町『町史資料 加護山製練所』1995（平成7年）
- 25 千畑町『古銭発掘山來記』『千畑町郷土誌』1986（昭和61年）
- 26 湯沢市教育委員会『埋蔵古銭貨』『湯沢市史』1965（昭和40年）
- 27 磯村朝次郎・小早淳「男鹿半島出土の古銭」『男鹿半島研究』第11号 1981（昭和56年）
- 28 佐々木正雄「中国の古銭」『八森郷土誌資料』第27号 1987（昭和62年）
- 29 河辺町教育委員会『河辺町の遺跡』1987（昭和62年）
- 30 笹尾哲雄『大悲寺七百年史』1976（昭和51年）
- 31 秋田県教育委員会「内林遺跡」『秋田県遺跡分布調査報告書』1979（昭和54年）「秋田県遺跡カード」とは秋田県教育委員会発行の『秋田県遺跡地図』作成の元となった台帳を指す。
- 32 栗沢光男・高橋忠彦・熊谷太郎「秋田県内の珠洲系陶器資料」『秋田県埋蔵文化財センター研究紀要』第1号 1986（昭和61年）
- 33 佐々木正雄「中国古銭の出土」『八森町誌』1988（昭和63年）
- 34 武田孝義「上平張遺跡」『能代市史』考古編 1995（平成7年）
- 35 ニッ井町町史編さん委員会「大林の古銭」『ニッ井町史』1977（昭和52年）
- 36 井川町「今戸出土の中国古銭」『井川町史』1986（昭和61年）
- 37 佐々木民秀「豊岩発掘銭を観て」『秋田貨幣ニュース』第18号 1977（昭和52年）

- 38 『秋田民報』昭和45年9月12日付けの記事
- 39 雄物川町役場『雄物川町郷土史』1980（昭和55年）
- 40 十文字町『十文字町史』1996（平成8年）
- 41 上野昭夫「八郎酒の沈船」『秋田魁新報』昭和45年6月9・10日付（夕刊）、上野昭夫「続・八郎酒の古銭」『秋田魁新報』昭和45年12月7・8日付（夕刊）。至元通寶については、調査者である上野氏が至元通寶＝宋銭と記しているが、同名の宋銭はなく、元朝1285年に初铸の至元通寶であるのか、別の銭を指しているのかは不明である。なお、『中世の出土銭』によると至元通寶は国内での検出例はないそうである。
- 42 秋田貨幣研究会『秋田貨幣ニュース』第5号 1976（昭和51年）
- 43 『仙東新聞』昭和36年7月15日付の記事
- 44 鹿角市教育委員会『鹿角市新斗米館跡第Ⅰ次発掘調査報告書』1980（昭和55年）
鹿角市教育委員会『鹿角市新斗米館跡第Ⅱ次発掘調査報告書』1981（昭和56年）
- 45 秋田市教育委員会「下埜C遺跡」『秋田市秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1987（昭和62年）
- 46 横手市教育委員会『大鳥井山Ⅰ』1978（昭和53年）
- 47 秋田県立博物館『秋田県立博物館 総合案内』1987（昭和62年）には、出土銭の一部と容器の写真が掲載されている。
佐々木民秀「横手一分金その後」『秋田貨幣ニュース』第12号 1977（昭和52年）、三浦畑四郎「横手埋蔵一分金評価委員会に出席して」『秋田貨幣ニュース』第15号 1977（昭和52年）
- 48 秋田県教育委員会「瀬瀬館遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅰ』1981（昭和56年）
- 49 秋田県教育委員会「歌内遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅱ』1982（昭和57年）
- 50 鹿角市教育委員会「長牛城跡発掘調査報告書」1981（昭和56年）
- 51 秋田県教育委員会「妻の神Ⅱ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書ⅩⅠ』1984（昭和59年）
- 52 秋田県教育委員会「乳牛平遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅳ』1984（昭和59年）
- 53 秋田県教育委員会「高瀬館遺跡」『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘地区報告書Ⅱ』1987（昭和62年）
- 54-① 「秋田県鹿角郡柴平村小枝指七館遺跡」『館址』1958（昭和33年）
-② 鹿角市教育委員会『小枝指館跡発掘調査報告書』1992（平成4年）
- 55 鹿角市教育委員会『地羅野館跡発掘調査報告書』1993（平成5年）
- 56-① 鹿角市教育委員会『花輪館跡試掘・下沢田遺跡発掘調査報告書』1984（昭和59年）
-② 鹿角市教育委員会『花輪館跡試掘調査報告書（2）』1988（昭和63年）
- 57 鹿角市教育委員会『花輪古館跡発掘調査報告書』1994（平成6年）
- 58 鹿角市教育委員会『小平遺跡』1979（昭和54年）
- 59 鹿角市教育委員会『黒土館跡発掘調査報告書』1996（平成8年）
- 60 鹿角市教育委員会『当麻館跡発掘調査報告書』1989（平成元年）

- 61 大館市史編さん委員会『大館市片山館コ発掘調査報告書第1次』1973（昭和53年）
- 62 大館市教育委員会『鮎釣館跡発掘調査報告書』1996（平成8年）刊行予定
- 63 大館市史編さん委員会「前田館」『大館市史』第1巻 1979（昭和54年）
- 64 大館市史編さん委員会『谷地中「館」・中野田墳状遺構発掘調査報告書』1973（昭和53年）
比内町教育委員会『谷地中「館」遺跡発掘調査報告書』1987（昭和62年）
- 65 比内町教育委員会『大日堂前遺跡発掘調査報告書』1982（昭和57年）
- 66 比内町教育委員会『真館緊急調査報告書』1973（昭和48年）
- 67 秋田県教育委員会『竜毛沢館跡発掘調査報告書』1990（平成2年）
- 68 峰浜村教育委員会「蝦夷館遺跡」『峰浜村の文化財』1975（昭和50年）
- 69 能代市教育委員会『金山館発掘調査概報』1985（昭和60年）
能代市教育委員会『金山館発掘調査報告書』1986（昭和61年）
- 70 秋田県教育委員会「館の上館遺跡」『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書V』1994（平成6年）
- 71 磯村朝次郎「船越一向遺跡調査概報－現存井戸跡を中心として－」『男鹿市文化財調査報告』No. 1 1965（昭和40年）
- 72 文化財保護委員会『秋田城跡第三次調査概要』1962（昭和37年）
- 73 秋田市教育委員会『後城遺跡発掘調査報告書』1979（昭和54年）
- 74 秋田市教育委員会『秋田山下夕野遺跡』1979（昭和54年）
- 75 秋田市教育委員会「岩城館跡」『秋田県秋田市遺跡詳細分布調査報告書』1989（平成元年）
- 76 西目町教育委員会『浜館遺跡調査報告書』1975（昭和50年）
- 77 秋田県教育委員会『金沢権発掘調査概報』1967（昭和42年）
- 78 秋田県教育委員会「手取清水遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書V』1990（平成2年）
- 79 平鹿町『平鹿町史』1984（昭和59年）
- 80 稲川町教育委員会『稲庭城跡発掘調査報告書』1987（昭和62年）
- 81 秋田県教育委員会『鶴沼城跡発掘調査報告書』1980（昭和55年） 銭名は報告書の記述と一部異なるが、筆者が実見し判読した結果を載せている。
- 82 秋田県教育委員会「福田遺跡」『一般国道7号八電能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II』1989（平成元年）
- 83 磯村朝次郎「脇木版森家屋埋没遺址調査概報」『秋田考古学』第18号 1961（昭和36年）
- 84 秋田県教育委員会『片符沢遺跡1発掘調査報告書』1980（昭和55年）
- 85 秋田県教育委員会『カウヤ遺跡発掘調査報告書』1985（昭和60年）
秋田県教育委員会『カウヤ遺跡第2次発掘調査報告書』1986（昭和61年）
- 86 西木村郷土史編纂会『西木村郷土史資料』西明寺篇中巻 1968（昭和43年）
- 87 羽後町教育委員会「羽後病院敷地遺跡」『福島遺跡ほか発掘調査報告書』1994（平成6年）
- 88 秋田県教育委員会「妻の神Ⅲ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書IX』1984（昭和59年）

- 89-① 秋田市教育委員会『昭和48年度秋田城跡発掘調査概報』1974(昭和49年)
- ② 秋田市教育委員会『昭和54年度秋田城跡発掘調査概報』1980(昭和55年)
- ③ 秋田市教育委員会『昭和57年度秋田城跡発掘調査概報』1983(昭和58年)
- ④ 秋田市教育委員会『昭和60年度秋田城跡発掘調査概報』1986(昭和61年)
- ⑤ 秋田市教育委員会『平成4年度秋田城跡発掘調査概報』1993(平成5年)
- ⑥ 秋田市教育委員会『昭和55年度秋田城跡発掘調査概報』1981(昭和56年)
- 90 秋田県教育委員会「待入Ⅲ遺跡」『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1992(平成4年)
- 91-① 奈良修介「羽後町三輪十三本塚十号墳調査報告」『秋田考古学』第16号 1960(昭和35年)
- ② 畠山章弘「十三本塚出土の切遣い金と宋銭」『秋田貨幣ニュース』第20号 1977(昭和52年)
- 92 秋田県『秋田県史考古編』1960(昭和35年)
- 山下孫繼『湯沢市雄勝郡の埋蔵文化財』湯沢市教育委員会 1961(昭和36年)
- 93 秋田市教育委員会「湯ノ沢F遺跡」『秋田市秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』1984(昭和59年)
- 94 秋田県立博物館『所蔵資料目録(考古)』1983(昭和58年)
- 95-① 秋田市教育委員会『昭和52年度秋田城跡発掘調査概報』1978(昭和53年)
- ② 文献 89-⑥
- ③ 秋田市教育委員会『平成2年度秋田城跡発掘調査概報』1991(平成3年)
- ④ 秋田市教育委員会『平成5年度秋田城跡発掘調査概報』1994(平成6年)、小松正夫「秋田城跡出土陶衣壺の埋納銭「萬年通寶」について」『出土銭貨』創刊号 1994(平成6年)、小松正夫「秋田城跡出土陶衣壺の新知見と埋納銭「萬年通寶」について」『出土銭貨』第4号 1995(平成7年)、『秋田魁新報』平成7年12月7日付け記事
- ⑤ 秋田市教育委員会『平成6年度秋田城跡発掘調査概報』1995(平成7年)、西谷隆「秋田城跡出土の「和同開珎銀銭」について」『出土銭貨』第2号 1994(平成6年)
- 96 鹿角市教育委員会『柏崎跡発掘調査報告書』1989(平成元年)
- 97 大館市史編さん委員会『秋田県北秋田郡比内町谷地中「館」・中野円墳状遺構発掘調査報告書』1973(昭和48年)
- 98 秋田考古学協会『秋田市金照寺山一ツ森遺跡発掘調査報告書』1976(昭和51年)
- 99 秋田県教育委員会「富ヶ沢4号塚」『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』1992(平成4年)
- 100 秋田市教育委員会『久保田城跡-本丸御階発掘調査報告書-』1989(平成元年)
- 101-① 秋田県教育委員会『弘田柵跡-第12次補足・第13次~22次発掘調査概要-』1979(昭和54年)
- ② 秋田県教育委員会『弘田柵跡-第38~45次発掘調査概要-』1982(昭和57年)
- 102 羽後町教育委員会「柏原古墳群」『福島遺跡ほか発掘調査報告書』1993(平成5年)

- 103 秋田県教育委員会「北の林Ⅰ遺跡」『東北縦貫自動車道発掘調査報告書Ⅲ』1982（昭和57年）
- 104 大館市教育委員会『大館市玉林寺跡発掘調査報告書』1986（昭和61年）
- 105 大館市教育委員会『秋田県大館市遺跡詳細分布調査報告書』1990（平成2年）
- 106 秋田県教育委員会「豊刈沢Ⅱ遺跡」『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1993（平成5年）
- 107 男鹿市教育委員会『延命寺台遺跡発掘調査報告書』1984（昭和59年）
- 108 三浦鉄郎『新編・秋田の地名』1987（昭和62年）
- 109 秋田県教育委員会『藤沼遺跡発掘調査報告書』1982（昭和57年）
- 110 秋田県教育委員会「片野Ⅰ遺跡」『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1996（平成8年）
- 111-① 文献89-⑥と同、-②文献89-③と同、
-③ 秋田市教育委員会『昭和62年度秋田城跡発掘調査概報』1988（昭和63年）
- 112 秋田県教育委員会「上熊ノ沢遺跡」『大砂川地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』1991（平成3年）
- 113 象潟町教育委員会『象潟町史』1978（昭和48年）
- 114 秋田県教育委員会「小出Ⅲ遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅶ』1991（平成3年）
- 115 横手市教育委員会『オホノ清水～第3次遺跡発掘調査報告書～』1984（昭和59年）
- 116 羽後町教育委員会『七高山修験遺跡詳細分布調査報告書』1991（平成3年）

秋田県のヒスイ出土遺跡

栗澤光男

1. はじめに

県内におけるヒスイ（硬玉）出土の報告は、これまでに武藤鉄城（武藤1949）、磯村朝次郎（磯村1955）、桜田隆（桜田1993）によって行われている。今回は、これらを基に現在分かっているヒスイ出土遺跡を集成し、今後の基礎データとなることを目的とした。なお、資料はできるだけ掲載するように努め、その大きさが分かるものは第2図の表に記載した。

武藤 鉄城：1949（昭和24年）「ヒスイ製品の原石問題」『秋田文化』第2巻1号

磯村朝次郎：1955（昭和30年）「秋田県における先史硬玉製品」『秋田考古学』第2号

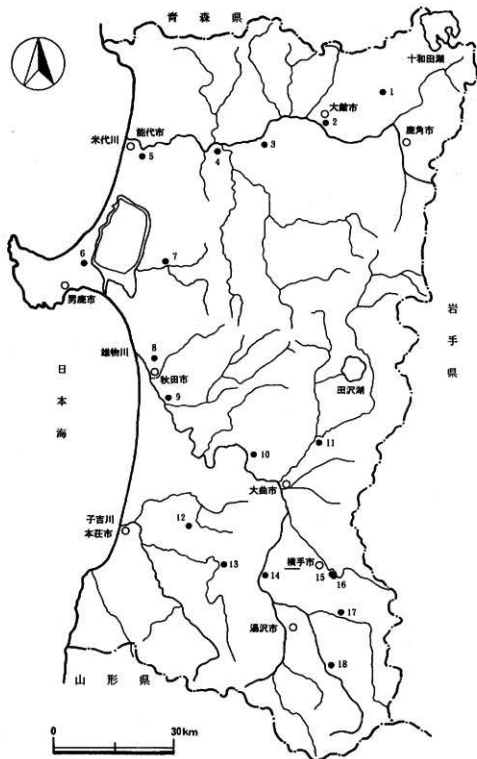
桜田 隆：1993（平成5年）『萩ノ台Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第236集

2. ヒスイ出土遺跡

ヒスイ（硬玉）の産地は新潟県糸魚川を中心とした地域であるのは周知のことである。県内では、これまで18遺跡からヒスイが発見されている。その分布は米代川水系、雄物川水系、子吉川水系に見られる。

ヒスイは、縄文時代の墓所に、遺体と共に副葬品されたものが多いが、集落跡からの出土も見られる。このほか古墳遺跡などからも副葬品として出土している。

県内で現在最も古いのは、縄文時代中期の中仙町野口Ⅱ遺跡出土のヒスイである。大きさは径70mmで中央に孔が穿たれている製品である（第2図20）。後期の出土例は大館市萩ノ台Ⅱ遺跡と大内町鹿ノ爪遺跡の2遺跡である。このうち萩ノ台Ⅱ遺跡で出土のヒスイは大珠3個（第2図2～4）で、うち2個（2・3）には、両面と片側面に溝が彫られている。2の溝は幅3～4mm、深さ約0.5mm、3の溝は幅5.5mm、深さ0.3～0.5mmである。このように溝をもつ大珠は他に類例を見ない。晩期になると11遺跡と多く、山内村小田Ⅳ遺跡・虫内Ⅲ遺跡の土壌墓から出土の小玉（第2図5・6）や東由利町湯出野遺跡の土壌墓から出土の勾玉（第2図5）など玉類が多い。縄文時代以後の出土例は、現在のところ奈良・平安時代の古墳遺跡である五城目町岩野山古墳群、雄物川町蝦夷塚古墳群の2遺跡である。いずれも勾玉が出土している。前者では1個、後者では3個の出土である。



第1図 ヒスイ出土遺跡位置図

以上、県内の出土例は僅少であるが、ヒスイを出土する遺跡は県内全域に分布しており、今後増加するものと思われる。また、今回の集成に際し、石質鑑定の不備なもの、その大きさを示していないものが多かった。石質・形状・計測値は記載すべきである。

註 岩野山古墳群出土の硬玉勾玉。長さ2cm、断面は三角形を呈している(『秋田考古学』第19号) 蝦夷塚古墳群出土の硬玉勾玉(東京国立博物館蔵)。①長さ4.95cm、片面穿孔、不透明で僅かに緑色をおびている。②長さ4.1cm、片面穿孔、質は悪く、不透明で緑色はほとんどなく、数箇所に亀裂がある。③長さ1.4cm、片面穿孔、薄緑色を残している。扁平、腹部に僅かの袈りがあり、勾玉形をしている程度である(『秋田県史』考古編)。

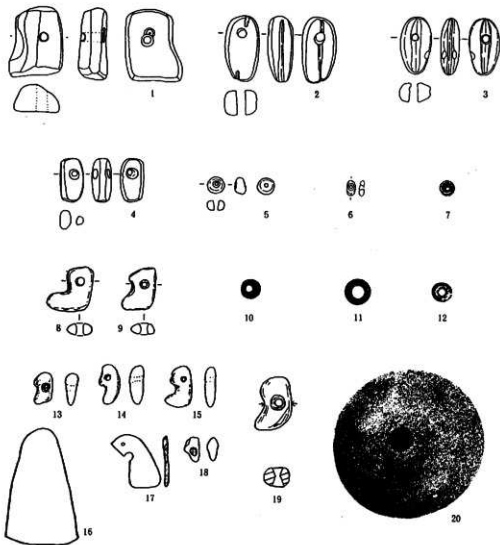
引用・参考文献

1. 磯村初次郎「秋田県における先史硬玉製品」『秋田考古学』第2号 1955(昭和30年)
2. 奈良修介・豊島 昂「秋田県南秋田郡五城目町岩野山古墳」『秋田考古学』第19号1961(昭和36年)
3. 奈良修介・豊島 昂「秋田県の考古学」郷土考古学叢書3 1967(昭和42年)
4. 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図』1976(昭和51年)
5. 秋田県『秋田県史』考古編 1977(昭和52年)
6. 三上礼子「秋田県における古墳遺跡について」『秋田考古学』第34・35合併号1978(昭和53年)
7. 秋田県教育委員会「湯出野遺跡発掘調査概報」秋田県文化財調査報告書第53集 1978(昭和53年)
8. 雄物川町役場『雄物川町郷土史』1980(昭和55年)
9. 秋田県教育委員会「東北縦断自動車道発掘調査報告書Ⅹ 一はりま館遺跡一」秋田県文化財調査報告書第109集 1984(昭和58年)
10. 森 浩一編『シンポジウム古代蝦夷文化の謎』新人物往來社 1988(昭和63年)
11. 秋田県農業町教育委員会「藤株遺跡発掘調査報告書Ⅱ」1991(平成3年)
12. 秋田県教育委員会「国道103号道路改良事業に係る埋蔵文化財報告書Ⅶ 一萩ノ台Ⅱ遺跡一」秋田県文化財調査報告書第236集 1993(平成5年)
13. 秋田県教育委員会「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅢ 一虫内Ⅲ遺跡一」秋田県文化財調査報告書第242集 1994(平成6年)
14. 秋田県教育委員会「東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書ⅩⅣ 一小田Ⅳ遺跡一」秋田県文化財調査報告書第243集 1994(平成6年)
15. 能代市『能代市史資料編考古』1995(平成7年)

遺跡番号	遺跡名	所在地	ヒスイの出土点数	時代(時期)	文献番号
1	はりま館遺跡	鹿角郡小坂町小坂字下ノ山	大珠1点	縄文・弥生・平安	9
2	萩ノ台Ⅱ遺跡	大館市池内字上野	大珠3点	縄文(後期)	12
3	藤株遺跡	北秋田郡鷹巣町藤株	小玉1点	縄文(晩期)	11
4	麻生遺跡	山本郡二ツ井町七座字麻生ノ山	丸玉1点	縄文(晩期)	10・12
5	柏子所貝塚	能代市字柏子所	小玉3点	縄文(晩期)	15
6	滝の頭出土	男鹿市五里合桶川滝の頭付近埋地	勾玉3点	縄文(晩期)	1・3・4
7	岩野山古墳群	南秋田郡五城目町上樋口字樽沢	勾玉1点	奈良・平安	2・3・6
8	上新城中学校遺跡	秋田市上新城五十丁字小林	丸玉・勾玉各1点	縄文(晩期)	10・12
9	地方遺跡	秋田市上北手輪田字堤ノ沢	勾玉1点	縄文(晩期)	10・12
10	殿座敷遺跡	仙北郡西仙北町土川字栗木沢	勾玉1点	縄文(晩期)	10・12
11	野口Ⅱ遺跡	仙北郡中仙町清水字野口田中	大珠1点	縄文(中期)	3・4・5
12	鹿ノ爪遺跡	由利郡大内町岩野目沢鹿ノ爪	勾玉1点	縄文(後期)	10・12
13	湯出野遺跡	由利郡東由利町老方字湯出野	勾玉2点	縄文(晩期)	7
14	蝦夷塚古墳群	平鹿郡雄物川町造山字蝦夷塚	勾玉3点	奈良・平安	3・5・6・8
15	小田Ⅳ遺跡	平鹿郡山内村字淵字小田	小玉1点	縄文(晩期)	14
16	虫内Ⅲ遺跡	平鹿郡山内村字淵字虫内	小玉1点	縄文(晩期)	13
17	菅生田輪遺跡	雄勝郡東蘆川村田子字菅生田輪	勾玉1点	縄文	10・12
18	女男沼遺跡	雄勝郡稲川町三架字女男沼	勾玉1点	縄文(晩期)	10・12

ヒスイ出土遺跡一覧表

※遺跡番号6については、上輪川(かみしびかわ)Ⅰ遺跡と思われる。その所在地は、男鹿市五里合桶川字上輪川50である。



(長さ・幅・厚さはmm、重さはgである。)

番号	出土地	長さ	幅	厚さ	重さ	番号	出土地	長さ	幅	厚さ	重さ
1	はりま館遺跡	22.0	—	—	—	11	柏子所遺跡	—	—	—	—
2	萩ノ台Ⅱ遺跡	51.5	26.5	20.0	55.51	12	柏子所遺跡	—	—	—	—
3	萩ノ台Ⅱ遺跡	44.5	24.0	16.0	30.47	13	井川町	24.5	—	9.8	4.795
4	萩ノ台Ⅱ遺跡	34.5	17.5	15.0	17.38	14	滝の頭	31.0	—	15.0	9.581
5	小田V遺跡	12.5	13.5	8.5	2.56	15	滝の頭	32.4	—	8.5	10.01
6	虫内Ⅲ遺跡	13.0	7.0	4.5	0.50	16	男鹿北浦	61.5	—	2.5	—
7	藤株遺跡	—	—	—	—	17	男鹿北浦	42.0	—	3.5	—
8	湯出野遺跡	—	—	—	—	18	滝の頭	—	—	—	—
9	湯出野遺跡	—	—	—	—	19	大湯	19.0	—	9.0	—
10	柏子所遺跡	—	—	—	—	20	野口Ⅱ遺跡	70.0	—	—	—

※ 番号13・16・17・19の出土遺跡は不明。

第2図 ヒスイの類例

漆紙文書が語る古代史

平川 南（国立歴史民俗博物館）

ただ今御紹介頂きました国立歴史民俗博物館の平川です。今日は、大変貴重な時間を私の講演にさいて頂きましたが、期待に答えられるかどうか大変不安です。この講演のきっかけは、秋田県埋蔵文化財センター所長の富樫さんから御聞きしたところによれば、昨年、朝日新聞の文化欄に書きました「象潟発古代の便り」という記事のようです。それは、秋田城跡から出土しました漆紙文書の中に、象潟に出張した秋田城の役人が、その現地から手紙を自分の勤務先に差し出して、その返事を象潟の駅の施設で待っているという、大変おもしろい資料がありましたので、その事を書いたわけです。今日はそういった事を中心にお話をということなので、準備していましたが、ここ10年近く多賀城跡の前面を宮城県と多賀城市によって大調査されていますが、先週、そこでもまた、とてつもない資料が出土しました。もう既に御覧になった方もおるかと思いますが、今日入り口の所に写真を展示してあります。新聞でも非常に大きく報道されましたが、駅家の馬の面倒をみたり、役人の身の回りの面倒をみたり、そういう駅家に従事する人を探るために、ある戸籍から無理やり引き抜いて、駅家の戸籍に付けられた29才の男性がいたという資料が出土したのです。こうした資料を我々古代史では、本当に待望していました。何と言うのでしょうか。大袈裟に言えば、古代の人民支配の根幹に関わるような大変貴重な資料であるという事が判りまして、先週それを公表しました。駅家の資料がまた一つ増えたと言えるかと思います。今日は、そういった話を中心に1時間半程頂きましてお話ししたいと思います。最初にスライドで見えていただきますが、今日、漆紙文書というものについて初めて耳にされる、あるいは、そういったものがどういう仕組みで残ったものを言うのか、その辺からお話した方がよろしいかと思います。

つまり、日本のような高温多湿な気候では、古代の紙がその地面の中に入ったならば大体は腐ってしまいます。よくテレビなどで見ますように、中国の北の砂漠地帯のようなところだと、木簡とかお経が砂漠の中、あるいは洞窟の中でそのままの状態が残っている事がありますが、日本のような気候の場合は、それが出来ないわけですね。私達が今から15年前に多賀城を発掘している頃は、まさか、その地面の中に古代の紙が残っていて、それが発掘で出てくるなどということは予想もしなかったのですが、調査していますと何やら木の皮のような、動物の

皮を糝シロしたような色をしたものに文字が書かれていました。日本では、ヨーロッパと違って羊の皮に文字を書いたりするような事はしませんので、文字が書いてあるとすれば、これは紙かもしれない。その動物の皮や木の皮のような色をしているのはいったい何なのか。それが、実は漆であったという事です。それは現在でも漆の工房へ行きますといつても見られるような光景です。漆を入れた木の桶には埃や塵が中に入らないように和紙で蓋をしておくのです。その和紙をきっちりと漆に密着させて蓋をしておきますので、その紙に漆が染み込んで、すっかり漆でコーティングされた状態になっているのです。実際に漆を使う時に紙を取って捨てるのです。そうしますとその紙は、地面の中でも漆が覆っているのですから残るわけです。現在日本では、6,000年前の漆が地下から出土しております。秋田県でも五城目町の中山遺跡という縄文の遺跡から漆が出ておりますし、全国的にもその時期のものが発見されています。ちょうど明後日から私の勤務先の歴博で「縄文・弥生の漆文化」という企画展が始まりまして、全国の縄文・弥生時代の漆製品が一同に会する大きな企画展が行われますが、一度機会がありましたら、是非それを見て頂ければ日本の漆文化というものがいかに古くからあったかわかると思います。現在、中国でも6,000年前の漆が出土しておりますので、今のところ日本と中国で同じ時期に出ているので、どちらからどういうふうにな漆技術が流れたかという事については、まだ、わからない段階です。そして漆が染み込んだ紙が腐らずに残った、ただ紙が残っただけでなく、その漆の蓋に使ったものは、現在のように紙の豊かな時代では考えられない使い古した紙です。役所で反古にした戸籍、あるいは、最初に申し上げましたような手紙、そういった帳簿とか手紙とかいろいろな文書をいらなくなると漆の工人に払い下げます。漆の工人がそれを使って蓋紙にしたわけです。ですから、それをきちんと解説しますと、そこには我々が予期しないような1,200年も前の古代の資料、生の資料が数多く発見されてくるのです。おそらく100近い遺跡から600点近い資料が見つかっていて、その中には今まで我々が眼にした事のないような資料が、しかも、それぞれの地域の歴史を見事に説き明かすような、あるいは日本古代史全体を大きく動かすような資料が毎年のように出ています。そういう資料の凄さ、威力をメインテーマとしてお話ししたいと思います。早速どういう物が漆紙文書なのかという事をスライドで見て頂きたいと思います。

〈スライド〉

御承知のように、漆は山野に自生しているのではなくて、栽培しないと漆液を採ることは、ほとんど不可能なのです。これは、岩手県の二戸郡の浄法寺町という所で漆を採っておりまして、現在全国最大の漆の生産地です。現在では、茨城県と新潟県の一部と、それから岩手県の二戸の3ヶ所しか漆を栽培していません。そこで生産される漆の量は日本で現在消費している量の2パーセントにすぎません。九十数パーセントは、中国から輸入した漆を使っております。

す。しかし、漆工芸の作品のようなものでは、上塗りにはすべて日本の漆を使うということです。漆は、その生産地域によって光沢などが違うといい、日本の漆が世界で最も美しい色を出すそうです。

〈スライド〉

これが漆の木です。ここに刻み目があってほしい十年位すると漆を採ることができます。畑の周辺に植えられ、漆が刻み目から垂れてそれをかき集めるという、まあ大変な手間暇かけたものですから、非常に高価になるのです。

〈スライド〉

集められ精製された漆を曲物の桶に入れまして、紙で蓋をしておきます。この縁のところは注意して頂きますとわかりますように、竹のワッパがきっちりとかかっており、漆がびっしりと紙に染み込んでいますね。今、漆塗りに入るので、工人の方がその紙を取り上げているところです。かぶれますから、手に付着しないように非常に注意しながら作業をいたしております。紙を取り去ると、精製された非常に綺麗な漆で、これはもうそのまま塗ることのできる漆になっております。

〈スライド〉

これが、その蓋をしていた紙です。必ず曲物ですから円形に漆がびっしりと付くことに注意して頂ければと思います。漆紙文書というのは、幾重にたたんで捨ててもそれを展開しますと、必ず円形になります。ですから、我々はいつも円形を想定して復元していきます。漆の染み込んだ所だけが残るのです。紙を円くして蓋をしたのではなくて、四角い紙を使っている。しかし、漆の付く部分のみが残るので結局円形になるということです。今の工人の方も、古代の工人も非常に丁寧な作業をしますので、竹べらで付いた漆を綺麗にかき取って、桶にもう一度戻しているのですね。それは、漆がいかに貴重かということです。ところが、こういう丁寧な作業をされますと、実は漆紙文書として出土したときには、非常にもろい状態で出てくるのです。例えば建物の柱などの下地塗りに生漆を豪快に使ってそのままその蓋紙を捨てますと多賀城の政庁から出土したもののように、その漆が分厚く付いたままになります。こういう物ですと紙の状態が非常にしっかりしているし、墨も良く残っているのです。秋田城でも政庁の近くから出土した物は、非常にしっかりした漆が付いていて本当に叩いても平気なくらい漆がかためられているという状態です。

〈スライド〉

これが、かき取って漆を戻しているところです。これは多賀城市の埋文センターで作られた復原資料ですけれども、文書を使って蓋をしたものです。「太政官符神祇官」と、発信先と宛て名です。これは、大伴家持の署名「家持」というのが入った宝龜三年の文書です。文書が一番

大事なのは、どこからどこへ、そしてそれが何年の文書であるかという事ですけれども、もし一枚の紙で蓋をしたとしたら一番肝心な部分は残らないということです。ですから、この中央の残った部分を読んで推定するという、そういう事を研究上やらなければいけないのです。ただし、これはいろいろな紙の蓋の仕方がありますので、ずれてする場合もあります。それはそれぞれの場合によって違います。

〈スライド〉

これは、水沢市教育委員会が胆沢城跡で発掘している状況です。今、調査員の方が手にしているのが何の変哲もないゴミ捨場から出土した秋田城と同じような書状です。非常に大きく径が30cmくらいあるような手紙を取り上げているところです。

〈スライド〉

丁寧に竹べらで漆紙の周りの土を落としているところです。周辺の土の色と、この漆紙の色はほとんど同じですので、よほど注意しないとこれをきちんと取り上げることはできません。

〈スライド〉

それを取り上げて綺麗にしたものがこんな感じになるのです。先程言いましたように、出土品も漆紙の場合はすべて円形に出てくるということになります。まわりは全部腐ってしまって漆の付いたところだけが円に残っていきます。しかも、この形状でもわかりますように、周辺に漆が厚く付着しております。

〈スライド〉

これは、茨城県石岡市の常陸国府の近くの工房、鹿ノ子遺跡から出たもので、ほぼ完形品です。先程のものと違って二つに折りたたんでいます。しかも、30cmの径を超えますので、二枚を繼いでおります。ここで二枚の文書が継ぎ合わされて蓋をしている資料です。非常にいい状態で残っているものです。

〈スライド〉

これは多賀城で、初めて漆紙文書に接触した所謂第一号のもので、これは、先程と違って、いらなくなった土器を使ってパレットにして、桶から漆を取り分け、そして、残った漆にたまたま紙で蓋をして、それが固まってしまったので土器ごと捨てたと思われます。それがやはりゴミ捨て穴から出てきたのですが、これは、字がほとんど肉眼で読めるものです。これを現在では、赤外線テレビカメラを使って解説作業をします。この設備は、秋田県でも県埋蔵文化財センターにありますし、秋田市教育委員会にもあります。ここに資料を置いて、赤外線の投光ランプをこのように当てて、それをテレビカメラでとらえて、テレビの画面にその模様を映すという仕組みで解説するのです。

肉眼よりもはるかに鮮明に解説できます。ここに「同月」と見えています。会場の入口にあり

ました写真はこういうテレビ画面を撮影したものです。

先程の、土器にくっついてた多賀城から出ました「計帳」は、文字が非常に鮮明に出ております。これも非常に墨の残りが良くて「子」、「月」それから「開」、「閉」、「開閉」という言葉が全部肉眼で読めます。今、これは拡大して映していますが現物は5cm位の小さなものです。

これもテレビカメラを通しますとこんなに綺麗に、先程読みました「子」、「月」、それから「開」、「閉」というふうに鮮明に読めるのです。界線が引かれているのが、良く見えるかと思えます。この線は、なかなか肉眼では見えないのですが、テレビカメラを通すと最初にこういう線を引いて書いた暦だとわかります。この5cm位の「具注暦」にはたった3日間しか出てこないのですが、月のちょうど初めの部分の解説と一日・二日・三日とこれだけありますと、これが西暦何年の何月の暦かということがわかります。これは宝龜十一年(780年)の暦です。宝龜十一年(780年)の十一月の一日・二日・三日ということがわかります。次のものも多賀城から出た資料で肉眼ではなかなか読みづらいように見えますが、これはまだテレビカメラを漆紙文書に使用していない頃に私が水の中で目をすかして読んだものです。「大領外正六位上勲十等丈部龍麻呂」と書かれていまして、ここの「龍麻呂」の部分が他にくらべて文字が大きいのです。これをちょっと拡大してみましょう。これが署名の右側の下に出てくる「實」という字です。これが実は、位置からいって年号ということがわかります。この「實」は、宝龜年間(770~781年)であることがわかります。

〈スライド〉

「外正六位上勲十等」、その下は「丈部龍麻呂」です。これは郡から国府である多賀城に差し出した文書です。ここの部分は郡の長官の署名です。そして、ここが郡の次官、二等官の署名の位置で、書記官がここまで書いて名のところをあけておくわけです。そこにサインをするのです。これが龍麻呂自身のサインです。ところで、次官のサインの部分は読めますか。「病」という字ですね。病気の「病」が書いてあります。だから、この人は病気の為にここにサインできなかったのです。書記官が「病」というように書いているのです。ここに「死」と書いてある場合もあります。それは、その人がもう亡くなってしまったということです。あるいは、京に向かうなんて書いてあります。出張中、都に行っている時は、ここに「向京」と書いたものもあります。

〈スライド〉

これが東南院文書を複製したのですが、ここの部分が長官、さきほどの龍麻呂の位置にあたり、この横が次官、ここが三等官、そして四等官と、一・二・三・四といわゆる四等官の書く位置が決まっています、ここに年号を書いています。

この記載様式がそのまま多賀城漆紙文書では、この年紀と署名部分という文書のうしろ部分

が残ったこととなります。

〈スライド〉

これは、秋田城の外郭東門のところから出た資料で「以解(もって解す)」と、この文言が使われるのは、下から上に上申する文書の最後に「解ス」と書きます。これは先程の文書にも出てまいりましたね。最後が「以ッテ解ス」と、年号と署名になります。秋田城のものは、どうやら国からさらに上に出されたものなのですが、何かの理由でその控えの方が残っていたものです。ここに「天平」という奈良時代の紛れもない年号が出てまいりまして、おそらく下に「宝」「字」という字が出て「天平宝字」(757~765年)となる資料です。

そして、ここが署名になります。職名が介、国司の介が出てまいります。これは、「百済王」クダラノコニキシと読みますが、名の部分は「三忠」です。ここの部分がサインになります。

この筆は鮮やかですね。「百済王『三忠』」というのは、後で資料を見て頂いてもわかりますように、当時の正史である『続日本紀』に「出羽介百済王三忠」という天平宝字年間の記事があるのですが、これは紛れもない「三忠」本人が書いたサインです。だから、漆紙文書では名前のよく知られているような人の自署が今後見つかる可能性があるわけです。坂上田村麻呂の自署も夢ではないのです。現地に当然そういう文書が残るのですから、これも百済王一族で出羽の国で活躍した百済王三忠の初めて登場した自筆のサインになるのです。大変立派な筆使いだということがわかりますね。

〈スライド〉

秋田城とか多賀城とか大きな役所だけではなくて、漆紙文書のもう一つの大きな可能性というのは、どこからも出てくる。集落からも当時の一般の農民の竪穴住居からも漆紙文書が出てまいります。これは宮城県川崎町というところの釜房ダムで埋没した9世紀の竪穴住居が1戸だけ出てきたのですが、漆紙文書の付着している土器です。ここに一緒に漆の製品が何点か出たと記録されています。須恵器の内側に紙がベッタリと付いております。

それを赤外線テレビカメラでとらえますと「自女」というふうに、これは女性の名前になります。そして、この文書には裏にも天地逆さまで字が左文字の状態で見えております。

一枚のスライドを反転させるとわかりますね。天地も逆さ「九九・八十一」とさらにつづいて「八」と出てきますね。「九九・八十一」「八九・七十二」と九九算が書かれていることがわかります。古代の九九算は「九九・八十一」から数えていく数え方ですので、いまのように「1×1=1」からではなくて、逆に「九九・八十一」「八九・七十二」というようにして数えていきます。

〈スライド〉

これは、多賀城から出た「征東使」、要するに「征夷大將軍」と同じ使い方で、宝龜年間の780

年前後に盛んに使われた重要な職名です。次にこれは正倉院文書です。今、漆紙文書をみておりますが、実はこの同時代の、今から1,200年前の文書で現在残っているものは、ほとんど奈良の東大寺の正倉院の中にいろいろな文書が保存されております。これは東大寺の写経所で整理した帳簿ですけれども、この帳簿は表が戸籍とか計帳とかで、それを反古したものの裏を使って簡単な帳簿を作っております。これは裏の継ぎ目のところですね。この継ぎ目のところにこのように「正七位上□□」と人の名前が書いてあります。秋田城で今回漆紙文書で初めて「継ぎ目裏書」と言われる継ぎ目と継ぎ目にまたぐようにして小さい字で書いたものが出土しましたが、その正倉院の例です。ちょっとこれを頭に止めておいて下さい。

〈スライド〉

これは正倉院文書の複製品ですが、休暇願いですね。新羅飯麻呂という人が「私のおじさんが重い病にかかって立つこともできないので看病したいから休暇を下さい」と自分の勤め先に差し出した文書で、4日間の休暇願を天平宝字二年三月十五日に出したものです。

〈スライド〉

これは、写経生の試字で写経する人の採用試験の答案です。写経生候補はお経を2・3行ずつ写させられて提出するのです。答案用紙に未定とか不定と書いてあります。この人達はおそらく採用されなかったのでしょう。我々が見ると何でこんな立派な文字を書いているのに不採用なのかとついつい思ってしまうのですが、実は皆これくらいの字を練習すれば書けたわけです。

〈スライド〉

この隠岐国正税帳は、正倉院文書の中で天平期の代表的な役所文字です。実に鮮やかなしっかりした筆ですね。天平時代の書、国府の役人が書く文字の一番典型的な例です。拡大しているのでもうしろの方（聴衆）もよくわかるかと思えます。非常にしっかりした筆です。

〈スライド〉

これが今日紹介します計帳です。戸主の部分が一段高くなっていますね。ここが息子さんと、孫で、これで姪というふうにかかれていて、名前と年とその人の年齢の区分とそれから右の腕にホクロというふうにかかれてあります。鼻の上にホクロとか額にキズとかそういう身体的な特徴まで書いてあります。だから、逃げたりするとこれを手掛かりにして捕まえらるるのです。そういう住民台帳です。この計帳が漆紙文書としてあちこちから出土してきています。

〈スライド〉

これも陸奥国戸口損益帳という戸籍の関連帳簿です。

〈スライド〉

これは、正倉院文書ですけれども、正倉院から外へ流出してしまった文書で丸部足人解とい

う有名な文書で現在行方不明です。天平宝字四年三月十九日付のこの丸部足人解の中に「阿」阿部の阿、「支」支えるという字、「太」太い、「阿支太」城、これが秋田城の初見資料です。この天平宝字四年の文書は、越前国の人を米を本来は都に運んで行かなければならないのだけれども、秋田城へ米を運んで行くのに忙しいから行けないのだという詫言ひみたいな書類なのです。この文書から天平宝字四年に盛んに越前の方から秋田城に米を運んでいることがわかります。これは、おそらくこの時に山羽藩から秋田城にかわるのに伴い、秋田城の造営修理工事が行われている事を示す重要資料なのです。残念ながらこの資料は現在行方不明で、これはかつて展示会に1回出て、それが絵葉書で残っていたものをそのまま撮ったものです。以上でスライドを終わります。

最初に随分と内容に入ってしまったので、おわかりになれないところもあったと思いますが、今のスライドを見て頂いて漆紙文書というのは、大体どういうものなのかおわかり頂けたと思います。これからお手許の資料にそって説明したいと思います。私のプリントは全部で7枚あります。その最初のプリントは地図になっておりますので、これは参考に見て頂ければよろしいです。2枚目の資料を見て頂けますか。先程ちょっと紹介しました秋田城の外郭の東門から出た資料で、全国で初めて継目裏書といわれるものを検出した例です。この継目裏書について説明する前に、戸籍と計帳について説明しますと、戸籍は6年に1度作る住民の台帳です。計帳は6年間にどう人が移動したかわかりませんので、毎年この住民の台帳を作っておきます。当時の行政区画は四の下に郡があって郡の下に郷ですね。その「郷(さと)」の下に一時期だけさらに小さいサト「ござと(里)」をもうけた時期があるのですが、これはその時のものです。戸籍とか計帳は、その郷単位に一巻ずつになっているのです。いまでいえば、村ごとに一つの巻物に戸籍が作られ計帳が作られているのですが、最初に紙を全部必要枚数を継いでおくのです。そして、必要枚数を継なくとその裏に勝手にはがして一枚入れたりされないように継目の部分に計帳を作成する役人が、その署名を書いておくのです。出羽国出羽郡どの郷の何年の計帳か、誰がその担当だったかということを書いた紙の継ぎ合わせのところに書いて、継ぎ目の裏に書くから「継目裏書」というように呼ぶのです。この継目裏書がなぜ重要かと言いますと、例えば戸籍は一郷単位でも数メートル以上になります。その長い戸籍の部分が出土してもそれが何年の戸籍か、それからどの郡のどの郷のものか、途中が相当の長さ出土してもわからないのです。

ところが継目裏書の部分がほんの数センチでも残っていたらここには要約した内容が書いてあるのです。つまり、「山羽国出羽郡井上郷天平六年七月二十八日」というように書いてあります。これは、ずばりその帳簿が何の帳簿かということが年紀とともにわかります。なかなかそういうものが見つからないのですが、今回非常にうまいところが残ったわけです。これを見ま

して皆様「あれ、帳簿なのに一日・二日・三日なんて書いてある。おかしいな」と思いませんか。実はこれは、表が「計帳」で裏は「暦」です。これは天平六年七月に作った、西暦733年の計帳を書いて、それから重要な台帳ですから二十何年間保管しておいて、天平宝字二年の戸籍を作る年にこの計帳を廃棄して、そして翌年の暦をその裏に書いた。だから、継目裏書と暦が同じ面に出て来ているのです。まず、はじめにこの継目裏書の部分は暦にともなう書き込みと考えます。これは一日と二日の字の間隔と二日と三日の字の間隔を見れば違いが分かりますね。暦というのは一年間全部同じ間隔で書いてしまうわけですから、この間隔は同じなんです。継目裏書のある一日と二日の間隔がこだけ広いということは、先に文字(継目裏書部分)があったからそこを避けて一日・二日・三日と書いたということです。この継目裏書によってこれは、ずばり出羽国出羽郡井上郷の某里の天平六年七月二十八日に作成した計帳であることがわかりました。この出羽国出羽郡井上郷はどこかといえますと、最初の地図を見て下さい。出羽国出羽郡というのは、出羽の国府が秋田城以前にあったところですよ。今の庄内地方酒田の辺を指します。この計帳は、現在の山形県酒田市の辺の計帳であることがわかります。そしてこれは天平五年の計帳ですから、これを作成したのは秋田城ではないのです。御承知のように秋田城の地に出羽柵が移るのは、天平五年の十二月に許可が出てますから、おそらく六年に正式に移ったと考えられています。すると、この計帳を作成したのはどうやら秋田城の地に移る前の役所ではないか、つまり庄内地方にあった最初の出羽柵で作成されたものを、国府の秋田城に移したもので、今だって市役所を引っ越したら住民台帳みんな持っていきますよね。それと同じことで、これもそういう理由で移したと考えられます。

それから3枚目の資料を見て下さい。いくつか重要な資料がありますので、簡単にながめていきたいのですが、これが秋田城で出土した百済王三忠のサインの文書です。先程言いましたように、これにも天平宝字という年号が入っていますので、先程の暦の年代と同じです。暦は使うとすぐに捨ててしまうのです。現在でもカレンダーを取っておく人はいないですから、当時からカレンダーは使ったらもうその年で終わりです。翌年にはおそらく捨てられてしまって、漆の工人が漆の蓋紙に使ったでしょう。この文書もやはり天平宝字年間の通常の文書ですから同じようにして捨てられたことがわかります。「守」とか「介」とか、国司の一等官・二等官に、中央の貴族の中でも百済王の一族が出羽国、陸奥国に大勢赴任してきております。これは御承知のように朝鮮半島の百済の王族の一族だという人達が日本に渡来してきて、そのまま中央政府で重要な地位について、そして出羽国とか陸奥国の国司として赴任してきているのです。その中のこれはまぎれもない百済王三忠のサインです。その百済王の一族で一番有名な人物がおります。天平二十一年に東大寺の大仏鑄造の際に金が不足したので、陸奥国から900両の金を東大寺に寄進します。その時の陸奥守が百済王敬福という人物です。その百済王敬福という名前

が書かれた漆紙文書が多賀城市山王遺跡で出土しております。ですから先程言いましたように、今後発掘調査で誰のサインが登場してくるか非常に楽しみなわけです。

今度は4枚目の資料を見て下さい。秋田城から出ました書状です。手紙です。これはおそらくこれまで出ました全国の漆紙文書の中で、これほど鮮やかに一通分の手紙が残っていた例はありません。これはほぼ完全な一通に相当します。正倉院の中に文書がたくさん残されているのですが、実は正倉院文書というのは、残そうとして残ったのではなく、全国の戸籍や計帳などいろいろな重要な台帳や財政報告書を、先程の計帳の裏に層を書いたものと同じように、中央の役所が東大寺の経を写す役所に払い下げたものです。その払い下げた戸籍などの裏を東大寺の写経所の帳簿として使ったのです。それを正倉院の片隅に保管しておいたものが現在伝わり、「これは美濃の国の戸籍だ」とか、「これは筑前の国の戸籍だ」とか言って今古代史の基本資料になっているのです。

ここで、その正倉院文書を一通紹介しておきましょう。スライドでご覧になってわかりますように、ほんのりとピンクがかってます。後ろの方わかりますか。これは休暇願いで出した書類ですから、すぐに廃棄になるのです。その反古紙は画師に手渡されたいのです。この飯麻呂さんは画師なのです。朝鮮半島の新羅から来たと思われます。新羅の飯麻呂さんは「自分のおじさんが重病だから看病するために4日間休暇をください」と言った役所に提出した休暇願いののですが、この休暇の日数の「4日間」という所を消して「3日間」に直してある休暇願いも正倉院文書の中にあるのです。だから、申告してもよくあるのです。「腹が痛いから休ませてくれ」とかね。何回もおじさんを殺してみたり、今とたいして違わないのですけれども、役所で直した跡があるものもあるのです。これはまあ申告通り4日間で通ったでしょう。この休暇願いはいらなくなった後、和紙は柔らかいので赤い顔料を包んでおいたでしょう。ピンクがかった綺麗な赤が残っているのです。この休暇願いと秋田城から出た手紙は、行数といい大きさといふ変わりないですね。このような重要な資料がゴミ捨て穴から出土するのです。古代人が漆の蓋紙にして、捨てたものが今再び日の目を見ているのです。秋田城の手紙は非常におもしろい手紙の内容になっております。おそらく、最初にはここが欠けていますが「謹んで啓す。勘取釜一口、南大室に在り。右の外、もし忘息未収のものあらば乞う早く勘取せしむべき」、その次はちょっと欠損し、わからない部分があるのですが、「恩得に従いて国の使いに便付す」、「徳縁謹んで啓す」というような形に書かれています。わかりやすく言いますと「釜一口」は、おそらく鉄釜か、銅釜でしょう。象潟周辺は日本海側沿岸部ですから、まず考えられるのは、やはり塩釜となります。塩釜とは、あらかじめ土器などを使って海水を熱で蒸発させて作った、まだ水分を少し含んだ塩の塊の最後の水分をとばす役割をするものです。当時の文書によると、径は非常に大きいが、深さ3cm位の浅くて真っ平な大きな釜です。その釜は鉄釜

にしても銅釜にしても、国府の大事な備品になるわけで、そういうものの検収のような形で役人が出掛けて行った。その役人が1つは任務を終えたけれども、まだ、この他に「忘怠未収」に「忘れたり、怠ったりしているものがあるのではないか。そういうものがあつたら早く命令して下さい」ということを自分の役所（秋田城の介館）にもう一度、問い合わせを出したのです。ところがこれは、国の使いに「便付」とありますように、自分自身が行くのではなくて、たまたまその国の中を巡っている国の使いにこの手紙を託して、勤め先の指示を仰ぐのです。日付は、五月六日卯時とありますので、午前ちょうど6時前後でしょうか。朝一番ですね。朝一番便で蛸形（象潟）の駅家より「申上す」というように書いてあるのだと思います。どこから何時に発信したかきちんと記録されています。彼本人はどうしているかというと駅家でその返事を待つのです。駅家というのはまず交通のステーションとしての役割ですね。次に郵便を出す郵便局、ポストオフィスの役割もしています。しかも、そういう手紙の返事を待つときに発信した象潟の駅家で待機しています。駅家は実は、宿泊の施設でもあるのです。駅家には宿泊するための立派な施設もあったと考えられるのです。ですからステーション兼ホテル、そしてポストオフィスまで兼ねている。それが、実は駅家の多目的な役割なのです。この象潟の駅家も日本海側の官道が発見されたならば、おそらくその道路の延長線上に駅家の施設が発見できるでしょう。

山陽道は、当時大陸からの使者が大宰府から都まで通る一番重要な道とされたのです。ですから「山陽道だけは、駅家の建物も瓦葺きにしないで。それから障り壁にしないで」というように外国の使者が来た時に日本の道路網がいかに整備されて駅家が立派かを見せるために特に飾ったようです。他の道では、おそらくそこまでしないとします。しかし、北陸道も最近富山県で発見されましたし、それから新潟県の八幡林遺跡では「大家駅」という墨書土器が出土し、どうやら官道は日本海岸の海岸線を通っているのではなくて、強い日本海からの北西風をさけるために内陸部を通っていたようです。新潟までの道路が段々わかってきていますので、今度は秋田城と庄内地方を結ぶ由利地方を通る道をうまく探せば、その道沿いに大きな施設が発見されるでしょう。この象潟駅家が発見するというのも大きな一つの夢になってきたわけです。そこを発掘すると案外、竹田某の涙が落ちているかもしれません。さてこの竹田の某というこの手紙を差し出した人は何という名前だったのでしょうか。そこに「竹田繼□」まで読めるのですが、その下が「繼依」ではないかと考えているのですが。ところで、この手紙でおもしろいのは外側、これがおそらく表（おもて）になりますが、表に「介館の務所竹繼状す」と書いてあります。実は、これは漆紙文書ですけれども、宛て名が綺麗に残っているのですよ。宛て先はどこか、「介館の務所」です。「介館」は、秋田城にいる国司の二等官・介である「介の館」。その館の政務を預かる所、それが「務所」と言います。今の務所という表現とは違いま

す。「介御館の務所」そして「竹継状す」と竹継がこの手紙を差し出しました。「竹継」竹田の継依、略して「竹継」というのです。今の屋号みたいですね。「渡辺惣左エ門」なんていう人を「渡惣」とか言いますね。その言い方は、古代では随分頻繁に行われていることがいろいろな史料でもわかっています。というのは、この手紙は、竹継さんって言ったら誰かわかる所へ出すのです。だから、古代では手紙というのは、公文書なのです。これも公務にかかわる手紙ですから、公文書ですけれども、やはり手紙はプライベートなものだということなのです。だから普通の役所同士が、やりとりする文書では絶対にこんな省略はしません。これは、あくまでもこういう手紙だから竹田継依が「竹継状す」と書いているのです。つまり、自分の勤め先の役所に出すので、自分の愛称なのか略称を書いて出しているわけです。もう一つこの書状でおもしろいのは、写真のコピーですわかりづらいですが、例えば「館」(たち)という字がありますが、その「館」の字の半分がありませんね。下が切れています。それから、右側に何やら字が切れておりますね。「務所」と「館」の右の所に墨がありますね。これが実は「封」という字です。封書、封緘という言葉がまだ残っていますね。封筒の封ですよ。その封はこの時代でも手紙の封印として最後は必ずその「封」というふうを書くのですが、その「封」の字の真ん中が抜けています。しかも、その「封」の字のツクリがありませんね。ヘンだけです。実はツクリはその務所と館の左側を見て下さい。左側の方に「寸」というツクリの部分が一部みえます。「封」の字がヘンとツクリに半分にわかれているのです。これはどういう現象かということ、それで復元がはじめて意味をもっているのです。つまりこれによって1200年前の手紙を何センチの幅でたたんだか、どういう綴じ方をしたかが、実は復元できるのです。これは後で家に帰ってから実験して下さい。当時の手紙は1cm幅で下から中ほどの位置まで切って、それを帯にしてくるっと回して、その上から「介御館」と書いて裏に「封」と帯の上から書いたのです。そしてこの帯を当然開いたときに、この帯のところがちょうど1cm幅ですっぽりと抜けているわけですね。しかも、ここで半分位折りたたんだところで「封」を書くとはヘンはこちらの方、ツクリは別の方となり、開いた時に、「封」の字のヘンと、ツクリが離れ離れになってしまうのです。この手紙は2cm幅で折りたたんだことがはっきりと証明できるのです。これは、そういう面でもたいへんおもしろい資料で、しかも、この竹継は、昔、我々も子供の頃母親から頼まれたことを「あゝ、わかった。わかった」という感じで出かけたけれども、途中になって何か1つくらい忘れて慌ててもう1回聞きに戻ったなんていう経験がよくありますが、それと同じなのです。粗忽な役人ですよ。きちんと用事を聞いていなかったから、「1つやっただけでも、まだあるかもしれない。忘れていたら早く指示を下さい」なんてことを、これはもう役人としては失格なので、多分怒られたのでしょう。役所から命令が来るのをじっとこの象潟の駅家で、五月ですから寒くはないのですが、待ったのでしょうね。その命令が来るまでは帰れ

ないのです。このようなものは当時の政府が記録した『続日本記』や、あるいはその他の記録にとどめるべきものではないのです。それが、こういう漆紙文書で鮮やかに蘇ってくるのです。漆紙文書がいろいろな所から出土していますが、7枚目の資料を見て頂ければわかりますが、弘田柵跡でも内郭の南門近くの調査で、まぎれもない漆紙文書が出てまいりました。こういう資料は1点出るとどんなに小さい破片でも、それが呼び水のようになって資料が増えてくるので、これから弘田柵跡でもあるいは秋田県内の集落遺跡でも出てくると思います。どういった遺跡から出土するか予測がつかないのです。弘田柵跡の漆紙文書で「轡轡」という言葉がはっきりと出てきたのには、非常におどろきました。何のどういう類の物品を書き上げた文書かわかりませんが、書体はかなりしっかりしておりますので、きちんとした公文書です。もっとたくさん残っていればいろいろな事がこういった資料からわかると思います。少なくとも弘田柵跡でも漆紙文書がはっきりと登場してきたのです。そして、今回駅家のことをお話するつもりでいましたら、冒頭に申し上げましたように、つい最近多賀城の山王遺跡からまた駅家に関する重要な資料が出土しました。この資料がいかに重要かということを説明したいと思えます。

先程、これは古代史の待ちに待った人民支配の根幹にかかわる資料だという非常に大きな表現をとりましたが、まさにそういうのにふさわしい資料です。前半部分と後半部分がありまして前半の某戸の尾部と一応考えられる部分には、その世帯の移動を書いています。そこに上件十二口、白万呂に従って来附すと書いてあります。おそらく白万呂さんにくっついて12人が移動してきた。この戸に新しく加わったということを書いているのです。当時は調とか庸という税を納めたわけです。成人男性を対象にしたいわば課役ですね。一方その税を納めなくていい人は、まず6才以上の老人、ここでは耆老と書いてありますが、この人が一人、それから嬰兒、赤ちゃんも納めないでよいと。それから小子、4才から16才の男の子の場合は、課役の対象にならない。女性の場合は課役をまったく納めなくてよいということで、6人はそれを納めなかった。男性が4人、女性が6人合わせて10人は、その課役を免除されたということが書いてあるのです。「陸」という字を書いてロクといいます。これは大字書きといい、正式な公文書の場合は数字をこういう字で書くのです。今でもきちんとした書類には、「武」「參」と書きますね。戸主財部小里というのが一段上がっています。さっきスライドで「これを覚えていて下さい」と言いましたように、戸主のところだけ一段高く書くのです。当時の帳簿は行頭の段で区別しておかないと非常に混乱してしまうのです。「戸主 財部小里 伍拾伍歳」これが戸主です。それから妻が「財部古弥賣 年伍拾肆歳」1つ違いの奥さんがいて、子供が得麻呂武拾玖歳、真得武拾伍歳、それから娘さんが得刀自賣拾伍歳、それからもう一人娘さんが真得賣拾玖歳というふうにご麻呂、真得、得刀自賣、真得賣と、何かしりとりたい名前前で、かなり横着な名前

の付け方だというのがわかりますね。ここで問題は、得麻呂貳拾玖歳という成人男子、この戸にとっては一番の働き手ですね。人名の下に「驛家の里、戸主丈部祢麻呂に割附して戸と為す」つまりこの戸籍のところは驛家の里ではない。財部小里の戸にいた得麻呂は、そこから引き割かれて、驛家の里の一員として戸主丈部祢麻呂という人の戸に付けられたことが、ここに注記してあるのです。そして、得麻呂と割附との間のところに変な黒い印がありますね。これはキズではないのです。墨でチェックマークが入っているのです。これは他の帳簿と照合した印です。

これがなぜ重要かといいますと、実は当時の主要幹道ですね。都を中心に地方に放射状に幹線道路が整備されたのはおそらく7世紀でしょう。日本の古代国家の体制が整うと同時に、都と地方を道路によって結ぶことは行政上や軍事上でも大切です。中央の命令が地方へ、また地方で何か一大事が起きたときには中央へ情報が素早く伝えられるように、駅制が整備されたのです。そしてその道路が整備され、三十里に一駅が当時の規定ですので、これは地形にもよるのですけれども、一応現在の16kmに一駅の割合で駅家が置かれたのです。その駅には、馬を何匹というふうに決めて置いていたのです。出理の駅家ですと12匹です。それから象島の駅家でやはり12匹、遊佐駅に10匹、秋田で10匹というふうになっています。馬を常備して、一大事にはその馬を乗り継いで都に知らせを届けるのです。これは例えば大宰府で何か一大事が起きたとすると、都から670kmもあるところをわずか4日位でその知らせが届くのです。ちょうどあの赤穂浪士が、早馬で赤穂に馬を乗り継いで行くようなもので、おそらく陸奥国と都では千四百何十里もあるのですが、それでもだいたい8日7晩かかれば行きます。ようするに緊急の時は馬がつかぬないようにどんどん乗り継いで行くのです。それは一番緊急の時で、通常の場合はそれほどスピードをださなくてもよいわけで、1日七十里というから37km位です。駅家では馬を飼育して役人が来たら馬を出す。駅から駅に早馬が立つときには駅子がついて行き、帰りに馬を引き連れてこなければならぬのですから、駅家は大変なのです。駅子の役割としては馬の世話、それから役人が通る度に身の回りの世話をします。また滞在している者の身の回りの世話もします。得麻呂という成人男子29歳がおそらく突如引き抜かれて、その駅家にくっつけられたのは、緊急時に際して必要となり駅子として駆り出されたのでしょう。もちろん駅子になると調・庸は免除になるのです。ですから、逆に言うと暇な時にあまり駅子が多いとそれだけ国庫収入が減ります。成人男子から調・庸を取るか、雑衛を取るかということは重要なことです。駅家の用務がないときには大勢いたのでは困るので、その時はもとの戸に戻すのです。ですから必要があれば増やす、必要がなければ減らす。実は駅子と言うのは、そういうふうにして維持されていました。駅家に従事する人達は、その仕事量によって駅子になったりならなかったりしたのではないかと、最近、研究者は考えるようになった矢先なのです。そういう論

文も発表されています。この計帳は見事にそれを証明する資料です。財部得麻呂、二十九歳はこの小里の家から引き割かれて駅家の文部得麻呂の家に移住する必要はないのです。これはおそらく戸籍上、駅子として指定されていますから、次の戸籍では駅家の里の戸籍で文部得麻呂のところを見ると財部得麻呂と入っているのですよ。戸籍だけの操作でいいのです。実は古代の戸籍はそういうものなのです。非常に政策的にこっちへつけられたり、あっちへつけられたりします。ですから戸籍を見て古代の集落をそのままイメージしても、必ずしも実態通りこの人達が一緒に住んでいないことがここからわかるわけですね。戸籍を作る事を「編戸」といいます。「へんこ」とは編集の編に戸。その状況に応じて編んでいるのです。あるときは成人男子がある戸主についているし、またあるときは他の戸主についているというのが日本の戸籍の実体なのです。戸籍はそのまま古代の集落を反映しておりません。このことは考古学的に集落を見ていく一つの大きな注意点であるし、我々が古代の家族を見ていくときにもそういう注意が必要です。それを一番端的に示したのが神社の神戸で、神社を支える人的・経済的基盤として指定されるものです。駅家の駅子も実はそうなのです。駅を経営する為に割り当てられるという事です。

このように見ていきますとたったひと月の間に、また一つ古代史に重要な資料を提供するという感じで、これはとどまるどころを知らないのです。そして、先程見ましたように漆紙文書というのは漆の作業の過程で蓋に紙を使い、その紙は役所の払い下げであってもいいし、あるいは市場に行って買ってきた紙でもいい。しかし、その99%は白紙ではなくて大半は使い古した役所の紙が使われている。それを解読することによって、また一つ地域の新しい歴史を考えていく材料が提供できるわけです。それがまさに漆紙文書の威力です。そして大事なのがこれらがいずれも都に提出された書類ではなく、地方にとどまった書類なのです。さきほど疑問に感じたかもしれませんが、出羽の国司、介とか守のサインが入ったものが秋田城から出たのは、実は提出していない控えの方なのです。戸籍にしても計帳にしても都にいかないものが残るので、それは逆にいえば地域に非常に密着した資料が出土するという事です。生の資料を我々は難いでいく。遺跡の考古学的な発掘調査とからめて考えていけば、これまでの正史1本、中央政府が後世に残そうとした記録をもとにした日本の歴史・古代史がやがては、我々のまさに手作りの古代史を築いていけるのではという、大きな可能性を秘めています。その一つが漆紙文書であろうと私は考えているのです。早くから漆紙文書についてもっと一般向けに普及版、入門書のようなものを書くべきであるといういろいろな方からすすめられていました。しかし、自分としては学問的にまず漆紙文書というものをきちんと位置付けたいということから、拙著『漆紙文書の研究』（吉川弘文館、1989年）をまず書いたわけで、最近になりそれをもう少し一般の人達にわかりやすい形で普及版を書きたいと思うようになり、やっと原稿ができあり、今

提出しておりますので、近く年内には刊行されると思います。岩波新書『よみがえる古代文書』を是非読んで頂ければ、今日のお話をさらに理解して頂けるだろうと思います。非常に大きな可能性を持った資料を紹介して、私の講演を終わらせて頂きます。

次頁以降に提示の資料は、講演会当日配布された資料を基に秋田県埋蔵文化財センターが編集を行ったものである。資料に引用した文献は以下のとおりである。

資料No 1 木下良「国郡制と交通路」『日本歴史地図 原始・古代編(下)』柏書房 1982(昭和57年)に加筆

資料No 2 第九号文書は、秋田城跡調査事務所提供の写真をトレース(平川南氏原図)

資料No 3 秋田城跡調査事務所『秋田城出土文字資料集Ⅱ』秋田城跡調査事務所研究紀要Ⅱ 1992(平成4年)

資料No 4 資料No 3と同文献

資料No 5 多賀城市教育委員会『山王遺跡-第17次調査-出土の漆紙文書』1995(平成7年)に加筆

資料No 6 菅原弘樹「方格地割と遺跡の性格」『第20回 古代城柵官衙遺跡検討会資料』1994(平成6年)

資料No 7 第1号漆紙文書:秋田県教育委員会「第93次調査」『弘田柵跡-第92・93次調査概要-』1993(平成5年)

出土位置図:秋田県教育委員会『弘田柵跡-第94~97次調査概要-』1994(平成6年)の第4図に加筆

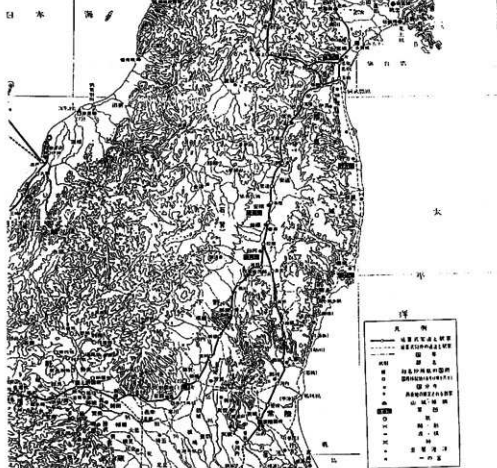
※弘田柵跡ではこれまで遺構群を囲む施設として外郭・内郭の呼称をしていたが、これまでの調査成果を踏まえ、平成7年からそれぞれ外柵・外郭と呼び替えている。従って91頁上から4行目の「内郭の南門」は現在「外郭の南門」と称している。なお、資料No 7のキャプションは現行の呼称で表記してある。

(編集係作成)

資料No. 1

国郡区の編成と主要施設・交通
— 東北 —

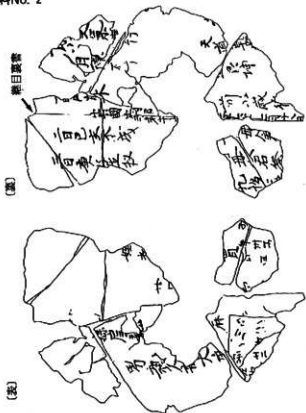
山羽国佐倉駅は駅馬4疋、駅船10隻を備え遊馬駅は駅馬12疋の他に伝馬1疋、伝船6隻、野尻駅は駅馬10疋に伝馬3疋、伝船5隻をそれぞれ備えていたので、この区間は最上川の舟運が利用され、特に陸路の困難に不便な遊馬・佐倉間は水運が主体となっていたと考えられる。また、白谷駅も駅馬7疋の他に伝馬3疋、伝船5隻を備えていたので、白谷・秋田間で雄物川の水運も利用されていたと考えられる。



凡 例	
——	主要国道
---	支線国道
—	府道
—	町道
—	村道
—	支線町道
—	支線村道
—	支線支道
—	支線支路
—	支線支溝
—	支線支渠
—	支線支溝
—	支線支渠
—	支線支溝
—	支線支渠



資料No. 2



(a)

(b)

(紙巻月風巻)

〔出羽國出羽郡井上郷〕

天正六年七月廿八日……

秋田城跡 第九号文書 (針織・具注願)

年	代	通巻
1	大化	2(644)
2	白雲	3(652)
3	天智	9(670)
4	神統	4(680)
5	神統	10(690)
6	大和	2(702)
7	和銅	1(708)
8	和銅	7(714)
9	聖武	5(721)
10	神龜	4(727)
11	天平	5(733)
12	天平	12(740)
13	天平	18(746)
14	天平	3(752)
15	天平	3(758)
16	天平	3(764)

天 平 5 年 (733) 針 織
天 平 宝 字 3 年 (758) 具 注 願

天正五年(七三三) 右京針織 (正倉院文書) (番号)

課(是)兼(宅)收(赤)年(辰)拾(区)了(去)期(是)
身(轉)人(習)修(七)年(禮)佛 (正)寺(別)成

慶長五年(七二二) 下總国葛飾郡大網郡戸籍 巻目裏書 (正倉院文書) (番号)

下 館 山 葛 野 寺 大 島 評 卷 長 五 年 六 萬 五 千 九 百 五 拾 五 也 佳

資料No. 4



(赤外線テレビカメラ写真)



勅 委 署 口 在 南 大 奈 若
 因 因 者 者 王 家 奉 役 者 之 旨
 令 旨 物 取 願 願 得 得 竹 田 口 口
 國 國 書 書 書
 五 月 六 日 時 日 影 影 影 家 山 上
 竹 田 口 口

封
 令 御 願 願 願 竹 田 口 口

秋田城跡 第一〇号文書と書状復原図

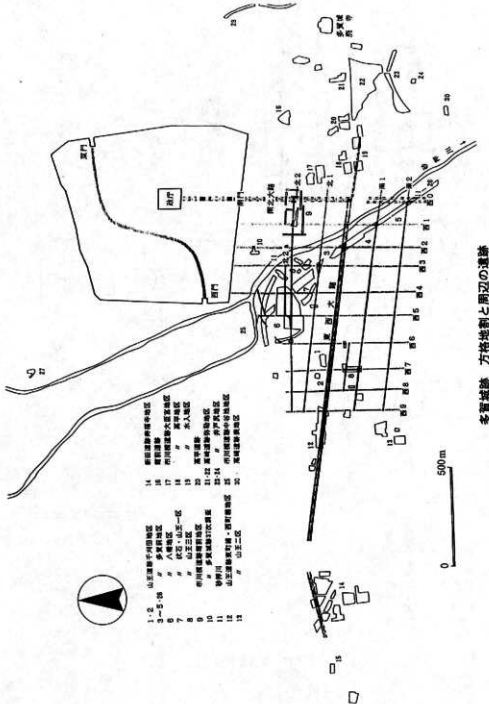
資料No. 5



〔男群部得麻呂年貳拾玖歳
割附群家里戸主文部得麻呂為戸〕

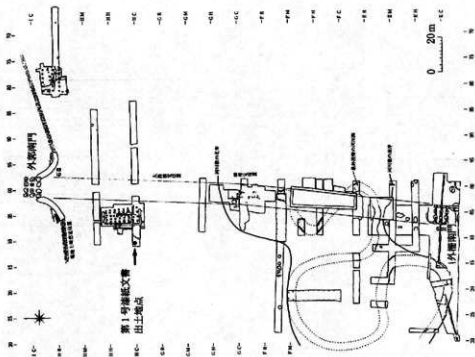
山王遺跡 3号文書見取図

資料No. 6



多賀城跡 方格地割と周辺の遺跡

資料No. 7



第1号漆紙文書

弘田補跡 第1号漆紙文書出土位置図

発行 平成8年3月

秋田県埋蔵文化財センター研究紀要 第11号

発行 秋田県埋蔵文化財センター

〒014

秋田県仙北郡仙北町払田字牛嶋20番地

電話 (0187) 69-3331

印刷 株式会社 三戸印刷所

〒010

秋田県秋田市旭北錦町3-50番地

電話 (0188) 23-5351

